

今帰仁王子

太政大臣三条実美殿

文書原寸 縦一六種 包紙原寸 縦三三・五種

横一三二種 横 二四種

三〇 久光公ヨリ岩倉右府へ 草案

左大臣辞職許可ノ件

秋冷増加之候、弥御安泰御奉務奉大賀候、然ハ昨日は辞職願之通被 仰付、別而難有仕合奉存候、偏ニ 貴公之

御周旋之故ヲ以、速ニ 御允許被為 在候御事と奉恐察

候、為御礼早速參殿可仕筈候得共、病夫不能其儀、乍略

儀以愚札御礼申上候間、御序之節可然様御執奏被成上度

奉伏願候、右申上度如斯御座候、恐惶謹言、誠惶敬白、

月日 島津久光

右府公閣下

侍史

副書ヲ以啓上仕候、本書ニも申述候通辞職願之通被 仰

付、愚癡固陋之病老夫、内外紛紜之時世迎も尽力難行届

心痛仕居候処、貴公之御周旋ヲ以速ニ 御許可被為在、

別而難有仕合感佩之至ニ奉存候、則宿痾頓ニ快然之気色

ニ罷成、蒼天ニ雲霧ヲ払ヒシ形勢御座候、於政府も頑陋

之邪魔物御同席ニ不罷居、賢明英傑之公卿方々中同心協

力外国対峙、士民安堵快樂、真之文明開化之御美政御施

行可有之と拭目屈指奉待候、先ハ右旁乍贅言如此御座候、

頓首再拜、

文書原寸 縦二・五種 横三四種

三一 山階宮見親王ヨリ島津前左府公へ

時候御見舞及左府辞職ノ件

(封筒) 島津前左大臣様 晃

(封紙ウラ書) 島津二位様

侍史中

晃

冬景日／＼増進候、弥御勇健奉大賀候、寔乍例御不沙汰
恐縮仕り候、此一折時令御見舞申上候驗迄二奉進上候、
御咲納被下候ハ、本懐深々畏入奉存候、尚期拝参日候
也、

亥十月廿九日

敬白、

二白、不序之時令折角御厭伏願候、新聞誌上二而左
府御辞退承候、驚入候、併万／＼御深意被為在候事
哉ト奉存候、乍恐 国家之事乍蔭宜奉願上候、見推
参仕り御咄申上度も御座候へ共、人心如何ト先々差
扣居候、御洞察可被下候、恐々、

文書原寸 縦一六・五種 封筒原寸 縦一八・五種

横四四・五種 横 五・五種

三三 山階宮見親王ヨリ島津従二位公へ

時候御見舞

(封紙ウラ書)
島津二位様

見

玉案下

日々寒冷相成候、弥御安全奉大賀候、見無事乍憚御安慮
可被下候、此一折不珍候得、時令御見舞申入候印迄二令
進上候、御笑納被下候ハ、忝奉存候也、

十月廿九日

敬白、

過日は今戸宇和島亭エ東伏夫婦・伏水・見・定丸五
人参会候、新宅美麗、洋器羅列、歎娛如天堂、近比
之散悶仕候、御一笑ニ御噂申入候也、

文書原寸 縦一七種 横五〇種

三三 都城人柴田東五郎探索事情

久光公廟堂ヲ退カル、ノ件

都城町人柴田東五郎、三十年前ニ脱走シ旧幕旗本田中一
郎右エ門ノ家来トナリ、今小石川ニ住シ、故旧ヲ忘サル

者ニテ、昔日ヨリ天下ノ事情ヲ觀察シ、幕政中ニモ専ラ
 旧古ヲ遺レズ、先年旧主江戸役務ノ時モ蜜事ヲ告テ用ヒ
 シコトアリ、毎ニ北郷申吾宿所ニ来リ交情アルニヨリ、
 当今ノ情態ヲ探索シテ知ラシメヨト託シヲキタレハ、近
 頃云フ、今官員ニアル薩人ハ皆長暨ニタブラカサレ、表
 ハ好恰シ内情ハ薩ヲ倒ンタメ、肥前ヲ懐込テ事ヲナシ、
 目附楼等ヲ崩スガ如キ皆長人ノ術ナリ、必ス包蔵スル所
 アラン、是ヲ薩人ハ不知シテ時ヲ得タリト思ヘリ、今
 二位公ヲ拒ムハ必シモ薩人主タルニハ非ス、病根ハ長ニ
 アリ、肥人ハ誘ハレ、薩ハ雷同シテ拒ムトミユルナラン
 トナリ、又松浦武四郎口氣モ亦是ニ似レリ、又云フ、若
 公用ヒラレ玉ハスシテ 御下向ニナルガ如キ、薩ハ省カ
 レテ官ニ在コトヲ得ス、天下ノ事亦瓦解スルニ他ナシ、
 薩人はヲ知ズ、又薩人勢ヒヲ得タルハ皆 公薩ナルコト
 ヲ知ラサルハ愚ノ至リ也ト云ヘリ、

文書原寸 縦一五種 横四七種

三四 久光公ノ參議諸省卿分割意見及朝鮮問題草
 案

初御引合候事ノ由、サク晩軍艦朝鮮より長崎ニ帰るノ
 事ノミ故不參之由ヲ云、板垣も同断、

今日中布告有之度御座候、

參議分割速ニ被行度、殊ニ同席ニ被置候上は、此方之
 申義も御用被成度、若是迄之通御用無之候ハ、御罷
 メ可被成事、

參議兼外務卿 (種臣) 副島

内務卿 (真道) 津田

司法卿 (博文) 伊藤

大審院長官 (敏謙) 河野

大蔵卿 (正治) 伊地知

政府江統計寮ヲ置事

長官ハ、(政應) 内田欽 (信行) 中島欽

布告文ハ是迄之續ヲ演へ、遂ニ今般放免ノ次第明ニ記
 シ、自ら当然之御処分有之候間、肅然として命之下ル

ヲ可待之旨ヲ記スヘシ、

於皇居朝鮮御処置御尋之節ハ、前条之次第可申上事、

文書原寸 縦一〇・五糎 横二六・五糎

三七五 鹿兒島幾尾ヨリ東京御家扶へ

桑原白山占ノ旧九月中久光公運勢

(包紙ウツ書②)

御前江御上ケ可被下候

幾尾

(包紙ウツ書①)

欽奉考

当亥九月中御運氣

… … … … 遇坤之謙

当卦ヲ以。右ノ御運氣ヲ奉レ考ルニ。坤ハ太陰。物ヲ生育スルノ元タリ。其德柔順ニシテ。万物ヲ受ケ入ノ

意。謙ハ山ノ高ヲ以。平地之下ニ処ス。我高ト雖モ低ニ居ルコト謙道ナリ。謙ヲ行フテ。凶ヲ生ルコト無。亦人ニ恃ラズ和順スル事吉兆ナリ。毎ニ謙徳ヲ以。諸コト御 行ヒ在ストキハ。次第ニ御 吉兆至ルベシ。然ルニ當時奸人勢ヲ得テ。正者ヲ除去トス。古ヨリ茶菓酒食ヲ以。災害ヲナサントスルコト多。是故ニ他ノ亭ニ御入在トモ。茶菓御酒食ノ物召アグベカラス。毎度御持越ノ物迄召アガルベシ。亦別ニ奸宦ノ心得往々如何ヲ見ルニ、… … … … 二一泰之臨ナリ。然トキハ。我意ヲ和ラゲ人々ニ和親セントス此御方へ。追々親ミヨラント其卦同人之ニ无妄ニナリ後其実情ヲ以。随従スルヨフトナル。同人ハ人ニ親ミ。无妄ハ。天雷ノ発ルヤ。春夏ニ起リ。秋分少シニ。冬止。是其時ヲタガヘズ。年々歳々如レ是ナル故。无妄ハミダリナシト。天理ニ随テ動ガ故ナリ。往々奸宦公ノ意ニ順ヒ来ルベシ。夫迄ノ間御大事ノ慎ナルベシ。亦ハ御外出ノトキ迎モ。御側ノ外其御供人少カルベシ。御供人当地ニ於。刀劍

体術ニ有名ノ士ヲ。御撰在テ。御召ヨセ御道具ヲ持僕
ノ代ニ士ヲ御召ツレ有コト。大ニ宜ナリ是則。謙道ヲ
御行ヒ有ノ御慎ミナリ

亥
九月

桑原正晟
押首

文書原寸 統一六・五種 包紙原寸①② 縦二六種

横八二・五種

横三九種

三六 三条太政大臣上奏文

三条公自筆

久光公ノ彈劾上奏ニ対シ

(封筒)
岩倉右府公

実美

親展

(封筒ウラ)
緘

臣実美不肖ノ身ヲ以テ、忝ク

陛下ノ知遇ヲ受ケ、太政大臣ノ重任ヲ負荷シ、日夜黽勉、
其職ヲ墜ンコトヲ恐ル、今也左大臣久光臣カ其任ニ不勝、

恐多クモ

聖明ヲ眩惑シ奉リ国事ヲ誤ルヲ効奏ス、臣窃ニ之ヲ伝聞
シタリ、然ルニ

陛下英明、断然左大臣ノ劾奏ヲ擯斥シ玉ヘリ、臣復タ之
ヲ聞テ深ク

陛下之臣ヲ疑ヒ玉ハズアルコトヲ信ス、臣感激ノ至ニ堪
ヘス、益以篤鈍ヲ尽シ、

聖明ニ報効センコトヲ思フ、嗣テ左大臣辞表ヲ奉ル、

陛下諭スニ、方今国家多難ノ際強疾職ヲ奉スヘキヲ以テ
ス、臣茲ニ於テ窃ニ惑ヒ無キ能ハス、抑左大臣臣ヲ効奏

讒告ス、其事不実タラハ詎告ノ罪、国常典アリ、

陛下之ヲ不問ヲ措キ玉フモノハ非常深遠ノ

勸慮アリテ寛假シ玉フニ在ン、若左大臣ノ上書ヲシテ讒
奏誣告ニ非ストセハ、臣カ罪ヲ糾シ玉フベキナリ、若左

大臣ノ上書ヲシテ虚妄ノ讒奏ト見認玉ハ、縦令優待以
テ其罪ヲ不問ニ付シ玉フモ、尚大臣ノ職ニ居ラシム可
ヤ、果シテ然ラハ、天下後世夫レ

陛下ヲ何トカ云ハン、臣甚国家ノ為ニ惜ム、

陛下、其事ノ是非ト真偽トヲ不問シテ姑ハラク之ヲ擯斥

ストシ玉ハ、臣実ニ恐懼慄惑ノ至ニ勝ヘス、謹ンテ其

罪ヲ糾シ玉ハンコトヲ請フ、臣何ノ面目アリテ百官ノ上

ニ立ン、退テ

明裁ノ下ルヲ俟ン、

陛下之ヲ採扱シ玉ヘ、臣実美恐懼屏營ノ至ニ勝ス、謹テ

進止ヲ乞フ、

文書原寸 縦二三・五纏 封筒原寸 縦 二二纏

横六六・五纏

横九・八纏

三七 麿香間祇候ノ辞令

從二位島津久光

麿香間祇候被

仰付候事

明治八年十一月二日

太政官

文書原寸 縦二一・四纏 包紙原寸 縦 二八纏

横二八・二纏

横三九・八纏

三六 前原一誠ヨリ大久保利通ヘ

病氣見舞

(封紙ウラ書)
大久保先生

侍史下

一誠拝

逐日寒氣之候差向申候処、過日来御不快ニ被為在候由、

実ハ小生義も時々不快ニ罷在、不參かちにて、乍承意外

之御無礼仕候、平ニ御海容奉希上候申上候も、疎ニ奉存

候得共、御氣色別而御保養專一二奉存候、千万不敬奉恐

縮候得共以寸楮御見舞申上候、頓首敬白、

十一月二日

文書原寸 縦一八纏 横六五纏

三九 旧平戸藩士楠本後覺ヨリ元老院ヘノ建言

左府公ノ復職ニ就テ

草莽臣楠本後覺頓首頓首再拜

謹テ建言ス、明治紀元 王政復古、數百年來武門ノ弊習
ヲ解キ、文明日昇、治化隆盛、上下ノ間洞達光明、天下
人人ヲシテ思フ処ヲ致シ、言フ処ヲ尽シ、正正堂堂其
皇政之卓爾、正ニ彼所謂聖帝明王ヲ軼駕シ、古今内外無
比類ノ大道之世ニ超過セントス、是ニ於テ天下ノ俊豪其
謀猷ヲ献シ 聖明ノ万一ヲ裨補シ、海外ノ侵侮ヲ禦キ
皇基ヲ泰山ノ安ニ措ントス、前島津左大臣、維新以來柱
石ノ功臣ヲ以テ非常ノ榮遇ニ感激シ、英算偉略ヲ献納シ
大業ヲ參贊シ 盛烈ヲ擴充シ、真ノ太平ヲ興起セントス、
其至忠大義、星斗ト光ヲ争フニ足ル、頃口道路ノ言ヲ聞
ク、其忠憤ノ所激、義胆ノ所奮、愛 國之切、向 日ノ
誠ト、身ヲ忘レ國ニ殉ヒ、三条太政大臣ヲ黜ケ 皇化ヲ
更張セントス、若夫此議不行トキハ 乾綱解紐、外國ニ
役屬セラルノ憂アラント、臣西海ノ浜ニ僻在シ、其的然

ヲ了知スル能ハスト雖モ、只其忠誠憂 天之赤衷ニ至テ
ハ、亦青天白日ノ如ク可甚信矣、然ルニ 朝廷其官ヲ解
キ、其任ヲ停ムニ至テハ、臣至愚甚夕解セサル所ナリ、
古語ニモ猛虎山ニ在レハ群獸屏迹スト、國ニハ忠鯁正烈
ノ臣ヲ欠クヘカラス、故ニ万人之諾諾ハ、一人之諤諤ニ
如カス、臣至愚伏テ冀フ、如此切直ノ言ヲ順納シ、其忠
烈ノ氣ヲ鼓動シ、天下人人ヲシテ其所思ヲ尽サシメ、日
ニ 皇治ヲシテ光明正大ノ域ニ進マシメンコト、豈復快
事ナラスヤ、臣至愚仰テ望ム、速ニ大号ヲ渙發シ、左大
臣ノ職ヲ復シ、其踐言ノ実ヲ責メ 廟堂協議、正義ノ所
在ヲ極論シ、実材ヲ拳ケ虚妄ヲ斥ケ、此天下ヲシテ盤石
ノ如ク為ンコト、此則方今天下人人ヲシテ言ヲ得セシム
ル秋ニ当リ、至愚如臣者モ忌諱ヲ憚カラス、敢テ上言ス
ル所以ナリ、又臣窃聞、古者大臣ノ進退ニ於ルヤ、揖讓
ヲ存シ廉恥ヲ養フ、故ニ人其非ヲ彈劾也、身ヲ奉ル夔夔
慄慄、身衣ニ勝サルカ如ク、平生ノ愆過ヲ省ミ忠誠ノ匱
乏ヲ顧ミ、恬然位ヲ辞シ澹然分ニ安ス、若シ猶ヲ貪冒已

ムヲ知ラサルトキハ、則大臣ノ体ヲ失ヒ国家ノ辱ヲ取ル、此ニヨリ之ヲ言ヘハ、太政大臣今日ノ挙動、果シテ天下人心ヲ圧服スルニ足ル所アルヘシ、若シヤ猶ヲ依然其位ニ居リ、其職ニ安スルトキハ、天下有識ノ觖望如何ソヤ、臣至愚言此ニ至リ矣ニ当今ノ務ニ違セス、頑固迂陋、亦言ヘキモノ無ラン、伏シテ哀怜ヲ乞フ、戦慄屏營ノ至リニ任ス、実恐実惶頓首頓首、

明治八年十一月十二日

草莽臣楠本後寛再拜

元老院

御中

冊子原寸 縦二八・五種 横二〇種 三枚

三三〇 和歌山県医生広田天民ヨリ久光公ヘノ建言

別紙建白書呈出理由

(表紙)
「呈翰」

僕未ダ 尊顔ヲ拝セズト雖、爰ニ天下ノ為ニ政談ヲ請

ヒ奉リ度、謹テ卑翰ヲ呈ス、

天下御一新御変革後、御政体ノ儀ハ、旧幕府ノ苛政ヲ省フキ御新政施行、庶民撫育、安逸ノ域ニ御容レシメ、且邦国固守、金城ノ御基ヒ立テサセラレ候儀ト、小民ノ輩兼テ相樂シミ望迎ノ処、左ハ無クテ反テ旧幕府ノ苛政ニ越エ、小民ノ苦情日ヤ月ニ一年ヨリ多シ、故ニ僕其ノ邇キヲ見聞シテ以テ其遠キヲ酌ミ、其事情ヲ察スルニ今天下ノ政、人望ヲ相失フコト亦日ヤ月ニ少ナカラス、之レニ因四民及神官僧侶ニ至ル迄十ノ八九怨敵ヲ醸シ、方今天下ヲ賞スル者甚ダ少シ、僕塵芥ノ如キ微民ト雖モ 皇国人員中ノ一人ニ候ヘハ、海内衰頽ノ萌ヲ坐視スルニ忍ビス、九牛ノ一毛トハ存ズレ共、然トモ天下保安ノ守衛ヲ存ジ込ミ、去ル四月建言書ヲ相認メ、同五月中旬該当県令神山郡廉殿エ対面、右別冊建言書ヲ相見セ聊相議シ、其上ニテ 元老院御中宛ニテ別紙建白書ヲ同六月上旬郵便ヲ以テ 朝廷エ差シ上ケ候也、然トモ今以何等勅諭之レ無ク、方今仮令小民ノ建言ト雖トモ、天下文明開化ヲ

表スルトキハ、則勅諭ナキ能ハズト日々還詔ヲ相待ノ処、

和歌山県下紀伊国名草郡冷水浦(附之)

兼テ人望之レアル 尊公及ヒ板垣君御両公、此頃御辭職

明治八年十一月十三日誌 医生 広田天民敬白

ノ風聞專ニ之レアリ、羅ル御時勢ニ左ハ有ル間敷ト存ル

從二位島津久光様

処、風聞ニ違ハズ御辭職ノ由、実ニ御両公ハ世上漸々人

冊子原寸 縦二五糎 横一七・三糎 四枚

望之レ有リ、其御方々御辭職ニ相成候テハ実ニ心細ク、

弥世ノ衰傾極マルカト愚察仕リ候也、此等ハ僕諛言ヲ用

三三 海江田信義内田政風ヨリ元老院ヘノ建白

ヒ、聊カ曾テ佞スルノ儀ニ非ズ、於是以為ク、今天下危

三条相国ノ彈劾

急存亡ノ秋、又忠臣納忠ノ秋也、然ルニ今也 天皇ニ保

建言ニ付口上手続

護ヲ加ヘ奉ラズ、御辭職ノ儀ハ一円心当仕ラズ、蛤フノ

今般国家ノ御為筋ト存籠ミ、潜越ヲ不顧、太政大臣三

如キ僕サヘモ及ハズナカラモ千憂万苦、胸ヲ焦シ愚忠ヲ

条実美殿ノ非元老院中ヘ建言仕候処、正院ヘ御差廻可

献ルニ、尊公等ハ三公五卿ノ任ニ有リナガラ、容易ニ御

被下旨拝承、御用多中難有肝銘敬服仕候、抑建言ノ主

辭職ク成サレ候儀ハ之レ有ル間敷ク筈、然ニ如斯キハ何

意タルヤ、世人ノ疑惑ヲ解キ政府ノ信アル処ヲ知ラシ

ゾ其御趣意アラント愚考仕リ候、依テ願クハ別紙建白草

メ、上ハ以テ国家ノ回復ヲ祈望セン為メ微身ヲ投シ、

稿及卑輪共御熟覽ノ上ヘ思召ノ処、憚ナガラ御返輪成載

下モハ以テ人心ヲ一ニシ、過チナカラシメントスルノ

キ度ク、其上ニテ今再応上言仕リ度ト存シ奉リ候間、此

外他心アルコトナシ、然レハ暗ニ三千万口余ノ代理ト

御旨ヲ以テ天下ノ為ニ貴賤ヲ論ゼズ、返ス〜モ御返書ヲ

モ看倣サルヘキ意ナリ、就テハ過日ノ建言ハ、只大旨

載キ度伏テ冀ヒ奉リ候、僕誠恐誠惶頓首、

ヲ演タルモノニテ、御推問ノ節此手続書一ツ差上含罷

在候得共、臣等見込ミト齟齬仕、正院へ御差廻ニ付テハ他日何分御達シ有之筈ニハ候得共、段々日数遷延罷成候間重畳恐入候得共、今日御当院へ差上候付正院へ御達被下、速ニ公明正大至理至当ノ御説解ニ奉預度懇願罷在候、仰願クハ宜ク人心氷解ノ御所断御取伝アラシム事ヲ、仍テ左ノケ条陳述仕候、

一

臣等

目今ノ情態ヲ熟考仕候ニ、御建國以降、今日ノ如キ内外御多難危急切迫ノ御時ハ未曾有ニシテ、歴史上ニモ見聞不仕、中々平々尋常ノ時態ニ無之義ニテ、今形ノ為体ニテハ、万々政治其宜キヲ被為得候義、如何ト苦慮仕候、依テ往想來思慮衷ヲ極メ候ニ、國家興廢ト三条殿ト、權衡ヲ比較スレハ、天地霄壤ノ違ニ付、其國ニ居テ其ノ大臣ノ事ヲ議スルハ、古語ニ触レ誠ニ難忍ノ事トイヘトモ、今日ニ在テハ寧ロ古語ニ触ルトモ國家ノ大ニハ換ヘ難ク、臣等其大ヲ取り候見据ニ候、夫レ三条殿御一人ノ御取計ニ無之義ハ、深く心得罷在候

得共、兎角御責任御遁レ難被成事ニ付、只管御一人ノ非ニ書記候、

一 島津久光殿奉職中、十月十九日ノ建言

聖上勅語、建言ノ趣、御熟読ニ候処、三条ハ功勞有之者ニ付黜ケ候義難被聞食届、朝鮮云々モ有之故へ、協議勉勵云々トアリシ哉ニ拝承仕候、就テハ三条殿不体裁有之義ハ被知食候事、

勅語ノ御中ニ自カラ含蓄セルヤニ恐察仕候、此義恐入タル事ナカラ、自己ノ為ニ記置事ニ候、

一 久光殿建言ハ、三条殿定テ御覽有之筈、然レハ箇程ノ事ヲ建言仕候テハ、其御身ヨリ実否推問ヲ是非願出可相成条理カト奉存候、其訳、上ミハ以テ天皇陛下ヲ奉補翼、中ハ以テ百官ヲ統治シ、下ハ以テ三千万余口ノ人民ヲ統轄ナサル人臣ノ極官、万機ノ政ヲ御負荷ノ御方ニ付、世人へ其理非曲直粲然タラシメサレハ、疑惑ヲ生シ安堵難仕、左ナキ時ハ下モ律ニ背キタル者ノミ御所置ノ様ニモ可当哉、世ニ律令格式アル、譬へハ

経緯アルカ如シ、経緯正シカラサレハ事行ハレス、人ヲ罰スル法モナク、或ハ党多キハ進ミ、党少ナキハ退ソキ、最肩偏頗至ラサル所ナキニ至ルヘシ、夫レ如斯ニテハ天地ノ公道ト申スヘカラス、茲ヲ以テ

勅語御附与ノ儘書店へ売買ヲ許サレ、上下ノ官員ヲ始メ万民法ヲ背ケハ、如律所置スルソト前廉被示タルモノナルヘシ、則之レヲ奉シタルハ三条殿ナリ、然ルヲ其身ノ非タルヲ挙ケ建言スルヲ遽然トシ、曲直ノ推問ヲ願ハレサルノ理難解、人民疑ヒヲ抱カサルヲ得ス、所謂其身不正ハ令ストイヘトモ不従ノ大弊ニ関スヘシ、聖上御優渥上、特別ノ御沙汰ハ三条殿一身二止リタル御事ナラン、三条殿ハ天下ヲ総理スル人臣ノ極官タル御方ナレハ、夫レヲ自反ナサレ、神速是非曲直ノ推問ヲ願ヒ出無之テハ、御誓文ノ表ニモ触レ信ノ実ナク、人心ノ疑惑ヲ氷解スル能ハス、島津殿モ左大臣トシ箇程断然タル建言、私意ヲ挟ミ可被申上道理無之、故ニ新聞紙上ニモ両虎相争フトカ、相軋ルトカ、内閣

紛紜ヲ醸ストカ、或ハ名臣功士ノ事跡ニ譬へ、冥々ノ内ニ暗ニ誹謗ヲ込メ、内外ヘ日々売出ス故ニ、弥以テ人心紛々、疑惑ヲ重ヌル媒ト成リ、悉ク己レカ識量ヲ以テ私党偏頗心ニ比較シ説ヲナスニ至ル、少雀何ソ大鵬ノ志シヲ知ラン、乍併今日ノ御政体ヲ怪ミ、瓦解ノ姿タカト慨歎顰眉スルハ、各々上ヲ重シ奉ル愛國ノ真情ナレハ、所謂樵夫ノ思ヒ、或ハ街巷ノ説トイヘトモ可採コトナキニアラス、故ニ可憎事ニハアラサルヘシ、則如此情態故へ、弥以テ疑ヲ解ル、ノ御所置アルヘキナリ、

一当七月十三日、柳原前光殿ヲ以テ、御内勅ノ大意ヲ御書取り、三条殿ヨリ託セラル、ノ由、其事タルヤ、左大臣ヲ以元老院議長タラシメンノ

勸慮也、速ニ御受可仕、且章程其他見込ミアラハ可申立、鹿児島湯治暇願ハ、乍 気毒御許容難被遊トノ御事ト拝承仕候、久光殿御答難有御受可仕事ナカラ、議長ハ有栖川宮御相当タランカ、久光義ハ副議長被

仰付度、且病身ニテ春秋ハ兎モ角、酷暑極寒ニ至レハ存分日勤モ難仕、夫是恐縮ナカラ御受難申上旨ヲ被申上、翌十四日柳原殿亦候御入来、久光言上ノ趣被聞食、有栖川宮云々等一応ノ謙遜左ノ様ニ候得共、夫レ等古ヨリ例モ有之ニ付推テ可相勤トノ御沙汰ノ旨ヲ被達、故ニ無拗御受被申上ノ処、日数大遷延、同廿一日御用 召ニテ参 内ノ処、

勅語ニ行政官ヲ以テ立法ヲ兼任不当ト 思食付候間、左大臣一辺ヲ勉励スヘキノ旨ヲ拝承御受被申上タリ、斯ク遅緩スル、内閣暨ヒ元老院ニ於テ行政官ヲ以テ立法ヲ兼ヌル不条理等紛紜、臣等不申上共分明ナルヘシ、因テ三条殿へ 内勅相変リ候テハ条理不相立等ノ旨ヲ以テ、忠告シタル人数多アリシト臣等モ推参申上タル事アリ、其主意名分大義ヲ以テ陳述ストイヘトモ、終二前条通りニナリタリ、此ノ議長御云々御心得ニナル眼目タラント奉存候、

一八華族方ヨリ、太政大臣事多端ニシテ忽卒遅緩ニ流レ、

人民不安着云々等ノ献言ニ、眼目タル忽卒遅緩スルノ旨ハ何ノ御答ヘ無之、左右大臣ヲ以テ各省ヲ分轄スルノ義、御採用難被成ト被仰渡タルヤニ拝承ス、然ルニ忽卒遅緩タルモノハ、政事ノ第一禁戒スヘキ事ニテ、此ノ建白ノ眼目タルヘキヲ、曖昧糲糊ノ内ニ消滅サセラル、モノニ似タリ、且亦外国へ金貨濫出スルハ、於政府既ニ着手、当時取調ヘ中ノ旨ヲ被仰渡タルヤノ処、此度政府御改正ニ付財務課ヲ被廢、剩ヘ出納課再ヒ不被置ト難解モノナリ、当一月ヨリ七月迄ノ割ヲ以テ之レヲ算スレハ、日一日ニ金五万円ヲ海外ヘ出スニ当ルト、茲ヲ以テ旧財務課ニ於テ此大憂ヲ挽回セント黽勉シ、調書モ巨細ノ趣ニ候処、豈ニ計ン、如此ナラントハ夫レ西洋各国ノ法ヲ仄ニ聞クニ、上下ノ議院アル故ニ、人民ヨリ収ムル処ノ税下院ニテ取調ヘ、上院ヘ出シ是ヲ確定シ、蔵省ヘ廻シ一ケ年ノ結ヒヲ定ムト、果シテ然ラハ民ヨリ収ムル出納甚嚴ナルヘシ、 皇國ノ蔵省名義ニ当ラサル出金無之ハ、当然ノ義ナカラ引合

ナキハ如何ニソヤ、政府金錢ノ有餘不足ヲ知ラサル、甚迂遠ト曰ハサルヘカラス、矧ヤ当今ノ際ニ於テヨヤ、八華族ヨリ献言ノ御答ニ反対スルモノニ似タリ、果シテ然ラハ旁信ナク

聖上ノ御美德ニ關係シ、太政大臣タルノ御職掌ニ対シ如何ト奉存候、

一 參議各省兼任ノ事、大久保參議去年十二月廿五日頃大坂へ到リ、木戸孝允・板垣退助等之レニ會シ、于時議粗調ヒ上京、当三月十日頃木戸參議復職、板垣ハ猶

天皇陛下ヘ二三ケ条ヲ奏スト曰フ、其一条ハ則參議ニシテ各省ノ長官ヲ兼任スル不可トス、外ケ条之レヲ不知、聖上一々被 聞食届ノ旨ヲ勅シ玉フト、同十二日板垣參議ニ復任ス、之レ奏言 御採用ニ因テ也ト、遂テ三公參議中モ同意、然ルニ是迄実地施行ニ至ラス、先頃中ヨリ頻リニ之レヲ促ストイヘトモ、三条殿事ヲ左右ニヨセ遅緩ニ流ル、然ル処朝鮮ヨリ我カ雲揚艦ニ砲発ノ報知アリ、三条殿是レヲ名トシ、落着迄先ツ是

迄ノ通りトノ談アリトイヘトモ、板垣大ニ之レヲ非トス、久光殿元來分裂ハ持論ナルカ故ニ、板垣ト論オノツカラ合ス、故ニ參議ヲ以テ各省長官ヲ兼任スルノ弊アルヲ以テシ、暨ヒ治道ト非常ヲ混スヘカラサルノ旨ヲ述ラル、ト、十月十二日三条殿・島津殿・岩倉殿・

板垣於 御前各見込ミヲ奏言セラル、ト

聖上御熟考ノ旨ヲ被 仰出、板垣長文ノ建言ヲ奉ルト曰フ、同十九日三条殿・島津殿暨ヒ參議九人 御前へ被 召、朝鮮云々落着迄參議兼任從前通りタルヘキ旨ヲ被 仰出、依之島津殿建言書ヲ 御直ニ被奉、同廿二日島津殿ヲ被 召、建言ノ旨御採用難被 遊、三条ハ功勞アルニヨリテ也ト、是ヲ以テ反復之レヲ推考スルニ、元老院議長ノ事ハ行政官ヲ以テ立法官ヲ兼任云々ヲ以テ既ニ 内勅アリト雖之ヲ非トシ、參議ニシテ各省長官ノ事ヲ兼ルハ之ヲ是トス、夫レ參議ノ任古ノ制ニアラス、今ハ則太政官ノ正官ニシテ議判スルノ權ヲ有ス、果シテ然ラハ各省ノ長官ヲ兼ヌル理、其可

不得失如何、若シ擅ニセハ各省ニ在テハ上告シ、參議ニ坐シテハ是レヲ議判ス、其非ナル事一弁口ヲ俟タサルヘシ、夫レ太政大臣ハ

天皇陛下ヲ奉補翼、左右大臣職掌亦之レニ準ス、然レハ俱ニ之レ内外ノ事ヲ總理スルノ大權ヲ用スル官ナレハ、元老・大審両院ノ事ハ勿論、其他悉皆總判スル任ニアラスヤ、果シテ然ラハ元老院・大審院ヲ左右大臣ヨリ兼ルハ権内ノ事ニテ何ノ妨カアル、然ルヲ此レヲ非トス、而テ却テ実地ニ当リ裁判スル者ハ、司法省長官ヲ始メ府県モ行政中ノ人ナリ、豈ニ之レヲ正論トセシ、一ツノ条理ニシテ奚ソニ条ナルヤ、推考スルニ西洋各国ノ例ニ触ル、ヨ以テノ所以ナラン、果シテ然ラハ職制彼レカ体裁ト同制ノ後ニアラサレハ、曲尺ヲ當テラレサルヘシ、奚ソ夫レ反對ノ甚シキヤ、此レヲ以テ之レヲ觀レハ、悉ク愛憎偏頗激慢ノ謀策ニシテ、一トシテ私意ニ出サルモノナキカ如シ、假令重官ノ威ヲ以テ弁說ヲ工ミニシ、之レヲ圧倒ストモ、事実ノ勢ヒ

判然タリ、必ス自己ノ心ニ恥ルル如果シテアランカ、聖上ヲ奉眩惑ト曰フトモ其正実果シテ如何ン、天地神明モ照覽スル処ナリ、爰ニ至リ世人ノ疑惑、何ノ定理ヲ以テ是レヲ說解スルヤ、

内勅ヲ取消ス程ノ定理アレハ、首尾同カラサレハ大人世人疑フハ当然ノ事ナリ、臣等ニ於テモ固ヨリ說諭拜承セン事ヲ願フ処ナリ、且亦島津殿建言ニ三条殿ヲ黜ル云々、聖上御採用難被遊、三条ハ功勞有之御旨、實ニ三条殿一身上ニ於テニツナキ冥加ナルモノニテ、難有奉載アルヘキ事ナリ、然レトモ前件ニモ陳述スルカ如ク何分ニ極官ニアリ、天下ノ事ヲ總判スル御方ニシテ其職甚重シ、假令

勅諭アリトモ、職任ノ重キ事実不可止ノ至誠ヲ尽シ、何トカ奏言ノ被成方モアルヘキニ、惜哉、世ニ恥ルル色ナク激然顔ヲ厚クシ、日ニ朝セラル、トハ、夫レ如斯ニシテ豈ニ三千万口余ノ生靈伏從安着スヘケンヤ、之レヲ以テ前件ヲ悉ク復考スレハ、則天威ヲ地ニ奉

墮、不信ヲ海内ニ示シ、將タ 聖明ノ 至尊ヲ奉眩惑ニ當リ、大臣タルノ所為ニアラス、就中 勅既ニ定リタル後、不体裁アルヲ自己ノ任ニ責メヲ帰セス、之レヲ再ヒ伺フハ則責メヲ 至尊ヘ帰シ奉ルモノニテ、近事此ノ非タル両度アリ、夫レ 勅タルノ極メテ至重ナル論ヲ俟ス、矧ヤ元老院議長ノ兼ト、參議ニシテ各省ノ卿ヲ兼ヌル、比較スレハ孰レカ是カ非カ、委細ハ説解上ニアラサレハ陳述シカタシトイヘトモ、試ニ是レヲ考ルニ、遨散タルノ譏リヲ免レザルモノ、如シ、

一大隈參議免黜ノ一条違約ノ事、

一朝鮮國へ使節差渡一条 勅意御云々ノ事ニ付、參議紛紜ヲ醸シ退職ノ事、

一台湾事件ノ事、

此三ヶ条臣等不申上トモ了然タル事ナリ、

此ノ条々ヲ以テ臣等天地ノ公道大義名分ニ隨ヒ論ヲ立ツ、夫レ太政大臣ノ器ニ乏シク、且人臣タルノ所業ニ觸レ、信ヲ天下ニ失ヒ

至尊ノ聖德ヲ奉事ナレハ、是レヲ論スルニ不臣ノ極ヲ以テ陳述スル所以ン也、若シ是等ヲ既往トシ咎メサレハ、偏頗ノ压制ニシテ人民ヲ統御スル道ニ背キ、甚シキ暴政ト曰フノ外ニ出サルヘシ、故ニ國家ノ御為メト存シ、其実ヲ挙ケ院下ニ涕泣シ、以テ赤心ヲ無忌諱吐露スル如此、恐懼謹白、

以上、

明治八年十一月十四日

從五位海江田信義

從五位内田 政風

右、元老院江今日差出ノ處、權大書記官永井尚志落

手相成申候事、

冊子原寸 縦二七・七釐 横二〇釐 八枚

三三 太政官ヨリ不許可ノ指令ト琉球ヨリノ追願

二通

〔包紙ウツ書〕
上

二七三ノ一

藩情困難之儀ニ付歎願

今般藩王委託之旨趣ヲ領シ、全国困難之情衷ニ依リ、屢歎願之末臣等東上、去月十五日・廿七日歎願書上申仕候処、本月十七日御朱書并御口達を以御聞届難相成、藩王ヨリ松田内務大丞江差贈たる証書之旨趣ヲ踐ミ、御廟議確定之条々、於御当地速ニ遵奉可致旨御達之趣、訳而拝聴仕候、且退而篤と勘考之上御請可申上段茂御口達被相添、是又敬承仕候、就ハ再三ニ及陳情仕候茂恐懼之至候得共、臣等上請スル所之趣旨未全御了解不被下ニ似テ、臣等之言茂亦未全ク尽サル様ニ奉存候、依而旨意徹底仕候迄敬而繕述仕候、抑唯一箇之歎願哀請セサルヲ不得者ハ、夫ノ支那交属之事件ニして前既ニ陳述スル如ク、五百年來彼ノ封冊ヲ受け、彼ニ朝貢ヲ納れ彼ニ官邸ヲ設け、以テ今日ニ至リ綿々不絶、彼之恩徳ヲ頂キ彼之愛顧ヲ蒙れルハ、固ヨリ

天朝之洞知スル処、万国之察観スル処、又覆フ可ラス、

其恩其徳、豈敢テ背ニ忍ヘシ也、又背可ラサル也、嚮キニ述ル如ク、信義ノ関スル所断絶シ難キトハ此一事ニ候、本藩固ヨリ海表之孤島、西陲之弱国ニして自立スル能ハス、

皇国・支那ニ大邦ニ間して、両朝ニ服事スル数百年一日之如シ、更ニ厚薄ナシ、今ヤ

敵令ニ従事せんとすれハ支那ニ信義ヲ失フ、因テ国情紛紜、上下錯愕、之ヲ処スルノ道ヲ知ラス、故ニ藩王臣等ニ命して、

閣下ニ哀請シ、

天朝の威徳を以、小藩難艱危懼ニ迫れるヲ救之保護ヲ蒙リ、全島ノ安堵静寧ニ至ラン事ヲ求ルナリ、蕞爾タル孤島の弱藩ニして、堂々たる

天朝ニ対シ奉リ、抗疏争弁スルノ意ハ毫髪も無之、是情勢の見易キもの、偏ニ

閣下の明察ヲ奉企望候、仰願クハ夫の朝貢及使節慶賀使派遣并冊封停止等之件々は

天朝の特旨ヲ以專使之ヲ清朝ニ御示教あり、彼れ承諾の
信書ヲ拝領セン、又或ハ彼れ

朝旨ヲ了解して敝藩ニ公告シ、永ク

天朝ニ專屬せるを明白ナラシメン欵、此ニツノ間ニ出デ
ハ一点の信義ヲ不失、闔国の安堵ヲ得テ上下始而蘇息の
地ニ安シ可申、若彼ニ不告して、唯

天朝の命の儘ニセハ、支那吾ニ負するニ不信不義の名を
以てせんとする時ニ当リ、何の辞可有之哉、此等の情勢
深ク御憫察伏て奉願候也、其他職制改革の如キモ実ニ行
レ難ク、此儀は更ニ陳請可仕候得共、先ツ此兩朝所屬の
件は信義之闕スル処事尤重太ニして、藩王の痛心苦慮ス
ル所最深キ所以ナリ、琉球ニ於て松田内務大丞江縷々相
願候得共聊採用ナク、謝恩王子藩吏の上京抑留停止セラ
レ、諸港出入之船々迄茂嚴達之レアリ、爰ニ於テ闕下ニ
拝趨し、情ヲ表シ哀ヲ請の願も

天聰ニ達スルノ路ナク、猶釜中ノ魚、籠中ノ鳥の如シ、
実ニ奈何ともスル能ハス、故ニ不得已藩王ヨリ今一応政

府江申上、其上御採用無御座候ハ、東京表ニ於て直ニ
御請可申上と之一書ヲ差贈候、乍然書ノ意、理否ヲ不問
御請仕候筋ニ而は無之候、仍テ殊更ニ臣等ヲシテ、此旨
趣ヲ附托シ、數百里ノ絶海ヨリ群參セシメ候儀ニテ、請
フ此等之情状深く御諒察被下、明瞭之確証御示教被下、
僻境蠢爾ノ小民等安堵仕、藩治政蹟相調候様御指揮被下
度、無左而は臣等帰藩茂難仕、憂鬱愁傷之至ニ不堪、依
テ嚴威ヲ不憚申上仕候条、何卒寛大の恩徳を以、前文陳
情の趣厚ク御評議被下度、此段重而涕泣奉懇願候也、

使者中

連名

明治八年十一月

太政大臣三条実美殿

文書原寸 縦一六・七糎 横三四九糎

二七三ノ二

申出ノ趣ハ前日松田大丞江御委任相成、其藩へ出張ノ上、

朝旨ヲ伝宣丁寧説諭ヲ加へ、猶疑問ノ件々ニ対シ、反覆弁解ニ及ヒ候処、更ニ今般書面縷々申立之趣有之ト雖トモ難聞届、去ル九月九日、其藩王ヨリ内務大丞松田道之江差贈リタル証書之旨趣ヲ踐ミ、廟議確定之条々当地ニ於テ速ニ遵奉可致候事、

明治八年十一月十七日

文書原寸 縦 一六糎 包紙原寸 縦二七・七糎

横五九・五糎

横三六・五糎

二七三 岩倉具視ヨリ大久保内務卿?へ

地方官御召ノ件

地方官 召之事委細及言上候処被 聞食入、明後廿四日

ト被 仰出候処、新嘗祭ニ而前夜二時過ニも被為成候ニ

付、廿六日朝十時と徳大寺改メ被伺候事ニ候廿五日ハ、休日故也

地方官帰県差急候事と存候ニ付而ハ如何と存候得共、此

上又々彼是と願替候事ハ仕かね候、右府明朝十一時頃三

家江行向、山県内談、暫時参上、万可申入候也、建野明後日二 帰路出頭之心得也

本官拜命之筈ニ候、早々以上、

十一月廿二日 具視

文書原寸 縦一七・六糎 横三七・三糎

三三四 山階宮見親王ヨリ島津久光公へ

寒中見舞

(封筒) 島津二位様 侍史中 晃

(封筒ウラ)

(封紙ウラ書)

島津二位様 侍史中 晃

冬景日々増進候処益御勇健奉大賀候、抑此一折塵末乍赤

面、時令見舞申上候驗迄ニ進上之仕度御咲納被下候ハ、

本懐深々畏入奉存候、尚期拝謁之時候也、 敬白、

亥十一月廿九日

二白、不序之氣候折角御厭伏願仕候、乍内々先日ハ

御帰国之趣風聞仕リ、甚心痛仕リ候処、過日ハ更ニ
麝香間被 仰出候趣、猶新聞誌承知仕リ、取々安心
仕リ候、当節嗚々内外多々御苦心之事候んト奉恐察
候、尚奉為国家御尽力、乍蔭奉祈入候也、

文書原寸 縦一六・五糧 封筒原寸 縦一七・八糧

横四五・五糧

横 五・三糧

三三 鳥取県土族河崎清郎ヨリ前左府久光公へノ

建言

国政運用上華土族ノ任用ト学制改定

鳥取県土族臣河崎清郎、誠恐誠惶頓首再拜、謹テ書ヲ
閣下ニ奉ス、臣僻地ニ生長シ、見聞狹隘、年弱ク学浅ク、
性亦頑魯ナリ、然レトモ唯憂国ノ衷情敢テ他人ニ譲ラス、
是以テ聊カ微忠ヲ尽シ鄙言ヲ述へ、敢テハ 閣下ノ台聽
ヲ煩ス、臣鄙賤無識ノ身ヲ以テ忌諱ヲ避ス、太政ヲ論ス
ルノ罪、敢鉄鉞モ辞セサル所、而冀クハ幸ニ 閣下ノ仁
徳ヲ以テ其恕スヘキハ之ヲ恕シ、採ルヘキハ之レヲ採リ

玉ハ、則臣カ幸福是レヨリ大ナルハ無シ、臣謹テ惟レ
ハ政権久ク武門ニ在リテ 王威漸ク陵夷ス、癸丑ノ秋外
交始開、内憂随テ起リ、戊辰ノ春ニ及ンテ天日照明、政
権 王室ニ帰シ、

天皇陛下親ヲ万機ヲ主宰シ、大臣參議之レヲ輔弼シ、
王化四表ニ溢ル、然而癸酉ノ秋征韓ノ廟謨破論以來、天
下物情洶々多ク党与ヲ樹ツ、昨春西肥ノ暴挙アリ、其物
議ノ起ル所以ヲ概視スルニ、維新以來朝議専ラ歐制ヲ摸
写シ、尽ク古俗ヲ脱シ新ナラシメント欲スレトモ、人知
未タ至ラスシテ寸進尺退常ニ狐疑ス、然レトモ敢テ朝旨
ニ倨低スル能ハスシテ惟鬱屈憤怒ス、是廟謨一タヒ和セ
スシテ、忽チ物議天下ニ蔓延スル所以ナリ、依是視之、
則彼此党与ヲ結ヒ、征韓憂国ヲ以テ口実トナス如キモノ
ハ、則概ネ有司ニ對シ積怒ヲ解カント欲スルモノ多カル
可シ、嗟外患日縮月迫ノ際、実ニ慨歎ニ堪ユ可シヤ、米
人有云、人民知識開達良能ニシテ、政府敢テ之ニ自由ヲ
得セシメサルハ則虐政ナリ、亦人民無知未開不良ニシテ、

政府強テ之レヲ自由ナラシムレハ、則却テ災ヲ人民ニ与ルナリ、臣以為ク、今ヤ天下内憂ニ非スシテ外患ニ在リ、果シテ然則地方重カラスンハアル可ラス、若シ惟内憂而已ヲ知テ而外患ヲ顧ミサレハ、則反テ内憂益起ラン、維新以來武ヲ偃セ文ヲ興シ、兵權一ツニ上ニ帰シ、從來ノ武門ヲ解キ独國ノ兵制ニ摸倣シ、一般ノ人民ヲシテ尽ク兵役ニ充タシム、徵兵令ノ制勅アリ、実ニ編兵ノ良法タル可シ、然レトモ於神州則判然華士族ノ名分アリテ、啻ニ皇族平民ノ二種而已ニ非レハ、則其宇内ヲ經緯スルノ道ニ於テモ、亦自カラ其制ノ異ル所ナクンハアル可カラス、故ニ地方官輕カル可カラス、宜シク自ラ地方ノ文武政共ニ担任スル義務アルヘシ、辛未置県以來、僅ニ闕五年ニシテ地方ノ長官、彼此ニ転任スル数次ナリ、是以テ自カラ任スル薄ウシテ、宛モ禪師ノ宗派ヲ廻ルカ如シ、唐ノ張巡許遠ノ如キ、是皆地方ノ長官ナリ、昨春西肥ノ暴挙、各地方ノ長官大概狼狽錯誤シテ、敢テ自ラ管下ヲ維持担任スルモノアル無シ、何ニ以テ然ルヤ、

朝廷之レニ責ルノ薄ウシテ、又自ラ任スルノ薄キカ故ナリ、是以テ人民敢テ地方官ヲ親敬セス、反テ之レヲ敵視ス、故ニ若シ一旦挙動アラハ、則愕然トシテ其恒ヲ失ウモノアル可シ、嗟歎、如斯シテ牧民ノ重任ニ堪ユヘケンヤ、神州國体ハ、則必ス先ツ名分ヲ正ウスルニ在リ、故ニ先ツ五畿八道、若クハ六道毎ニ鎮守府ヲ置キ皇族ヲシテ之レカ主宰トナシ、華族ヲシテ節度使トナシ、管下ノ文政ヲ統ヘシメ、武官ヲシテ兵馬使トナシ、管下ノ武政ヲ掌ラシメ鎮台成規ノ如ク、猶管下ノ各処ニ分管ス可シ、而常備ノ外臨時予備ノ為メ、其良法ヲ製シ、土族ヲシテ兵式ヲ倣習セシム可シ、亦海軍ヲシテ漸次成業ヲ逐ヒ、便宜ノ諸港ニ分管シ、戰艦運船ヲ碇泊シ、且ツ其予科ヲ設ケ、時ニ地方近郷ノ舟子海夫ヲシテ之レヲ習修セシムレハ、則其ノ所長ニシテ、自ラ臨時予備ノ便タル可シ、地方官則長次官ヲシテ必ス一人ハ自県ノ人ヲ任シ、亦必ス一人ハ他県ノ人ヲ任可シ、及ヒ県庁五課ノ長ヲ自他ノ県人ヲシテ相半ハシテ任ス可シ、而長次官則先ツ四

年ヲ一期トナシ、其事跡ヲ試ミ、然後其殿最ヲ判ス可シ、
期內ハ大故アルニ非サレハ、妄ニ轉移セシム可カラス、
期滿テ後ハ、其事跡ノ優劣ト及ヒ人民ノ向背トニ因テ轉
移セシム可シ、大小區長則士族ヲシテ必ス之レニ任シ、
其制限ヲ立ツヘシ、此下ノ論或其拘制、頑固ヲ非ルモノ
アラン、然レトモ臣以為ク、大ニ然ラス、堂々タル神州
ノ万国ニ冠絶タル所以ノモノハ、土地ノ廣大ナルニ非
ス、或ハ兵力ノ強盛ナルニ非ス、或ハ人知及ヒ文字ノ開
明進歩スルニモ非ス、唯國体尊嚴 皇統綿々、亘万世而
永ク、天地ト与ニ窮リ無キヲ以テナリ、維新以來撰錄門
葉ヲ廢止シ、普ク衆ニ謀リテ秀才ヲ選舉スト雖トモ、建
國ノ体制ニ至テハ、万世ニ變スヘカラサル者アリ、是レ
即チ國体ナリ、如米利堅合衆國則初歐洲ヨリ植民シテ英
國終ニ之レヲ管領ス、而後人民英主ノ苛政ニ困ミ、其苛
政ヲ脱センカタメ自主自由ノ說ヲ主張シ、獨立シテ國ヲ
建ツ、是レ共和政治ノ適スル所以ンナリ、如仏國則氣質
自ラ驚悍輕薄ニシテ多ク党与ヲ樹テ、國論頗ル数派ニ別

レ、寧歲甚タ稀ナリ、仏國ニ於テハ君權ヲ專ニシテ之レ
ヲ裁制スルノ適スル所以ナリ、故ニ如神州ハ、則華士族
ノ名分アレハ、則亦必其適スル所アル可シ、是以テ鎮守
府ヲ置キ 皇族ヲ主宰トナシ、華族ヲ節度使トナシ、而
名分ヲ正ウシ、帝權ヲ堅ウス可キナリ、且ツ天下ニ物
議ノ起ル所以ヲ察スルニ、華士族ノ中ヨリ起ル、尤モ多
シ、何ナレハ則癸丑以來、天下ノ諸侯及ヒ藩臣等名分大
義ヲ本トシ、專ラ尊

王攘夷ヲ唱ヘ、幕府ノ嚴制ニ犯觸スルヲ顧ミスシテ、或
ハ脱籍シテ勤王ノ有志ヲ募集スルモノアリ、或ハ身ヲ投
シテ斬奸スルモノアリ、或ハ縛ニ就キ刑死スルモノアリ、
千辛万苦、各忠誠ヲ尽シテ以テ今日ノ開明ニ至ル可キ基
礎ヲ立ツ、然而維新以來朝議天下之義氣、凜烈殺伐ノ止
ムナキヲ憂ヘ、且ツ万国ノ公法ニ準拠シ、從來武門ノ權
ヲ奪ヒ四民ノ權ヲ均ウシ、公同一視ノ旨ニ本ツクナリ、
然レトモ人情自カラ止ム能ハサルモノアリ、若シ苟モ之
ヲ歎訴スルモノアラハ、則有司忽チ之ヲ退ケテ未開固陋

ノ徒トナス、是物議ノ止ム時ナキ所以ナリ、臣窃ニ以爲ク、今天下ニ於テ不用ノモノ、如クニシテ、亦大ニ国力タルモノアリ、從來ノ武門是レナリ、若シ吾國脈ヲ診視セハ、則孰レカ国力ノ多キニ居ンヤ、從來ノ武門尤モ其多キニ居ル可シ、或ハ國体ヲ維持スルモノ是レナリ、或ハ外患ニ対シテ抗拒スルモノ是ナリ、故ニ良法ヲ得ハ則啻ニ害ナキ而已ナラス、亦大ニ国力タル可シ、是以テ華族ヲ節度使トナセハ名分正シクシテ、亦随テ人情和キ人民之レヲ仰望ス可シ、地方ノ長次官及ヒ課長ヲシテ、自他ノ県人ヲ相半シ之レニ任シ、亦長次官ヲシテ四年ヲ一期トナシ、其事跡ヲ試ムレハ、則各県下ノ人才儘ク發出シテ、而一人彼レニ転移スレハ、則其党与亦皆移從シ、一人彼レヨリ來移スレハ、則其党与亦皆來從スルノ弊全ク止ンテ、屢県治ノ錯雜ヲ生スルナシ、或ハ政權ノ雄鼎ニ在ルヲ歎シテ而民權ヲ主張シ、議院ヲ興議スルモノ漸ク止ンテ、而人民悉ク

朝廷ノ公平ナルニ悦服ス可シ、或ハ言ウ、甲ノ県二人才

多クシテ乙ノ県二人才絶テ稀ナルヲ如何ト、臣以爲ク、大ニ然ラス、唯棟梁ノ其才ヲ得ルト得サルトニ在リ、豊公中国ニ起レハ則五畿東海ノ間英傑出テ、(徳山高野)景山公水戸ニ起レハ則一代ノ人傑水戸ニ出ツ、若シ豊公中国ニ起ラサレハ、則仮ヒ英傑アリト雖トモ豈宇内ヲ平定シ、終ニ師ヲ三韓ニ出シ功名ヲ海外ニ振フカ如キノ偉業アラシヤ、依是視之、則人才ヲ論スルハ多寡ニアラスシテ起伏ニ在ル耳、士族ヲシテ大小区長ニ任ルハ、則是モ亦名分正シク、随テ人情和キ人民亦之ヲ重ス可シ、或ハ言ウ、士族地租收納ニ至リテハ、則其未タ慣習セサル所ニシテ、反テ事務ヲ凝滯ス可シ、且士族ニ限りテ之ヲ任スレハ、則今日ノ旨趣ニ戻リ大ニ拘束縛ノ憂アル可シト、臣以爲ク、既ニ地租ヲ改正スレハ、則毎年常額ノ金納ニシテ、昔日ノ田畝徑界其錯雜紛紜ヲ生スル比ニ非ス、亦区吏ハ人民ノ總代ニシテ其公務ヲ処ス、故ニ悉ク奉給ハ民費ヲ以テ之ニ与ヘリ、然則農工商ノ三民各自ラ其産業ヲ営ム可シ、独リ士族ハ常祿ヲ仰ク、故ヲ以テ彼ノ三民ニ代リ

其公務ヲ処スルモノニシテ、敢テ拘束縛スルニ非ル可シ、凡ソ國ノ盛衰ト風俗ノ良否トハ、則國教ノ立不立ト正不正トニ在リ、故ニ國教不立、則綱紀忽チ紊乱ス、國教既ニ立テ、然シテ不得其正、則彝倫忽チ敗毀ス、今教部部アリ文部アリ、以テ万民ヲ教育ス、臣以為ク、今教部ハ専ラ外教ヲ制圧シ、皇道ヲ興張スルノ意ニシテ、而文部ハ専ラ外人ヲ雇ヒ、生徒ヲシテ之レニ就学セシム、蓋シ其外人タルヤ尽ク耶蘇宗ヨリ出テサルモノ無シ、臣固ヨリ浅学無識ニシテ未タ外教ノ原由ヲ知ル能ハスト雖トモ、世論或ハ外教ヲ是ナリト言フモノアリ、亦或ハ之ヲ非トスルモノアリ、其未タ孰レカ是非ヲ分タサレトモ、若シ果シテ其非ナルモノヲ禁止シ、其是ナルモノヲ採リ、之ヲ宇内ニ公行セハ、所謂國教既ニ正立シテ、自カラ人民ノ衷志一途ニ出テ以テ國力ヲ增加ス可シ、然レトモ臣嘗テ聞ク、外教ノ經典則其本ク所ノ意、専ラ天然自主自由ノ理ナリ、果シテ然、則嗟呼吾神州ノ國体ヲ奈何センヤ、欧米各國ニ於テ宗教ハ凡テ人民ノ自由ニ存スルヲ以

テ、官敢テ之ヲ在留ノ外人ニ禁止スル能ハスト雖トモ、公然吾邦人ノ之ニ浸入スルモノハ、則官必ス之ヲ嚴禁セズンハアル可カラス、亦隨テ学制ヲ改正セズンハアル可カラス、何ナレハ則今日ノ大中学ハ吾國學ナリ、然而或ハ英學ト云ヒ、或ハ獨學ト云テ、歐洲各國ノ學ヲ資リ以テ之ヲ吾國學トナス、夫レ英仏則兩岸相臨接スルモ、尚其國教國學自ラ其異ル所アリ、況シテ如吾神州、則海外幾千里ノ遠キニシテ、殊ニ無比ノ國体ナレハ、則亦自ラ國教國學共ニ其異ル所アラサルヘカラス、若シ各國ノ所長ヲ學ハント欲シ、内ヲ顧ミス徒ニ外ヲ事トスレハ、則譬ハ他人ノ所長ヲ學ハント欲シ、内ヲ顧ミス其後ニ從ヒ、終ニ自ラ帰ルヲ忘ル、カ如シ、故ニ先ツ学制ヲシテ國典ヲ体トシ、漢籍ヲ翼トシ、洋籍ヲ用トシ、以テ吾皇猷ヲ贊スレハ、則名分正ク立テ人知開明進歩ニ至ル可シ、臣願クハ洋籍ハ博士學トナシ、別ニ洋學院ノ名称ヲ下シ、各國諸學科ノ博士ヲ備エ、洋學生徒ヲシテ尽ク之レニ就學セシメ、而博士ヲシテ諸學科ヲ翻譯セシメ、然後之ヲ

大中学ノ科目ニ充テハ、衆皆了読ヲ難ンセスシテ、天文・地理・測量・製密等ニ於テモ亦弁明シ易カル可シ、若シ果シテ然ラサレハ、則内ニ背キ外ニ從ヒ、後世天下ノ勢、窮理技芸ノ妙、其驚ク可キニ堪ユレトモ、皇道日ニ敷レ、外教月ニ蔓リ、而国体名分ヲ明ニシ、勤王尽忠ノ志ヲ立ル者ニ至リテハ、蕩然復見ル可カラサル也、是臣等鄙賤無識ノ身ヲ以テ、日夜杞憂ノ止ム可カラサル所以ナリ、迂愚ノ左見敢テ以テ請聽ヲ汗ス、恐縮ノ至ニ任ヘス、

明治八年乙亥第十一月

臣河崎清郎

頓首百拜

奉

從二位前左大臣島津公閣下

冊子原寸 縦二四・五糎 横一七糎 六枚

三五

「ジャパンガゼット」ノ評論

久光公ヲ中心トシテ

政治危急ノ近況 ジャパンガゼット摘訳

日本政治上ノ困難ヲ釀スヤ既ニ再度ニシテ、一時逃ルヘカラサルノ場合ニ及タリ、而シテ縉紳ノ士、政府ニ抗抵スルノ意ハ未タ止マス雖トモ、政体ノ基礎ヲ立又之ヲ革メシハ、勉強ヨリ成レルカ故ニ、コノ困難モ既ニ過キ去リキ、抑日本ノ開明ニ赴クヤ、特ニ暇ヲ進捗シ、且事皆果断ニ出ルヲ以テ、不平心ヲ後來ニ遺スコト少シ、試ニ之ヲ言ハン、向キニ徳川將軍ヲ廢シ 王政ヲ復古スルノ大業ハ数月ニシテ成功シ、又佐賀ノ暴動、台湾ノ軍役ニ於ケル其鎮定ノ迅ナル、ソレ如斯、以下中略

今ヤ国家ノ危難ハ亦既ニ去レリト雖トモ、人々之ヲ憂慮スル浅渺ナラサルナリ、而シテ島津久光氏モ其一人ニシテ、同シク之ヲ憂慮スル厚シトス、然レトモ同氏ノ意タル小兒ノ所為ニ似タルモノ無キニアラスト雖トモ、其実或ハ然ラスシテ、政府之ヲ黙々ノ間ニ付スルニ忍ヒサルモノアリ、蓋シ廢藩置県ノ真理ヲ解セス、旧藩主ノ為メニ命ヲ致スハ、亦旧臣ノ義務ナリトスルノ士族アリテ、之カ魁タルモノハ則チ同氏ヲ以テス、薩人ノ東行スルカ

如キ、固ヨリ奇異ノ挙動ニシテ、今日ヲ以テ之ヲ目スレハ痴愚癡狂ニ近シ、其奇異ノ性質タルヤ、日本封建ノ時ト共ニ存セシモノナリシカ、独り島津三郎氏ノ所領ニ於テハ、猶此性質ヲ脱スルコトナシ、是ニ因テ之ヲ觀レハ、日本政府軌近ノ処置モ亦故ナキニアラサルナリ、我輩未タ同氏建白スル処ノ真意如何ヲ知ル能ハスト雖トモ、伝聞ニ因レハ、同氏ノ主張スル処ハ、太政大臣ノ責ナクシテ、他ノ内閣大臣ニ制セラル、ト云フニ係ル、然ラハ則チ島津氏ノ欲スル処ハ、寡人政治ニアラスシテ、却テ君主專制ニアリ、其言フ処策ノ得タルモノニアラサルカ故ニ、皇帝陛下其建白ニ答フルナク、又之ヲ元老院ニ下シ議セシムルナクシテ、措テ之ヲ問ハサルニ似タリ、是レ政府ノ決議確乎動かサルヲ表スルニ足レリトス、然リ而シテ政府其建白ヲ可否セサルニ方ツテ、南方主領ノ豪然タル氣象ヲ以テ、之ヲ怒ラサルヲ得スト雖トモ、如何セン、左大臣ノ重任ヲ辞スル外之ニ投スルノ術ナシ、同氏辞職ノ後、人能ク其挙止ヲ知ルコトナキモ、同氏ノ措

挙ヲシテ不問ニ付スルヲ得ス、蓋シ同氏猶ホ国權ノ幾分ヲ有シ、中心以テ国家ヲ杞憂スル薄シトセサルカ故ナリ、然リト雖トモ同氏人民ノ康福安寧ヲ謀ルノ大道ヲ失フコトナキニアラサルモ、之ヲ以テ同氏ヲ退カシムルニアラサルヲ信ス、又我輩ハ同氏ノ品評ヲ聴キ、其人ト為リヲ察スルニ、過去ノ失措ヲ追像シ、要路ノ人ト再ヒ相親ミ、終ニ自ラ仕ヲ干メハ、同氏ノ英才ヲ以テ

天皇陛下ニ有用ナル、更ニ疑ヲ容レサル処ナリ、

我輩カ一人ニ就テ斯ク切論スル所以ノモノハ、敢テ同氏ノ一身上ヲ言フニ非ラス、政治上ニ関スルノ挙止ヲ言フナリ、又内閣大臣ノ大決断ヲ以テ方今ノ事ヲ処分セシヲ賞シ、並セテ當時要路ノ諸君旧大臣ヲ問ハス、相ニ親和センコトヲ希望スルニアリ、夫ノ大臣ノ決断ノ如キハ、^(荷)苟クモ日本ノ繁榮康福ヲ企望スルノ者ハ、内外人ヲ論セス、深ク之ヲ謝シ、数年ノ後ニ伝ヘテ忘ルヘカラス、而シテ當時在職ノ參議ノ如キハ、廢藩以前ニ在テ藩内上等ノ官位ヲ占メサリシハ、我輩ノ記憶中ニ存セリト雖トモ、

此度ノ処分ニ至テハ、能ク時勢ニ適シ世態ニ合ヘリト云フヘシ、之ニ因テ惟ルニ、国家若シ有事ノ日ニ方ツテ参議ノ職ヲ尽スニ足ルヘシ、今マ日本ノ有様ヲ見ルニ、後來政治ノ難事ニ係ルモノナシト揚言スヘカラス、夫レ然ラハ各君夙ニ意ヲ人民ノ康福ト繁栄トニ注キ、勉強従事シテ以テ開明ノ域ニ進歩セシメンコトヲ、我輩カ特望此外ニ出テサルナリ、此間大意ヲ探テ訳ス

太政官ヨリ布告シタル 勅語訳者何タルヲ知ラスタル、暗ニ島津氏及ヒ不平土族ヲ諫ムルモノニシテ、其文意ヲ推スニ、宜シク封建ノ流弊ヲ一除シ時勢ト共ニ進歩スルハ、治國ノ要領タレハ、参議ノ非戦ニ決スル、敢テ不可トセサルノ叡慮タル、疑ヲ容レサル処ナリ、故ニ士族タルモノ國ノ情態ヲ察セス、漫ニ戦鬪ヲ好マンヨリハ若カス、叡断ヲ奉体シ、先ツ國ノ開明ヲ進メ、時ヲ俟テ后仇ヲ報ヒンニ、然レトモ我輩ハ日本ノ武官ニ向ヒ、後來ヲ誠メシ為メ左ノ数言ヲ献セントス、請フ、意ヲ了センコトヲ、夫レ兵士タルモノハ只命惟レ從フヲ以テ其任トス、而シ

テ又國議ニ参ルノ權ハ他ノ三民ニ亞クヘシ、日本ノ兵士此言ニ遵フ、愈厚ケレハ邦國ノ開明ヲ致シ、人民ノ康福ヲ亨クル、愈難キニアラス、嗚呼武官ノ諸君ヨ、兵八國安ヲ致スノ要具ナリ、一朝ノ怒ヲ以テ漫ニ之ヲ動カスコト勿レ、豈慎マサルヘケン哉、

冊子原寸 縦二七・五 横一九・五 四枚

三三〇 堤右京大夫ヨリ島津中将公へ

寒中見舞

(封紙ウラ書) 島津中将様

机下 堤右京大夫

寒威漸難凌候、愈御清康欣喜不斜存候、御惣容御同様珍重存候、抑此一品甚乍危末不相変寒中御見舞申入候、寸志までニ致進覽之候、於御笑留は千万大幸存候也、敬白、

十二月十五日

文書原寸(折紙) 縦一六・五 横四六 種

三六 長崎県高来郡八幡神社々司馬場作平ヨリ久

光公へ

政教一体。神道ノ宣布ニ付テ

二七二八ノ一

(封筒) 東京府第一大区三小区有楽町二番地
神道事務局御詰

大教 正稲葉正邦殿

権大教正田中頼庸殿

御直披

権訓導馬場作平 (朱)

(封筒ウラ)

長崎県下第六大区二小区肥前国高来郡

(朱) 南串山村々社八幡神社ヨリ八年十二月

廿五日発

願

易曰、王臣蹇々匪躬之故ト、方今内外ノ患憂目睫ニ迫レ
リ、臣タル者当ニ鞠躬シテ力ヲ尽サズバ非ズ、西肥ノ野
人作平上情ニ疎ク時勢ニ暗シト雖、慨気腦ヲ刺シ黙止ス
ルニ忍ビズ、是ヲ以テ卑賤ヲ顧ミズ、己ガ赤心ヲ吐露シ

テ高聴ヲ汚シ奉ラムト欲ス、伏テ願クバ両閣下、作平ガ
頑固実直ヲ憐ミ賜ヒ、此ノ拙文陋言ノ建言書ヲ島津公閣
下へ御上達遊バシ賜へ、頓首敬白、

明治八年十二月廿五日

権訓導馬場作平 (朱)

大教正 稲葉正邦殿

権大教正田中頼庸殿

文書原寸 縦 二七糎 封筒原寸 縦 二九糎

横 二〇・五糎 横 一〇・五糎

二七二八ノ二

(封筒)

島津久光公閣下

(封筒ウラ、朱三ツ同シ)

(表紙)

奉

島津久光公閣下

長崎県下第六大区二小区肥前国
高来郡南串山村

権訓導馬場作平 (朱)

長崎県下第六大区二小区肥前国
高来郡南串山村々社

八幡神社祠掌兼

権訓導馬場作平 (朱)

建白

謹テ惟ルニ、方今内ニハ仏法、殊ニ真宗・日蓮宗ノ邪宗アリ、之ニ加ルニ西洋ノ學術日々ニ進歩ス、之ヲ真ニ學ビ得タル者ハ国家ニ益アル事、素ヨリ論ヲ俟タズト雖、之ニ僻ル者其害亦甚シ、外ニハ諸洋教、殊ニ天主耶穌ノ二教アリテ我隙ヲ窺フ、実ニ天座危蹙ノ秋ナリ、奈何トナレバ、夫我皇國固有ノ神道ハ、天祖天照大御神ヲ尊ビ奉ルガ故ニ、其御正統ノ天皇ヲ尊ビ奉リ、又大御神ノ從ハ賜ヒシ群神ハ、万民ノ遠祖ナルガ故ニ、亦從テ之ヲ敬ヒ奉リ、畏レトモ天祖タル大御神ノ皇孫ハ、天地開闢ノ大古ヨリ数万億歳ノ以来、御世御世天津日嗣ノ天津高御座ニ大座坐テ、御祖大御神ノ群神ヲ天上ニ使ヒ賜ヒシ如ク、又宇内ニ照臨温育シ賜フ如ク万民ヲ愛撫シ賜ヒ、万民ハ世々臣下ニ位シテ、其遠祖タル群神ノ天上ニ大御神ニ仕ヘ奉リ坐セシ如ク仕ヘ奉リテ、以テ今日ニ至ル、豈唯今日ノミナラムヤ、自今而後ト雖天皇ハ天ト共ニ君臨シ賜ヒ、万民ハ地ト共ニ臣事シ奉ルベキ天祖ノ神勅ニシ

テ、此即天壤無窮ナル我國体ナレバ、天皇ノ御為トナラバ粉骨碎身ヲ甘シ仕ヘ奉ラズバ非ズ、豈唯斯現世ノミカハ、群神ノ天上ニ天祖ニ遠永ク仕ヘ奉ラス如ク、世々ノ先臣等ハ御世御世ノ先帝等ニ天上ニ仕ヘ奉ラレ、現在ノ此魂ハ天上ニ今上皇帝ニ仕ヘ奉ラナム、後孫モ世々後帝ニ天上ニ從ヒ奉ラナム、然レバ唯此現世ノミ天地ト共ニ仕ヘ奉ルノミカハ、冥府ニ於テコソ天地ト共ニ從ヒ奉ラズバ有可カラザレ、如斯両間無比ナル君臣ノ大義ヲ覺悟セシメ、英武ノ真神ヲ確定セシムル無上至尊ノ斯大道ナレバ、速ニ斯道ヲ興ズバ非ズ、故ニ往古ヨリ斯道ノ汚隆ニ随テ皇威亦盛衰セリ、然ルニ執政ノ官吏必ズ言ヒ賜ハム、天下ノ治乱皇威ノ盛衰ハ政ノ善惡ニ在リ、何ゾ教法ノ邪正ニ在ラムヤト、蓋シ然ラズ、夫レ政令ハ外服シテ内服セザル者アリ、故ニ直ニ行レテ直ニ弛緩ス、教法ハ必ズ然ラズ、教法ノ自漸ニ浸潤シテ、終ニ固着スルヤ動カスベカラス、奪フベカラズ、甚キニ至リテハ法ノ為君父ニ叛クニ至ル、恐ルベキ者ハ邪教ニ非ズヤ、是ヲ以テ

政教一致ナラズバ非ズ、草莽ノ微官作平謹テ往古禍乱ノ
萌蘖ヲ按ルニ、蓋シ政教ノ一致ナラザルニ因ルラム、奈
何トナレバ、仮令朝廷ヨリ出テ、神皇ヲ尊敬スベキ旨ヲ
政令シ賜フト雖、教法アリテ之ニ反シ、別ニ神皇ヨリ尊
敬セシムル者アルヲヤ、惟レ政教一ナラズシテ禍乱ヲ醸
セシ所以ナラム、方今ト雖亦然リ、紀元節日、或ハ神嘗
祭日、或ハ先帝祭日等ニハ産土神殿ニ於テ之ヲ遙拝セヨ
ト、官之ヲ衆庶ニ命セラレシカド、仏醜氣ノ盛ナル我
隣(佛)敵故カ、一人ダモ参拝スル者ナシ、然ルニ釈迦或ハ弘
法・親鸞及日蓮等ガ祭日ニハ遠險ヲ厭ハズ、寒暑ヲ凌キ、
雲霞ノ如ク参拝スルヲ以テ考フレバ、政令ノ教法ニ加ザ
ルニハ非ズヤ、神皇ヨリ別ニ尊敬スル者アルニ非ズヤ、
然レトモ惟只一ニノ小事ノミ、古人既ニ論述シ、殊ニ闕
下英明既ニ之ヲ諳シ賜ヘルヲ以テ、今之ヲ論ズルニ及バ
ズト雖、請、其大ナル二三ヲ上陳セム、上古斯道ノ純一
ナルヤ、君臣協和、天下平穩ナラザル無シ、然ルニ儒道
ノ貢来シヤ、斯道ヲ倍養シテ醇ナル者逾醇ナリシニ、仏

法ノ貢来シヤ、其教天理ニ逆ヒ人道ヲ敗ルヲ以テ、斯道
大ニ衰へ人心大ニ乱レ、蘇我馬子遂ニ至尊ヲ弑シ奉リ、
弥々三宝ヲ尊奉セシハ何事ゾモ、然ルニ上宮太子其不共
戴天ノ讎ヲ誅シ賜ハズ、反テ之ト親昵セラレ、股肱忠良
ノ大臣ヲ害ヒ賜ヒシハ、此亦何事ゾモ、其十七憲法厥レ
惟レ何ノ御言ゾヤ、噫呼天祖ノ遺倫、此ニ至リテ始テ地
ニ墜ツ、正義ノ士深ク慨カザラシメヤ、惟レ厥レ他ナシ、
仏恩ヲ尊慕シテ斯道ヲ蔑視スレバナリ、聖武帝三宝ノ奴
ト宣賜ヒシハ、斯道ヲ忘レ賜ヒシナラム、光明皇后仏ニ
溺レテ閨門ヲ瀆シ賜ヒ、帝亦之ヲ怪ミ賜ハズ、藤原広嗣
主之ヲ憤リテ直諫ヲ奉ラレシハ、斯道ヲ知テ彼ニ惑ハレ
ザレバナリ、弓削道鏡斯道ヲ知ラズシテ禍心ヲ懷キシカ
ド、和氣清麿卿斯道ヲ知テ確志変ラレズ、吉備真備卿ハ
彼道ヲ知テ斯道ヲ知ラレザリシニヤ、妖僧ニ詔諛セラレ
帝難ヲ救ヒ奉ラムトモ為ラレズ、世々ノ相將、仏ニ溺レ
テ斯道ヲ忘レラレ、平清盛卿仏ヲ尊ビ妖僧ヲ信ジ、而シ
テ天闕ヲ輕蔑シ奉ラレ、殊ニ源頼朝卿ハ仏ニ溺レ儒ニ僻

ラレ、広元テフ僻儒ニ謀リ、朝廷衰微ノ基ヲ創メラレシハ、皆共ニ斯道ヲ知ラレザレバナリ、北条義時ハ僻儒広元ガ勸メニ従ヒ、三院ヲ遠國ニ放チ參ラセ幼帝ヲ廢シ奉リ、北条高時ハ仏ニ溺レ儒ニ僻リ文武ヲ口実トシテ天皇ニ逆ヒ奉リ、足利尊氏仏ヲ供養スル者ノ至尊ヲ惱メ奉リ、殊ニ義満卿儒ニ僻リ、臣ヲ外國ニ称シ、国体ヲ万世ノ下ニ恥カシメラレ、當時ノ天下之ヲ怪マザルハ何ゾヤ、僻学曲儒、若クハ仏徒皆斯道ヲ知ラザレバナリ、楠正盛(ママ)卿・源親房卿仏ヲ好マレザルニハ非ザレトモ、深ク斯道ヲ尊ビ、君ヲ蹇難ノ中ニ救ヒ奉ラレシニ、恨ヲ抱テ空ク死ナレシハ、當時ノ万姓滔々乎トシテ、皆仏徒否ザレバ皆僻儒、皇威ノ復ラザル怪ムニ足ラズ、況ムヤ一向専念ノ説作ルニ於テヨヤ、譎詐蠱惑其巧ヲ極メ、畏レトモ天祖群神ヲ胆礼スルヲ許サズ、以テ報本反始ノ心ヲ遏シテ、而テ忠孝ノ念ヲ絶チ、専ラ胡鬼ヲ奉ゼシメ、終ニ己ガ邪念ヲ逞セムト欲ス、況ムヤ方今之ニ加ルニ、天主耶穌ヲ以テスルヨヤ、速ニ斯道ヲ興サズバ非ズ、甚畏レトモ方

今ノ御維新ハ、閣下ヲ始メ奉リ、忠臣義士ノ斯道ヲ知シ召テ、而後ニ斯御盛拳アリシ所以ナラム、方今ノ如ク、仏洋繁殖シテ以テ終ニ斯道ノ廢滅ヲ致シナバ、方今ノ如キ御維新、誰カアツテ之ヲ盛拳セム、若シ万一盛拳セムト欲スル者アラバ、惟レ必斯道ヲ知ル者ナリ、実ニ斯道ヲ興サズバ非ズ、然ルニ御維新ノ際、神祇官ヲ置セラレ、宣教庁ヲ設ケラレ、天下ノ人民ニ悉ク其産土神ノ名簿ヲ授ケシメラレ、狐惑迷眩ノ徒ニ始テ神明ノ尊キ事ヲ知ラシメラレシカバ、斯道ノ勃興近ニ在ラムト私ニ其期ヲ待シニ、豈料ムヤ之ヲ一変セラレ、神官僧侶等ニ同心戮力シテ三条ヲ説教セシメラレシニ、真宗ノ賊神祇ヲ蔑視シ奉リ斯道ヲ猜忌シ、遂ニ分離論ヲ主張セシニ、教部省之ヲ赦サレ、從テ諸宗モ亦分離セシメラレ、此ニ至リテ法方再ビ變ジ、三条ノ教則名アリテ実ナク、仏徒大ニ其志ヲ得各其雄ヲ争ヒ、殊ニ真宗・日蓮宗ノ二宗姦佞譎詐ヲザル所ナシ、之ニ加ルニ洋教蔓延ノ患ヲ以テス、如斯邪教日ニ浸潤セバ、終ニハ皇國固有ノ英魂消滅シテ、

昔歳島原耶蘇ノ党、參河真宗ノ徒ノ如ク、我固有ノ神祇
ヲ輕蔑シ奉リ、從テ恩顧ノ至尊ヲ輕蔑シ奉リ、彼ノ外来
ノ邪鬼ヲ尊信シ、從テ其邪僧ヲ尊信スルコト恰モ邪鬼ヲ
尊信スルガ如シ、是ニ於テ其邪念逞フスベク恣ニスベク、
終ニハ天津高御座ヲ動シ奉ル事ノ有ラムカト慮リ奉レバ、
草莽ノ微官作平モ慷慨ニ堪ヘズ、赤心恰モ裂ガ如シ、噫
呼、我島津公閣下少ク愛慰ヲ垂レ賜ヘ、実ニ方今天位ノ
安危ハ斯道ノ興廢ニアリ、然ルニ斯道ノ廢滅既ニ目睫ニ
迫レリ、我公閣下請、明察ヲ垂レ賜ヘ、之ニ依テ微官作
平慷慨憤悶ニ堪ヘズ、敢テ卑賤ヲ顧ミズ、去ル明治七年
九月四日教部省ヘ建白セリ、教部省ヘ建白シシバ終ニハ
閣下ノ御聽ニモ達シ奉ラナムト慮リ奉リシニ、教部省報
ジ賜ハズ、又十二月四日県庁ヲ經テ三条殿下及教部省ヘ
建白セシニ、必ズ御聽ニモ達シ奉ラナムト慮リ奉リシニ、
左院ハ用ヒ賜ハズ、教部省ハ報ジ賜ハズ、然ルニ慨氣
益々腦ヲ刺シ、黙止スルニ忍ビズ、奈何ニモシテ斯道ノ
勃興ヲ祈ラバヤト希望シ、又復策ヲ變ヘ言ヲ改メ左院ヘ

建白セシニ、我県參事之ヲ返却セラレシカバ、作平ガ煩
悶譬ルニ物ナシ、如スル上ハ恐レトモ直ニ閣下ヘ訟ヘ奉
ラムト思居シニ、豈料ヤ閣下御辭職遊バサレシ趣違ニ拝
承シ奉リ、悲憤ニ堪ヘザルナリ、如斯天步艱難ノ秋ニ方
リ、閣下御辭職遊バシテハ、天壤無窮ノ天位ヲ奈何ニ為
シ奉リ賜ハムヤ、彼ト云ヒ此ト云ヒ、慷慨トヤ云ハム、
悲憤トヤ云ハム、煩悶切齒ニ堪ヘザルナリ、噫々我閣下
天壤無窮ノ天位ヲ奈何ニ為シ奉リ賜ハムヤ、閣下大臣ニ
位シ大座坐セシカバ、海内ノ万民皆悉ク心ヲ安ジ居タリ
シニ凶ラザリキ、今日ノ御事實ニ慨歎恐縮ニ堪ヘザルナ
リ、閣下ノ御進退ハ実ニ國家ノ興廢ニ關係ス、其御事甚
至大、伏テ願クバ幼帝ヲ危蹇困難ノ中ニ救ヒ奉リ賜ヘ、
草莽ノ微官作平、畏レトモ閣下ノ御盛拳ヲ祈望シ奉ルノ
外、更ニ佗念ナシ、伏テ願クバ愛慰ヲ垂レ賜ヘ、作平卑
賤頑愚恐縮ニ堪ヘズト雖、國家ヲ憂ルニ黙止スル能ハズ、
謹テ熟々今日ノ御急務ヲ惟ルニ、一二ハ教書ヲ撰定セラ
レ、神道ノ分派セル者ヲ一定セラレテ、神官ヲ始メ万民

ノ方向ヲ一定セシメラレ、二ニハ教部省内ニ宣教庁ヲ設ケラレ海内ニ宣教セシメラレ、三ニハ海内ノ人民ヘ悉ク其産土神ノ名簿ヲ授ケシメラレ、且生死共ニ必ズ之ヲ産土神ニ告ゲシメ賜ヘ、然ルハ先ヅ人初テ生レシ時ハ、神官神殿ニ於テ其赤子ノ神德皇恩ニテ生レシ事ヲ謝シ奉リ、且其赤子ノ幸福ヲ祈リ奉リ、畢テ名簿ヲ授ク、死シ時ハ、神殿ニ於テ其名簿ヲ受取り、死者ノ今日ニ至ル迄、神德皇恩ニ頼リ存命セシ事ヲ謝シ奉リ、且其魂ノ産土神ニ導レテ天界ニ生レ、天祖及先帝等ニ報謝シ、且祖先等ト共ニ遠永ク臣事セム事ヲ祈ラシメラレ、四ニハ上ハ太政大臣ヲ始メ奉リ、下区戸長、番人、羅卒、小頭、組頭ニ至ル迄、総テ吏務ヲ主ル者其奉職中ハ其家ヲ拳テ神葬祭タラシメラレ、天祖及先帝等ニ天界ニ仕ヘシメラレ、顯幽共ニ君臣タラシメラレ、釈魔界ニ陥レ賜フ勿レ、五ニハ仮令無職仏葬祭ノ庶人ト雖、死セシ時ハ神官先ヅ其死者ノ枕辺ニ至リ、其魂ニ今日ニ到ル迄神德皇恩ニテ此現世ニ生存セシ事ヲ説キ聴セ、且産土神ニ導レテ天上ニ升リ、

天祖及先帝等ニ祖先等ト共ニ二仕ヘ奉リ、國家ヲ守リ奉リ、子孫ヲ毛護ルベキ事ヲ審ニ説キ聴セ、畢テ後其好ム所ノ仏葬祭ヲ赦シ、其自由ニ任セシメ賜ヘ、六ニハ大中小学校ニ第一神典ヲ学バシメラレ、七ニハ神官ノ貧窶ヲ憐マレ、仰事俯育ノ資本ヲ立テシメラレ、東西ニ説教セシメ、宣教使ヲ助ケシメラレ、神皇ノ大道ヲ宣布拡充セシメ賜ヘ、此等ノ教事ヲ御採用遊バシナバ、斯道日々ニ興リ、異端月々ニ衰ヘナム、衰ニ乘ジ海内ナル寺院ノ称号ヲ悉ク廢止シ、其地名ヲ以テ何村何町何番教社ト改号セシメ、其中央ニ尊奉セル大日・弥陀・釈迦等ノ仏ヲ脇壇ヘ遷シ祭ラシメ、其中央ニ天照大神ヲ祭リ奉ラシメ、専ラ三条教憲ヲ守ラシメ賜ヒ、終ニハ其教社ヲ廢滅シ、其住僧ヲ帰俗セシメ、海内ニ僧侶ト云者、仏葬祭ト云者無キニ至ラシメラレ、益々斯道ヲ隆興セシメラレナバ、終ニハ斯道海外ニ波及シ、從テ皇威モ万邦ニ輝キ、万邦ノ人民臣服スルニ至ラムカ、惟レ天位ヲ無窮ニ保護シ奉ルノ基礎ニシテ、即チ今日ノ御急務ナラムト慮リ奉ルナリ、千

思万慮直ニ閣下ヲ拝ミ奉リ、訟ヘ奉ラムト欲スト雖、貴賤懸絶徒ニ仰テ心之ニ嚮フノミ、伏テ願クバ御仁察ヲ垂レ賜ヒ、上ハ神皇ノ為、下ハ万民ノ為、速ニ斯道ヲ興シ賜ヘ、草莽ノ微官作平長レトモ閣下ノ御盛拳ヲ祈望スルノ外更ニ他念ナシ、伏テ願クバ微衷ヲ憐ミ賜ヒ、卑賤ノ身ヲ以テ阻越ノ罪ヲ願ミズ、高聴ヲ汚シ奉ルノ条、大赦ヲ垂レ賜ヘ、死罪万謝誠恐誠惶敬白、

明治八年十二月廿五日

長崎県下第六大区二小区肥前国高

来郡南串山村々社

八幡神社祠掌兼

権訓導馬場作平(朱)

奉

島津久光閣下

冊子原寸 縦 二七糎

封筒原寸 縦 二九糎

横二〇・五糎 九枚

横一〇・五糎

三三 山階宮晃親王より島津前左府公へ

時候御見舞

〔封筒〕 島津前左大臣様 侍史中

晃

〔封筒ウラ〕 十二月廿九日

封

晃

〔封紙ウラ書〕

島津二位様 侍史中

晃

冬景十分二候、弥御勇健奉大賀候、寔ニ一昨後は以御使者歳末御祝義美味拝受仕リ、不相変御懇志、千万く畏入奉多謝候、此一折不珍赤面仕候へ共、歳末御礼且時令御見舞申上候驗迄ニ進上之仕候、御咲納被下候ハ、深々畏入奉存候、如是寒夜折角御厭伏願仕候、漸々期拝面候也、

敬白、

亥極月廿九日

二白、彼新聞誌ニ、去ル廿二日御帰国の趣ニ相聞候

ハは驚入奉存候処、所々誤而安心仕候、当節是隠居
同様之境界候へ共、世評内外多事々々、何共く恐
入候、

神州如何と御安じ申上候、乍蔭万々宜く御考奉願
上候也、

文書原寸 縦一七糎 封筒原寸 縦一七・八糎

横四六糎 横 五・三糎

二七〇 山内忠明ヨリ政府へノ建白

西洋心酔ノ弊ヲ論ス

(表紙)
「奉言上」

謹而奉言上候

御維新爾来専ラ洋制御主張ナレトモ、一体之上ニ於テハ
倭漢洋混淆シ、庶民各自着不定、於茲人心一ノ和ナス不
能、抑洋制ナル者、我国土ニ応シ是トナス一トシテナシ、
只伶俐ニ趨リ信義ヲ失ヒ人情ニ背ク、害勝テ算ヘ難シ、

我全国之内ニ於テスラ、西州ノ制度彈ク東国ニ移ス不能、
況乎海外迂遠ノ国式、我風土ニ当ルヘキニ非ス、是ヲ以
テ慮ルニ、有司之各君卓見ナク、明良俊弼ナキ故ナルヘ
シ、如斯洋酒ニ惑溺シ、数千歳確美独立万緒無欠、欠国
体ナルヲ物真似之為ニ破壊シ、竟ニ外邦ノ奴トナルニ至
ラン、可悲可歎至極也、就中万民困乏、月ヲ逐年ニ先立
テ、上下疲弊、至レリ尽セリト可云、之ヲ嗟歎シ論スル
者不寡ト雖モ、然シニハ其方法如斯ナシテ、万民塗炭ノ
苦身ヲ除ント立法ノ計算ナスモノ亦ナシ、此儘ナランニ
ハ、瓦解ヲ招ニ似タリ、素リ、周海一字ノ本邦、四面八
向敵ナラサルナシ、而レハ神速ニ国法改洗シ、洋制ニ不
泥、且各国へ依頼ス教師等廃セラレ、風土人情ニ応スル
良法ヲ得レハ安ク因循シ、時ヲ遷セハ危キコト卵石ノ一
拳ニ迫レリ、今爰ニ護岡豊民斉照国ト云ル一隅士アリ、
報国ノ志厚ク卓見亦衆ニ超、常ニ国家ノ法格規律ニ心思
ヲ委ネ、時中ノ処分ヲ按シ、如斯万民窮迫セルヲ言下ニ
翻ス方法ニ至ル迄思慮シ、諸人鼓腹シ、全国挙テ一和セ

冊子原寸 縦二五糧 横一七・五糧 四枚

三三 帝号大日本国政典

(表紙付奥巻)
「帝号大日本国政典」

草案

帝号大日本国政典

第一 国境

第二 国民ノ権利及其負責

第三 政務

甲 皇帝陛下ノ威權

政務兩局 乙 諸省卿ノ権利及其負責

丙 議院ノ權利

丁 地方ノ章程及其政治

戊 法度

第四 大藏ノ章程

第五 官員ノ定制

シメ、万世不易永遠承平之政態ヲ得ル、神妙不測ノ方法
ヲ胸中ニ存スト雖モ、御採用ナキヲ慮リ沈黙セリ、仰キ
願ハ貴賤ヲ避サセ玉ハス、彼者ヲ近ク召レ、其言処其行
処賢察アラセラレ、当否ニ属テ登用セラレ、本邦永統ノ
御計議伏而奉歎希候、洋着心ノ人々動モスレハ、只彼ヲ
賢トシ我ヲ愚トシ、万法千術悉ク彼ニ在テ我ニナキ物ト
ス、愚ノ甚シスヘシ、諸般我ニ先立テ開化シ、彼ニ於テ
未開ナルモアリ、何ヲ以テ彼ヲ尊信シ我ヲ賤シム、其因
テ起ルヲ不知、所謂一丈虚ヲ告、万丈之ニ応スニ均シ、
靈妙無双ノ風土ニ性ヲ稟ナカラ、自ラ彼ニ不及ト定ルハ
何ソヤ、右護岡ノ如キ洋法術等微笑シ愉快トセス、今仁
術ヲ施シ糊口ヲ助ク、是亦洋術ニ不泥、如此人才ニ非レ
ハ、彼カ術計ニ陥ントスル、時世ヲ覆シ、皇國ノ基本
ヲ貫クコト難カラン、依之憂國之心思ニ不堪、不敬ノ多
罪ヲモ不顧奉忠告候、再拜々々謹言、

明治八年十二月

山内忠明

上

第六 一般ノ定制

第七 政典変革ノ定制

帝号大日本国政典

第一 国境

第一章

帝国ニ附属スル諸州諸島ノ土壤ハ即日本国タルヘシ、

第二章

右土壤ノ境界ハ典則解下ニ見ルヘシノ威權ヲ以テナラテハ決シテ変革アラサルヘシ、

第二 国民ノ權利及其負責

第三章

人民土籍ニ入ツテ日本国ノ民位ニ列シ、或ヒハ其位ヲ脱スル等ノ事件ハ總テ政務両局ノ裁判ニ係ルヘシ、

第四章

日本国ノ民位ハ華族ト平民ニ止ルヘシ、且銘々随意ノ職業ニ就クコト以往自由タルヘシ、

第五章

日本国土壤ノ主ハ即闔国ノ人民ニシテ、日本国ノ民位ニ列スル者はナリ、

第六章

闔国ノ人民諸般ノ典刑ニ対向スルトキハ、更ニ門地ノ時格ナク、華族平民總テ同等タルヘシ、且ツ諸般ノ官務モ亦世襲ノ旧癖ヲ廢シ、各自ノ器量ニ従ツテ人民一統ニ之ヲ奉職スルコトヲ得ヘシ、

第七章

住居移転ノ典則ニ従ヒ、銘々内国ニ於テ其住所ヲ転移スルコト以往自由タルヘシ、

第八章

各人ニ固有スル天赋ノ權利ハ保護アルヘシ、随ツテ誰人タリトモ嘗テ制度アル手續ナラテハ、暴ニ訟庭ニ徴サレ、或ハ其意ニ戻リ其利ヲ矯メテ、訟庭ヲ退ケラル、コト勿ルヘシ、

第九章

残賊盜竊ト雖、現場ニ暴行スル者ナラサレハ、敢テ私ニ
收縛スヘカラス、且ツ不審ノ処行アル者ト雖モ、制度ノ
手續ニ從ヒ司法士ノ命令ヲ得テ始メテ收縛スヘシ、

第十章

懲治ノ刑罰ハ刑典ニ依ツテ公裁アルヘシ、随テ私ニ復讐
スルコト堅ク禁止タルヘシ、且ツ刑人ノ家産ヲ没入スル
コト刑典ノ裁セサル、例外ニ在ツテハ今ヨリ之ヲ廢止ス
ヘシ、
。廣造金セシ器械等ヲ云フ

第十一章

訟曲ヲ定奪シ罪科ヲ裁判スル所局訟曲定奪所
罪科裁判所ハ、華族平民
ニ対シ齊シク同一タルヘシ、

第十二章

事故ニ依ツテ人民ノ住家エ入り、随ツテ其室ヲ搜捉シ、
家財ヲ点檢スルコト舊々制度ノ手續ヲ以テ之ヲ処スヘシ、
否ラサレハ人民ノ居宅ニ乱入スルコト堅ク禁止タルヘシ、

第十三章

人民ノ固有物ハ決シテ掠奪スルコトアラサルヘシ、但シ

之ヲ取ツテ公用日本國ノ
公用ヲ云ニ給セサルコトヲ得サルトキハ、
相当ノ代価ヲ以テ各自ノ損失ヲ補フヘシ、

第十四章

両姓男女兩
姓ヲ云配偶スルトキハ婚姻ノ典則ニ從ヒ、事体ヲ司
法士ニ達テ、其檢査ヲ經テ始メテ婚禮ノ式ヲ行フヘシ、

第十五章

華族平民ノ差別ナク、総テ日本人タル者ハ一夫同時ニ一
婦ニ配シ、一婦同時ニ一夫ニ配スヘシ、要スルニ正配ア
ル者ハ別ニ倍配ヲ保ツコトヲ得サルヘシ、

第十六章

華族ト平民ノ間ニ婚姻ヲ取結フコト、固ヨリ各自ノ随意
ナルヘシト雖、女ニシテ華族ニ生レ、長シテ平民ニ嫁ス
ルトキハ、婚禮ノ日ヨリ已ニ華族ノ名称ヲ失スヘシ但シ
皇族
并公族ノ家法ヲ論シ、以テ冠位ヲ尊重スヘ、
シ、平民ノ処女華族ニ嫁スルトキハ反之

第十七章

皇族及公族ヲ除クノ外、縦令実子ナキ者ト雖他人ヲ取ツ
テ養子トナスコト今ヨリ禁止タルヘシ、

第十八章

日本国ニ住テ主トシテ信仰スヘキ宗旨ハ^{マツ}釈迦教ナルヘシ、
随テ耶蘇教及他教ヲ信仰スルコト姑ク禁止タルヘシ、

第十九章

日本全国ノ幼男女ハ華族平民ノ差別ナク、嘗テ政府県郡
及組等ヨリ設ケ置ケル学校ニ入門シ、可成の普通ノ学科
ヲ修行スヘシ、但男女トナク入門ノ期限ハ各已八歳ノ齡
ニ在ルヘシ、故ニ父及後見役タル者ニシテ其子及猶子^後
^{セラル、幼孤}ノ者ヲ云フ^見ノ已ニ九歳ニ齡スル者ヲシテ、未タ学校ニ入
門セシメサルトキハ、文部省典則ノ定制ニ随ヒ相当ノ微
罪ヲ負フヘシ、

第二十章

一人或ハ数人合衆シテ私学校ヲ設クルコト自由タルヘシ、
且ツ幼男女ノ者モ便宜ニ從ツテ公私学校ニ入門スルコト、
各其意ニ随フヘシ、要スルニ修行成就スルトキハ公私ノ
故ヲ以テ聊カ差等權利アラサルヘシ、

第廿一章

公私学校ノ差別ナク教授ノ科目及其方法ハ、可成の全国

ヲシテ同一ニ歸セシムヘシ、故ニ私学校ヲ建立セル者ハ、
予メ校内講習ノ規範ヲ条列シ、之ヲ文部省ニ示シ其許可
ヲ經テ始メテ講場ヲ開クコトヲ得ヘシ、

第廿二章

諸学校建立及其修覆等ノ費用ハ文部典則ニ從ヒ、總テ之
ヲ政府及県郡組等ヨリ給スヘシ、但シ組貧究ナルトキハ、
諸般ノ雜費中一部ハ之ヲ政府ヨリ給スヘシ、然レトモ貧
人学校ニ在ツテハ政府管々造築修覆ノ雜費ヲ給スルノミ
ナラス、生徒モ亦官費ヲ以テ修業スルコトヲ得ヘシ、

第廿三章

公学校ノ教師タル者ハ、自他ノ官員ト齊シク政府ヨリ俸
禄ヲ得ヘシ、且ツ其位階^{カケ}モ亦官員トシテ見ルヘシ、

第廿四章

言語書跡板刻及諸般ノ比賦等ニ依ツテ、各自ノ勘考ヲ吐
露スルコト、固ヨリ銘々ノ随意タルヘシト雖、之ヲ返リ
テ政府及他人ヲ^{マツ}非放シ風俗ヲ紊乱、遂ニ一般ノ物情ヲ挑

撥シ、人民ヲシテ危険ノ際ニ誘導スル者ノ如キハ、刑罰ノ典則ニ從ヒ相当ノ罪科ヲ逃ルヘカラス、

第廿五章

新聞紙局頭取タル者日新見聞ノ雜事ヲ板刻セシニ、未タ之ヲ世ニ公ニセサル以前、先ツ一紙葉一冊子ヲ取ツテ之ヲ巡邏局ニ示シ、以テ売弘ノ許可ヲ問フヘシ、且ツ何等新聞紙タルノ差別ナク之ヲ板刻スルトキハ、紙冊ノ初末ニ必ス頭取ノ姓名ヲ記載シ申稟^{解第三ノ編ニ見ルヘシ}ノ証拠トナスヘシ、
學者書籍ヲ出版スルモ亦然リ、要スルニ記者ノ姓名ナキ書冊ヲ売弘ムルコト堅ク禁止タルヘシ、

第廿六章

華族平民ノ差別ナク總テ日本國ノ民位ニ列スル者ハ、一般ニ兵賦ヲ負フヘシ、但シ^勳勳務ノ規範及其時限ノ長短等ハ追テ兵部典則ヲ以テ定制スヘシ、且ツ士官兵卒タル者ニシテ反戾犯罪スル時ハ^{海軍陸軍}兵部典刑ニ從ツテ懲治セシムヘシ、

第廿七章

華族平民ノ差別ナク總テ日本國ニ住居スルモノハ、租稅ノ典則ニ從ヒ銘々相当ノ租稅ヲ出スヘシ、

但 外國人居留地へ住居スル歐米人ハ
格外タルヘシ、外國公使モ亦然リ、

第廿八章

諸省議院へ願書及訴訟書ヲ出スコト銘々ノ自由タルヘシ、但シ願書及ヒ訴訟書ニシテ姓名ヲ記セサル者ハ一切之ヲ採用セス、且^{メクラハコ}首箱今ヨリ廢止タルヘシ、

第廿九章

衆人武器ヲ携ヘスシテ一宅一室ニ会同シ、或ハ典則ニ戾ラスシテ会社ヲ結フコト自由タルヘシ、但シ衆人街道及野外集会スルコトアラハ、三日前事体ヲ巡邏局ニ告テ其許可ヲ問フヘシ、

第三十章

無事平安ノ時ニ方ツテハ官命ト雖、決シテ他人ノ書翰ヲ披拆スルコト能ハス、之ニ反シテ戰爭ノ時限及訟庭ヨリ罪夫及罪科等ヲ驗治スルノ急ニ会スルトキハ、典則ノ定制ニ從ヒ、私用ノ書翰ハ都テ之ヲ披拆スルコトアルヘシ、

○第三

政務

第三十一章

政典中百般ノ箇条ハ、即 皇帝ト人民ノ間ニ一致セル定
制タルヘシ、随テ 皇帝及ヒ諸官員ノ処置ト雖事實政典
ノ意趣ニ反セサルトキハ、即君民一和セル所行ト知ルヘ
シ、

第三十二章

典刑ヲ作為スル威權ハ、素トシテ 皇帝及ヒ議院ヘ歸ス
ヘシト雖、時勢ヲ顧ミ 皇帝典則ヲ作為スル議論ヲ決定
シ、議院ハ其議ニ参与スヘシ、

第三十三章

諸種ノ典則及臨時ノ布告書解下ニ見ハ 皇帝ノ御璽ヲ經
テ始メテ公通スヘシ、

第三十四章

政典ノ定制ニ從ツテ政務ヲ調理スル威權ハ全ク 皇帝ニ
歸スヘシ、

第三十五章

訟曲ヲ定奪シ、罪科ヲ裁判スル威權ハ全ク訟庭ニ歸スヘ
シ、

○第四

甲 皇帝ノ威權

第三十六章

皇帝ハ不可議不可傷ノ尊体ナルヘク、其諸卿タル者ハ每
ニ申稟ノ心得アルヘシ 諸卿過失アラニ議院ヨリ之ヲ訴訟スルト
キハ事實ヲ明瞭ニ疏条シテ免罪スヘシ然
レトモ所行果シテ超制シ、疏条ニ言ナキトキハ終ニ免、
官ニモ至ルヘシ、申稟トハ此等百般ノ關係ヲ云ナリ

第三十七章

典則ヲ許可シ布告スルハ固ヨリ 皇帝ノ威權タレトモ、
事故ニ依ツテ典則行レス、或ハ障碍セラル、アルトキハ
皇帝ヨリ臨時ノ布告ヲ以テ、必其徹底ヲ期スルコトアル
ヘシ、然レトモ縱令 皇帝ノ大命ト雖百般ノ布告書中少
ナクトモ一省卿ノ加印ナクンハ、決シテ公通スヘカラス、
但シ省卿タル者加印セルヲ以テ始メテ申稟ノ責ヲ任スヘ
シ、

第三十八章

諸省卿以下文武官員ヲ黜陟シ、及其位階ヲ班シテ附与スル等ノ威權ハ、独リ 皇帝ニ帰スヘシ、但シ別ニ典則アツテ定制スル者ノ如キハ此章ノ例ニ非ス但住民ヨリ組頭、ヲ撰採スルノ類、且ツ 皇帝ト雖一人ヲシテ同時ニ文武両官ヲ兼任セシムルコト勿ルヘシ海陸軍省卿ハ武官ヨリ之レヲ奉職スヘシ、反之武、官ヨリ文事行政ノ職奉職スルコト能ハサル類ナリ

第三十九章

海陸軍大將ハ 皇章タルヘシ、随ツテ兵部一般ノ權利、特ニ和戦ヲ判シ、味方ヲ結フ等ノ事件ハ、独リ 皇帝ノ威權タルヘシト雖、他國ト交際貿易ノ条約ヲ結フモ亦 皇帝ノ全權ニ帰スヘシ、然レトモ交際貿易ノ条約他國ト調印ノ後ハ、必ス公然全国ニ布告アルヘシ、且ツ布告書ノ意趣ト調印セル条約原文ノ意趣トハ聊カ齟齬アルヘカラス、

第四十章

刑夫罪人ノ懲罰ヲ減シ死一等ヲ減シテ流罪ニ當テ終身ノ堡城、獄ヲ減シテ禁監數年ニ代ユル等はナリ 罪科調理ヲ中絶スルコト罪夫ヲ訟庭ニ徵シ、方ニ其所行ヲ吟味スル時限中 皇帝頓ニ其吟味ヲ廢止セシム

アリ、亦 皇帝ノ威權ト雖諸卿過失アツテ、訟庭已ニ其罪ヲ裁判セシトキハ、 皇帝ト雖嘗テ訴訟セル議院ノ納得ナクンハ、妄リニ其罪ヲ減却スルコト勿ルヘシ、

第四十一章

議院ヲ開閉シ、或ハ議士ヲシテ不時ニ代謝但シ撰採セラレテ代謝セシセシムル等 皇帝ノ威權ニ帰スヘシ、但シ全ク解職セシトキハ、六ヶ月百八十日ヲ云ヲ出スシテ再ヒ議員ヲ撰採シ、其員類須ク全アルヘシ皇帝陛下ハ各省卿及議員ノ外其内閣ニ於テ、平常元老ヲ集メ行政ノ總事件重大緊要ニ係ルトキハ、亦其員ヲ徵シテ顧問スルコトアルヘシ

第四十二章

賞表勳功アル文武ノ胸部等ニ附貼スル鍍族ノ表片ナリ及ヒ華族ノ名称ヲ附与スルコト、独 皇帝ノ威權タルヘシ、然レトモ華族タル者別ニ非常ノ特格ヲ幾望スルコト能ハサルヘシ、

第四十三章

交際金銀所謂世間通用ノ金銀貨ナリヲ製作スルコト、全ク 皇帝ノ威權タルヘシ、

第四十四章

毎歳 皇帝ノ費用スル金資ハ典則ヲ以テ其員数ヲ定メ、
收納ノ租税中ヨリ之ヲ奉給スヘシ、

第四十五章

日本皇帝ニシテ議院ノ納得ナクンハ、同時ニ他国ノ帝王
ヲ兼任スルコト勿ルヘシ、

第四十六章 (案)

日本皇帝ノ祚階ハ畜々神武皇統ニ止リ、往々男性特ニ至
尊ノ長男タル者世々旧業ヲ襲フコトヲ得ヘシ、但シ 皇
帝崩御シテ親宮ヲ世ニ遺サ、ルトキハ、諸元老卿及ヒ議
士會議シテ新帝ヲ四家ノ皇族ヨリ本撰スヘシ、

第四十七章

皇帝ハ尊齡十八歳二百十六ケ日云本ノマ、月カニシテ独立成男シ、随ツ
テ即位スルコトヲ得ヘシ、但シ幼主ニシテ尊齡十八歳ニ
盈タサルトキハ、須ク諸卿顧問員及議院ヨリ皇族一名ヲ
撰択シ、以テ至尊ノ後見役トナスヘシ、然レトモ後見役
ノ世ニ在ツテハ政典ノケ条一切変革アラサラルヘシ、

第四十八章

皇帝祚階ニ昇ルトキハ、須ク議士ヲ会シテ政典ニ則リ、
政典則ニ從ツテ政治スルコトヲ誓御アルヘシ、

但シ皇族ニシテ後見役ノ位階ニ就クトキモ亦同前ノ

誓詞アルヘシ、

第四十九章

皇帝崩御シ、或ハ疾病ノ患アツテ自ラ政務ヲ調理スルコ
ト能ハサルトキハ、 皇太子祚階ニ昇ルコト固ヨリ論ナ
シ、然レトモ 皇太子ノ尊齡未タ十八歳ニ盈タサルトキ
ハ、其後見役タルヘキ皇族ヨリ急ニ議士ヲ会シ、後見役
ニ就クヘキ礼式ヲ行フヘシ、

第五十章

皇帝皇族并幼少ナルトキハ諸卿顧問議院ト協和シテ、万
政ヲ調理シ以テ其独立成男ヲ待ツヘシ、

第五十一章

皇家ノ私有物皇家固有ノ山野地 金貨城樓等ヲ云ハ、追テ典則ヲ以テ定制ス
ヘシ、

皇家私有ハ別ニ製作シ、
奉獻スヘシ、

乙諸卿ノ權利及其負責

第五十二章

皇族及他人ニシテ未タ日本國ノ民位列セサル者ハ、決シテ日本國ノ卿位ニ列スルコトヲ得サルヘシ、

第五十三章

諸卿タル者行政ノ間、縱令過失アルニ似タリト雖、元老院及議院ヨリ確實ノ事跡ヲ証シテ 皇帝ニ訴訟セサレハ、世間ノ譏議妄リニ一卿ノ官職ヲ解クコト能ハサルヘシ、

第五十四章

諸卿負責スヘキ申稟ノケ条及其過失アツテ訴訟セラル、トキハ、裁判ノ手續及懲罰ノ方法等ハ別ニ典則ヲ以テ之ヲ定制スヘシ、

「第一訟庭及探題官ヨリ裁判セハ如何ノミ」

第五十五章

諸卿疾患ニ悩ミ、或ハ公許旅行セシトキハ、大輔タル者姑ク其名代タルヘシ、但シ名代セル時限中行政典則ニ戻ルトキハ大輔タル者独リ其申稟ノ責ヲ負フヘシ、

第五十六章

諸卿タル者ハ同心協力 皇帝ヲシテ政典ニ則リ、典則ニ戻ラスシテ万政ヲ調理セシムルコト、全ク其職務タルヘシ、且ツ諸卿中卿頭太政大臣及卿頭次官副大臣ノ官位アルヘシ、

丙 議院ノ權利

第五十七章

撰択士タル者ハ日本人民ノ名代タルヘシ、會議討論スルモノハ、即 皇帝独リ政治ヲ私セス、広ク之ヲ人民ニ付度スル所以ナリ、但シ某議士素某州ヨリ撰択セラル、ト雖、議院ニ会集シ政府ニ対向スルトキハ、各広ク日本人民ヲ名代スルノ覚悟ヲ存シ、狡ク一州ノ私ヲ顧ルコト勿ルヘシ、

（補外ニアリ、卷）
丙 元老院

第五十七章

元老官ノ義務ハ

皇帝陛下ヲ輔翼シ、百事ヲ政規典則ニ照準シテ、其顧問ニ奉

対スル事アルヘシ、然レトモ行政ノ際各省卿政規ニ悖戻シ、典則ニ違反スル所行アルトキハ、之ヲ咎責スルノ權利アルヘシ、

第五十八章

撰択士ノ主務ハ管ニ諸般ノ典則ヲ為作スル議論ニ参与スルコトタルヘシト雖、典則ノ草案ヲ為作スルハ政府議院阿ナカラ其權利アルヘシ、且ツ議院ハ毎歳政府ノ出納ヲ検査スルコトヲ得ヘシ、

(欄外ニアリ、米)

第五十八章

誰人ヲ顧問員ニ命シ尋イテ其位階ヲ班シ、及ヒ時宜ニ依リ其員ヲ拔テ某卿ニ仕シ、或ハ某卿ニ復職セシムル等、固ヨリ

皇帝陛下ノ威權ニ歸スヘシト雖トモ、元老タルモノハ以往従前ノ功臣ニシテ在職中位官勅任ノ顯榮ヲ有チ、且現ニ一歳間二百十円ノ税ヲ出スモノニ非ラサレハ、決シテ其員ニ列スルコト能ハサルヘシ、

第五十九章

議士会場ニ列スルトキハ各自ノ勘考ヲ吐露シ、公然討論

ヲ放ツテ忌憚ナカルヘシ、且ツ衆庶ヲシテ其議ヲ侍リ聞シムヘシ、但シ議長官タル者ハ事体ノ便宜ニ從ヒ、会場ヲ閉チテ蜜議セシムルノ權利アルヘシ、諸般ノ議論ヲシテ判決セシムルトキハ、議長官タル者先ツ議士ノ可否ヲ問ヒ、其數ノ多少ヲ以テ一決ヲ判スヘシ、

但シ、議院ニ於テ其典則ヲ草案シ、或ハ其事件ヲ精蜜ニ検査スルトキハ、議員中ヨリ更ニ數名ヲ撰シテ事務ヲ調理セシムルコトヲ得ヘシ、

(欄外ニアリ、米)

第五十九章

元老タルモノハ 皇帝陛下ヨリ附与スル官俸ノ外、別ニ月俸ヲ幾望スルコト能ハサルヘシ、

第六十章

撰択士タル者ハ探題知事及代官ノ撰挙ヲ經テ始メテ議員ニ列シ、三歳ヲ經テ代謝スヘシ、随テ毎三年探題知事及代官ヨリ新ニ議士ヲ撰択スヘシ、

但シ公家(トキ)等ハ撰挙ヲ待スシテ永世議員ニ列スルコ

トヲ得ヘシ、

撰択スル方法ハ、別ニ典則製シテ其制ヲ定ムヘシ、

(欄外ニアリ、朱)
第六十章

議官ハ素トシテ人民ヨリ撰択スヘシト雖トモ暫ク先

ツ

皇帝陛下ヨリ府県ノ知事及ヒ令ヲ以テ其員ニ充ツヘシ、但シ公家二十九名、撰挙ヲ待スシテ今ヨリ後永

世議員ニ列スヘシ、故ニ現今議院ニ又出席スルコト

ヲ得ヘシ、

第六十一章

誰人タリトモ未タ日本国ノ民位ニ列セス、一歳間六十円

ノ租税 ヲ出サス、年齢三十二盈タサル者ハ決シテ議院

ノ員数タルコト能ハス、且ツ従前刑罰懲治等ヲ蒙レル者

モ亦同前タルヘシ、

第六十二章

撰択士始メテ議院ニ登ルトキハ、交互ニ其民位年齢及従

前ノ行状等ヲ質問シ、随テ議長官及議長次官史等ヲ撰択

シ以テ事務ノ位置ヲ立ツヘシ、

(欄外ニアリ、朱)
第六十二章 脱ヲ補

但シ議長次官ヲ撰択スル權利ハ議員ニ歸スヘシト雖トモ、之

ヲ其官ニ任スル威權ハ全ク 皇帝陛下ニ在ルヘシ、故ニ議院

其長官ヲ撰択スルノ初、必長次官ノ差別ナク、能ク其任ニ適

当スヘキ人物各三名ヲ奏薦スヘシ、然レトモ 皇帝陛下其三

名ヲ鑑別シテ不当トナサハ、 皇帝陛下ヨリ更ニ他人ヲ撰ン

テ其官ヲ任スヘシ、

第六十三章

議員ニシテ未タ三歳ノ期限ヲ經歷セサル者ニ会々 皇帝

ノ大命ニ応シ、随テ官員諸省官員ヲ云ナリニ列スルトキハ、即日

議員ノ名称ヲ脱シ、議院ノ會議ニ参与スルコトヲ得サル

ヘシ、

官員諸省官員ヲ云ナリ、但司法士諸教頭ハ、官員ト雖モ此ノ条列ニアラスニシテ議士撰択セラ

ル、者ハ、期限中其本官ニ現動スルコト能ハサルヘシ、

(欄外ニアリ、朱)
第六十三章 両説ノ一

知事及ヒ令一歳一次議院ニ出席スト雖トモ、固ヨリ本官ヲ保

チ、閉院ノ日ハ帰県帰府シテ本職ニ就クヘシ、

第六十四章

全院ノ議士、不時ニ代謝スルコトアランニ、従前ノ議士、重ネテ撰択セラル、コトヲ得ル者アルヘシ、期限ヲ歴へ、

議士一統ニ代謝スル時モ、亦同前タルヘシ、

(編外ニアリ、朱)
第六十四章

議官ノ員ハ定数アツテ如何カ

知事及令ニシテ議員ノ職ヲ免セラル、トキハ

皇帝陛下ヨリ更ニ其府其県ニ於テ知事及令ノ次官ヲ撰シ、或

ハ他ノ省使官ヲ以テ其欠ヲ補フヘシ、

第六十五章

議士ノ会場ハ東京タルヘク、且ツ開院ノ定日ハ毎歲一回、

十月廿日ヲ以テ定規トナシ、五十日ヲ経テ閉院アルヘシ、

但シ開院及閉院ノ日ハ 皇帝大広間ニ出席シ、宜ク当日

ノ礼式ヲ行御アルヘシ、事故アリテ 皇帝親シク議院ヲ

開閉スルコト能ハサルトキハ、皇子一卿尊慮ヲ承ケ須ク

当日ノ礼式ヲ行フヘシ、

第六十六章

卿及大輔ニシテ過失アルトキハ、議院ヨリ先ツ其申稟ヲ

催促シ疏条曖昧、或ハ罰科已ニ判然タルトキハ、事実ヲ

証シテ 皇帝ニ訴訟スヘシ、且ツ書籍ヲ以テ民間ヨリ卿

及大輔ノ過失等ヲ議院ニ訴訟スルトキハ、議院其書ヲ投

シテ卿及大輔ニ致シ、以テ其申稟ヲ催促スヘシ、

但、民間ヨリ出セル百般ノ願書及訴訟書ニシテ、独

リ一議士ノ姓名ニ当ルモノハ、敢テ全院ノ承諾ヲ期

スルコト能ハサルヘシ、

第六十七章

公家議員ヲ除クノ外、総テ撰択士タル者ハ政府ヨリ東

京ト家郷ノ間ニ往来スヘキ旅費、及滯京間ノ費用ヲ給ス

ヘシ。

(編外ニアリ、朱)
脱ヲ補フ

ト雖トモ、本官月給ノ外別ニ給俸アラサルヘシ、

但シ、公家議員タル者ハ月給旅費一切之レヲ幾望スルコト

能ハス、

第六十八章

議員タル者開院五十日間ハ縦令一箇ノ超制限制ヲ犯セ等アリト雖トモ妄ニ收縛セラレ、或ハ訟庭ニ徴サル、コト勿ルヘシ、但シ現場ニ暴行スル者アルトキハ決シテ此章ノ例ニ非ス、

丁 地方ノ章程及其政治

第六十九章

日本全国ノ土壤ハ道県郡及組ニ分ツヘシ、其探題知事代官及組頭等ノ任官及權利ノ限制等ハ意趣、次ノ四条ニ基キ、別ニ典則ヲ制シテ之ヲ取極ムヘシ、

甲 道県郡及組ノ住民ニシテ事務道県郡及組ニ関

渉スルコトアリテ、広く公議ヲ要スルトキハ各々会同シテ決議スルコトヲ得ヘシ、但シ事体會議ヲ要スルトキハ未タ会同セサル、以前事情ヲ政庁ニ通シテ其許可ヲ問フヘシ、
乙 探題知事及代官ヲ任官スルコトハ、独リ政庁ノ威權ニ帰スヘシ、但シ組頭ハ組内ノ住民ヨ

リ撰択スルコトヲ得ヘシ、

丙 組内ノ私事ハ組内住民ヨリ調理決議スルコト

ヲ得ヘシ、且ツ住民三万口以下ノ府県ニ在テハ一般ノ巡邏典則ニ從ヒ、數組談和シテ自ら巡邏卒ヲ備フルコトヲ得ヘシ、

丁 探題知事代官及組頭タル者ハ、一歳間其管内

ニ出納セル金穀ノ員數ヲ毎歲會計シテ之レヲ政庁ニ出スヘシ、

戊 法度

第七十章

公私訟曲公法及私法ニ關係スル訟曲是ナリヲ裁判スルノ事務ハ一切訟庭ニ帰スヘシ、但シ訟庭事務ヲ調理スルニ当テハ一々典則ヲ奉戴シ、蜜ニ条理ヲ分疏シ決シテ自他ノ私情ヲ顧ルコト勿ルヘシ、訴訟ヲ定奪シ罪科ヲ裁判セルトキハ、必ス典則ノ章句ニ証シ、何故刑罰シ、何故懲治スル等ノ原由ヲ表シ、且ツ刑罰懲治等ハ總テ 皇帝ノ尊稱ヲ以テ之レヲ処スヘシ、

第七十一章

訟庭ハ三等ニ班シ、第一第二第三訟庭公私兩庭ヲトナシ、合併スヘシトナシ、
 毎道一箇ノ第二訟庭ヲ置クヘシ、毎郡一箇ノ第一訟庭ヲ
 置クヘシ、但シ第三訟庭ハ日本全国中東京ニ於テ密々一
 箇所ヲ置クヘシ、兵部訟庭、商売訟庭及其庭内ノ關係等
 ハ別ニ典則ヲ以テ定制スヘシ、

第七十二章

定奪判決ハ公然訟庭ノ一場ニ會議シテ調理スヘク、衆人
 モ亦其場ニ倍シテ自ラ事實ヲ証スル事ヲ得ヘシ、但シ調
 理ノ事實板邊淫逸等ニ係リ、随テ臨場セル物情ヲ挑撥ス
 ルノ戒アルトキハ、須ク事体ヲ公布シ一場ヲ閉チテ調理
 スルコトアルヘシ、

第七十三章

定奪裁判ヲ司ル者ヲ司法士ト名ケ、皇帝ヨリ制度典則
 ニ明通セル者ヲ撰ンテ其官ニ充タシ、全權其事務ヲ調理
 セシムヘシ、且ツ司法士タル者ハ一回仕官スルトキハ追
 次ニ超遷シ、典則及訟庭ノ規範ヲ犯スニ非レハ終生ヲ期

シ、決シテ其官ヲ罷ラル、コト勿ルヘシ、

司法士タル者ハ定奪裁判ノ事務ヲ調理スルニ止リ、決シ
 テ自他ノ官職但シ政府ヨリ權祿ヲ給スヘキ諸官職ノ總名ヲ兼任スルコト能ハサル
 ヘシ、但シ議士ニ撰択セラル、事件ハ、此ノ章ノ例ニア
 ラス權祿本官ノ分、依然タルヘシ、

第七十四章

訟庭威權ノ限制及訟庭百般ノ規範ハ、別ニ典則ヲ以テ定
 制スヘシ、

第七十五章

行政官ト司法官トノ間ニ起レル争論等ハ、五十四章ノ手
 続ニ從ツテ裁判アルヘシ、

第七十六章

司法士タル者訟庭威權ノ限制ヲ犯シ、及ヒ其規範ヲ破ル
 トキハ見聞セシ者ヨリ直ニ之ヲ訟庭訴訟スヘシ、

第七十七章

司法士タル者奉職々々年ヲ歴テ死去セシトキハ、政府ヨ
 リ訟庭ノ規範ニ從ヒ、遺世ノ妻子ヘ見継金ヲ給スヘシ、

○第四 大蔵ノ章程

第七十八章

百般ノ歳入歳出ハ其未タ出入セサル已前、大蔵省ニ於テ予メ其員数ヲ統算シ、省卿ヨリ之ヲ議院ニ示スヘシ、且ツ政府毎歳ノ出費ハ各年典則ヲ以テ其員数ヲ定ムヘシ、

第七十九章

各省毎歳ノ出費ハ略々其出費スヘキ箇条ヲ記載シ、各省卿ヨリ之ヲ議院ニ示スヘシ、且ツ議院出費ノ箇条ニ疑惑スルトキハ、省卿タル者公然其原由ヲ検査セシメサルコト能ハサルヘシ、

第八十章

非常ノ事故アツテ歳出当年ノ限制ヲ踰スルコトアルトキハ、追テ議院開場スルニ方リ政府ヨリ事実ヲ明瞭ニ証スヘシ、

第八十一章

租税典則ニ記載セル公賦ノ租税ハ、毎歳大蔵省ヨリ之ヲ收納スヘシ、且ツ新ニ租税ヲ賦スヘキ事物出産スルトキ

ハ更ニ会議ヲ設ケ、論說一和スルトキハ以テ租税ノ典則トナスヘシ、

第八十二章

道県郡ニ在テ毎歳ノ出納独リ其管内ニ係ルモノト雖トモ、探題知事代官タル者随意ニ道県及郡ノ租税ヲ賦シテ、歳出ヲ補フコト能ハス、要スルニ政治ノ間必要ノ出納ハ管内各々會議ヲ設ケ、毎歳典則ヲ以テ其員数ヲ制スヘシ、

第八十三章

手数料訟庭裁判ノ手数料、符証調印ノ手数料、及外國八行符証災整ノ手数料等百般ナリ典則ノ定則ニ從ツテ各局ヨリ之ヲ收納スヘシ、

第八十四章

國債及政府請合等ノ事件ハ毎回典則ヲ以テ処置アルヘシ、

第八十五章

新ニ世祿ヲ給スルコト固ヨリ廢止タルヘク、且ツ誰カ非常ノ勤功アツテ特ニ賞貨ヲ与ヘサルコトヲ得サルトキハ、亦典則ヲ製シテ処置スヘシ、

○第五 官員ノ定制

第八十六章

司法士ニ属セサル官員ノ黜陟及妻子見継料等ハ、別ニ典則ヲ以テ其制ヲ定ムヘシ、要スルニ行政ノ官員ト雖トモ其処行及方嚮ヲ以テ政府ヲ害セサルトキハ、私情ヲ以テ妄リニ其官ヲ罷ラル、コト勿ルヘシ、

第八十七章

政典布告ノ以前ヨリ已ニ官員ニ列スル者ハ、官員典則中別ニ箇条ヲ置キ、其ノ功ヲ論賞スヘシ、

第八十八章

諸官員ニシテ議士ニ撰択セラル、者ハ、期限中本官ニ現勤セスト雖トモ司法士ハ本官ニ現勤俸禄ハ従前ノ如クナルヘシ、スルコトヲ得ヘシ、

○第六 一般ノ定制

第八十九章

凡常百般ノ事故一旦ニ迫リ、議院会ニ開場セサルトキハ諸省一致ノ申稟ヲ以テ臨機ノ布告ヲ出シ、典則ノ威力ニ

代ヘ、以テ火急ヲ救フコトヲ得ヘシト雖トモ、他日議院開場スルトキハ、政府ヨリ事実ヲ証シテ議院ニ通シ、処置ヲ得サルニ出シ等ヲ疏条アルヘシ、

第九十章

典則及政府道県郡ヨリ出セル臨機ノ布告ハ、典則ノ式ニ従フテ披露アルヘシ、否ラサレハ決テ公通スヘカス、(ラ脱之)

第九十一章

従来布告セル沙汰書ハ、其意趣政典ノ意趣ニ反セサルトキハ、即典則トナツテ公通スヘシ、

第九十二章

従来奉職セル諸官員ハ、別ニ典則ヲ以テ其權利ヲ限制シ、及勤務ノ規範等ヲ制スル迄、尚ホ旧例ニ依ツテ勤務スヘシ、

第九十三章

議士及諸官員タル者ハ、奉職ノ日忠信実義勤務スヘキ誓詞ヲ 皇帝陛下ニ出スヘシ、

第九十四章

戦争ノ時限ニ方テハ第八・第九・第十二・第十三・第廿四・第廿五・第廿九・第三十章ノ定制ヲ全ク、或ハ其一部兵部典則ノ威權ヲ以テ暫時公通セシメサルヘシ、

○第七 政典変革ノ定則

第九十五章

政典中百般ノ定制ハ、近勢当時ニ適宜セサルコトアルヘシ、然ルトキハ政府及議院ヨリ其条目原由ヲ挙テ公議ニ決シ、兩院一和セルヲ以テ其變革ヲナスヘシ、

冊子原寸 縦二七種 横一八・五種 三〇枚

二三三 清国ヨリ英国公使「パークス」ヘノ間接通牒

牒

台湾ハ清国ノ領土タル事

清国長官ヨリ「ウェード」氏ヘ返書ノ抜萃

客歳日本公使副島(種也)氏北京ニ在リシ時、台湾出兵ノ事、且其土人ノ罪ヲ問シカ為メ、同島ノ東辺ニ兵隊ヲ上陸セシムル等ノ事ハ、決テ我カ外務ノ官員ニ協議セシ事ナク、

又同氏ヨリ日本ニテ其軍勢ヲ催スノ緣故、如何ヲ報スル書面ヲモ請取りシ事ナシ、然ルニ右野蕃ノ如キ、清国ノ領内ニ住スル土人ハ總テ我国ノ管轄ニ属ス、

我国ニテ敢テ其土蕃ノ奇異ナル風習ニ関スルコトナク、又強テ彼等ヲ我国法ニ服從セシムルコト無シト雖モ、而モ其土人ノ占有スル土地ハ總テ我中国ノ一部タリ、前条ノ次第八閣下モ知ラル、如ク、敢テ疑フヘキ事ニ非ス、故ニ閣下「サーハルリーパークス」氏ニ於テ、我意見ノ趣了解被致候様、御回答御申進有之度存候、

文書原寸 縦二五種 横三四種

二三三 琉球処分ニ就キテノ鄙見 筆者不明

鄙言

夫レ琉球ノ事タルヤ、政府藩内人民ノ情実ヲ不知ニアラス、又藩民政府ノ御趣意ニ不通ルニアラス、其両間ニ有テ今日ノ情実ヲ察スルニ、政府ハ宇内ノ形勢ヲ洞察シ、琉球日本ニ從侍スルノ名義ヲ正シクセントシテ、旧来支

那トノ続キヲ置テ、征台以来差出シタル金ヲ琉球難民ノ為ニ償ヒタル者ト見做シ、數百年來ノ交際ヲ断絶スヘシトノ御趣意、琉人ハ初征台ノ拳ヤ、専ラ琉球難民ノ為ニ起リタル者トモ汲受ス、又差出シタル金モ支那談判ノ次第ヲ以テ見トキハ、判然琉球難民ノ為ニ差出シタル確証ナシ、故ニ御達シノ通、御受難仕トノ苦情モ全く所謂レナシトハ思ハレス、殊ニ当藩ノ人民其頑固ナル事日本二十年前ノ人民ト同日ノ論ニアラス、然ルヲ政府今日ノ所置ニ及フヤ、是ヲタトユルニ、小兒ノ手足ニ切斷シテ不治レハ愈ヘカラサルノ病有テ、医ニ託スレハ是ヲ治スルノ医ナク、又其兒ニ説ケハ目前ノ苦痛ヲ恐レテ、更ニソノ死ヲ思ハス、束縛シテ其治ヲ施セハ氣絶シテ忽チ死スルカ如シ、然レトモ政府其施ス処仁意ニ出レハ、死トモ不顧ルノ斷アラハ勿論ナレトモ、未來ヲ慮リ、今日斷然ノ策ヲ施シ、若シソノ人ヲシテ過マタシムルニ至ラハ、俗ニ所謂角ヲ直サントシテ牛ヲ殺スノ類ニテ、公法上ニ於テモ美談ト而已ハ思ハレス、尤旧來日支球ノ交際上、

何レモソノ当ヲ得タル者ニアラス、然ルニ一言支那ニ談判ヲ解ケス、急ニ琉球ヲシテ全く我ノ附屬トナルヘキヲ幾度理解ストモ、弁舌ヲ以テ服セシムル見留、更ニコレナク、又支那ニ於テモ其儘黙止スヘキノ理ナケレハ、兎角一度不談シテ不叶ハ必定ナレハ、此節琉球ヨリ支那エ直ニ談判スヘキヲ上申セシニヨリ、其意ニマカセ、ソノ条目ヲ注意シテ、談判ニ御取掛リノ方面全ノ策ト愚考仕候事、

文書原寸 縦一五釐 横一四八釐

三言 元老院權少書記官中江篤介ノ建白

救患七策

〔表紙〕
「救患七策」

救患七策

臣聞ク、患ヲ救フ者ハ先其因ル所ヲ明カニスト、因ル所未明カナラズシテ、強テ之ヲ救ハ、徒ニ因循揣摩歲月

ヲ曠シ、必ズ竟ニ手ヲ拱シテ敗ヲ待ツニ至ル、今者天下ノ患タル大ナリ、而テ其美ニ二過キス、曰、風俗ノ媮薄ナリ、曰ク、金貨ノ竭乏ナリ、而テ人未其因ル所ヲ明カニセス、是ヲ以テ、政令石転帰着スル所無ク、上下汎々然、葉舟ヲ大海ニ撐出スルカ、若シ歎スルニ堪ユ可ケン哉、臣請フ、試ニ其因ル所ヲ論シテ而テ之ヲ救フノ策ニ及バン、霸府ノ衰フルニ当テヤ諸藩狷介矯激ノ士七道ニ散布シ、潛行匿居備サニ艱辛ヲ嘗メ、死ニ瀕スル者屢々ニシテ、遂ニ維新ノ業ヲ成シ、各々顯位重職ニ登ル、是ニ於テ乎、昔日扼腕揚眉ノ氣一変シテ、酣嬉啓態ノ心ト作り、相ヒ率テ遨蕩淫惰ニ赴キ、尋テ藩政束縛ノ制ヲ解クニ及ンデ、四方ノ士一時二都下ニ群至シ、親知引援シ、争フテ美官ヲ攫シ、競フテ声色ニ蕩シ、以テ姚佚ノ習ヲ成ス、是レ天下媮薄ノ患ヲ致ス所ノ因一ナリ、藩士事ヲ執ルニ及ンデ学識相敵シ智力相侔フシテ、能ク之ヲ統督スル者莫シ、是ヲ以テ各々其職ニ抛リ、其識力ヲ弄シ、以テ一時ノ快ヲ取ルニ過キスシテ、肯テ遠久ノ責ニ任セ

ス、下上ニ倣ヒ屬長ヲ学ブハ自然ノ勢ナリ、以テ苟安ノ習ヲ成ス、是レ天下媮薄ノ患ヲ致ス所ノ因二ナリ、横文大二世ニ行ハル、以来、訳書朝野ニ充付シテ、人ノ披読スル所割厘折緇ノ技書ニ非サレハ、談權説利ノ策書ニシテ幾ンド道義ノ事ヲ言フ者靡ク、以テ輕馳ノ習ヲ成ス、是レ天下媮薄ノ患ヲ致ス所ノ因三ナリ、洋人我邦ニ至ル以来洋貨ノ舶齋漸次ニ增多シ、今日ニ至テハ日用ノ具ヨリ技科ノ器ニ至リ、輕便ノ品ヨリ華飾ノ什ニ至ルマテ、上下一ニ彼レヲ仰キデ用ヲ取り、以テ乱買ノ弊ヲ来タス、是レ天下竭乏ノ患ヲ致ス所ノ因一ナリ、我邦輸出スル所ノ物ハ繭糸樟茶ニ過キス、此皆天生ノ物ニシテ人ノ能ク増ス所ニ非ラズ、若シ之ヲ増サント欲セバ、必ズ他物ヲ減セサルヲ得スシテ、究竟天下ノ数ニ増スコト無シ、且開港ノ初ニ当テハ、我レ彼レニ取ルコト尠フシテ、我物貨又彼レノ心目ニ新ナルヲ以テ、彼レ特ニ我レニ取りテ以テ利ト為セシモ、今日ニ至テハ我物貨漸ク腐陳ニ屬シテ顧ミサルニ至リ、以テ減出ノ弊ヲ来タス、是レ天下竭

乏ノ患ヲ致ス所ノ因ニナリ、維新以後諸省ヲ開キ府県ヲ起シ、主長ニ附スルニ幾ンド独制ノ権ヲ以テセシヨリ、饑寒ノ士資縁シテ進ミ、請嘯シテ入り、此処ニ黜ケラルレハ彼処ニ趨リ、竟ニ諸庁ニ填咽ス、事疏ニ人繁ニシテ徒ニ紛擾曼衍ノ害ヲ生ズ、而テ此輩固ヨリ方正ノ士ニ非ラズ、乃チ其獲ル所ハ拳ケテ之ヲ婦女醜肉ノ間ニ棄テ、以テ徒費ノ弊ヲ来タス、是レ天下竭之ノ患ヲ致ス所ノ因ニナリ、吁嗟、人薄ニ財乏フシテ而テ衰滅セサル者ハ未之レ有ラズ、斯ニ患有テ而テ其因ル所ヲ明カニセス、猶且樸樸ノ智ヲ挾サミ、苟簡ノ計ヲ恃ミ、以テ之ヲ救ハント欲ス、亦已惑ヘリ、然リト雖モ我邦今日ノ形勢ノ若キハ世末之ヲ見ズ、若シ旧俗ヲ守リ古風ニ安セント欲セハ則チ已ム、苟モ作興スル所有ラント欲セバ、二患ノ因ル所悉ク除ク可ラスシテ、而テ患ハ全ク救ハサル可ラズ、吁嗟鳴噫、天下復此レヨリ難キコト有ラン哉、昔者漢七國ノ難之ヲ削弱スルニ過キス、而テ賈誼ノ才ヲ以テ猶尚之レカ為メニ流涕長大息セリ、今臣ノ不肖ヲ以テ斯ニ患

ヲ救フテ、而テ且作興スル所有ラント欲ス、亦自ラ揣ラサルノ甚シ、然リト雖モ臣少小ヨリ經史ニ涉リ、又洋学ヲ攻ムルコト茲二十年、向キニハ歐地ニ留學シテ親ク彼邦開化ノ状ヲ觀察ス、事尽ク達セスト雖トモ理ハ則チ之ヲ知ル、自ラ意フニ其言或ハ少ク取ル可キ有ラン、且臣モ亦三千六百万中ノ一人ナリ、烏ンゾ空ク茫洋ノ歎ヲ助ケテ国家ノ覆没ヲ坐視スルニ忍ヒン、故ニ謹ンデ七策ヲ献ズ、庶幾ハク八万一ニ裨益シ、且国人ノ責ヲ塞カンコトヲ、

第一策

臣天下ノ大事ヲ論スルニ当リ首ニ中韓ノ事ヲ言フ、理ニ達セサル者或ハ臣ヲ以テ迂屈ト為サン、然レトモ鄒孟曰ハズヤ、國ノ本ハ家ニ在リ、家ノ本ハ身ニ在リ、是故ニ士氣ノ殄衰スル、國風ノ澆漓ナル、多クハ惟閩ノ整肅ナラサルニ因ル、綠衣黃裳ハ詩人之ヲ歎シ、牝鷄ノ告晨ハ大易之ヲ戒ム、寔ニ以ヘ有ルナリ、然リ而テ今姚佚ノ習ヲ去ラント欲シテ、人々自修戒飾セ令ムルハ、固ヨリ論

ヲ待タズト雖トモ、要實際ノ制ヲ設ケテ天下ノ視聽ヲ

警疎スルニ在リ、夫レ妻妾同室ノ天理ニ悖リ、人情ニ背クハ喋々ノ弁ヲ要セス、曠夫ノ害焉レヨリ出デ、怨女ノ禍焉レヨリ生ズ、故ニ方今文明ト称スル国一モ之ヲ禁セサル莫シ、乃チ我レ亦宜ク之ニ仿ヒ、速ニ天下ニ令シ、以テ斯汚習ヲ廢ス可シ、則チ人々惕然自戒シ、恍然自飭シ、以テ自修スルニ至ラン、則チ浩勃ノ氣、清淑ノ風、霽然朝野ニ蒙リ、所謂文明開化ノ道、亦是レ自リ數層ヲ進ム可シ、急要ト謂ハサル可ケン哉、議者或ハ曰ク、妾ヲ蓄フハ家嗣ヲ固フシテ國脈ヲ培スル所以ナリ、此レ何ゾ言ノ妄ナル、天ノ人ヲ生スル、陰陽皆常數有リ、我レ吾嗣ヲ固フシテ人或ハ其嗣ヲ絶ツトキハ、何ゾ國脈ニ補有ラン、而テ怨曠ノ害ヲ來タス、臣未何ノ得ル所有ルヲ知ラズ、鯁鯁ノ議顧ミスシテ可ナリ、若シ夫レ警巡以テ密戲ヲ擿シ、干掖以テ巷淫ヲ発スルハ、有司ノ事尤モ当サニ意ヲ用ユ可シ、又娼院ノ事ハ臣別ニ論有リ、今敢テ言ハズ、

第二策

苟安ノ習ヲ去ルハ才識超絶シテ、且守ル所有ル者ヲ得テ、其レヲシテ統督責迫セ令ムルニ如クハ無シ、然リト雖トモ此レ驟ニ得可ラサレハ、則チ臣一策有リ、登升ヲ正フシテ而テ轉移ヲ難フス、是レナリ、今マ人ノ等級ヲ升ボス、專ラ年月ニ由テ才能ニ由ラズ、年月ニ由ル故ニ頑鈍無恥ノ者常ニ恃ム所有リ、才能ニ由ラズ、故ニ偶儻耐弛ノ士、或ハ忍耐ノ心ヲ喪フ、今マ人ノ職任ヲ転スルコト奕棋ノ若ク然リ、故ニ遠久ノ策ヲ行ハント欲スル者ハ、能ク其能ヲ施ス所無フシテ、而テ縁知多キ者ハ一職ニ居ルコト半歳、甚キハ二三月ニシテ其好新ノ心発スレバ、輒チ速ニ其扱ム所ニ之クヲ得可シ、臣故ニ曰ク、登升ヲ正フシテ而テ轉移ヲ難フス宜シ、議者曰ク、始テ官途ニ就ク者ハ一職ニ任シテ、而後漸ク自ら他長有ルヲ知ル有リ、然ルガ若キモ、之ヲ轉移セスシテ、必ズ遂ニ其短ヲ見ハサ令メン乎、臣窃ニ謂フ、此レ變通スルコトヲ知ラサル者ト、且古人言ヘル有リ、学テ而テ政ヲ為スヲ聞ク、

未タ政ヲ以テ学フコトヲ聞カズ、故ニ官途ニ就カント欲スル者ハ、必ズ先書ヲ読ミ、事ヲ察シ、以テ己レガ志ス所ヲ定メ、以テ己レガ長スル所ヲ度ル可シ、是レヲ之レ学ト謂フ、然ラズンハ豈政府ヲ以テ党庠遂序ニ比スル有ラン哉、議者又曰、転移ヲ難フスルトキハ、竟ニ以テ禄仕ノ途ヲ絶ツニ至ラン、乃チ太刻ナル無ランヤ、臣以ヘラク、禄仕ハ唯才愚ト巧拙ト二関セサル職、即チ所謂擊柝ノ若キ者ニシテ後可ナリ、苟モ才ト巧トヲ要スルトキハ、烏ンゾ禄仕ト云フテ其短トスル所ノ職ニ就クノ理有ラン、夫レ登升ヲ正フシテ、以テ頑鈍ヲ戒メ、以テ僥ヲ励マシ、転移ヲ難フシテ、以テ遠久ノ策ヲ成サ令メ、以テ好新ノ欲ヲ制セバ、人々警戒勤勉、漸ク以テ苟安ノ習ヲ去ラン、臣又他策ニ於テ官吏ノ数ヲ減殺スルコトヲ論ス、請フ、諸レヲ茲篇ニ照セヨ、

第三策

父子相愛シ、兄弟相親ムハ英仏我レニ賢ル乎、賢ルコト無シ、上下尊卑礼有ルハ英仏我レニ賢ル乎、賢ルコト無

シ、彼レノ我レニ賢ル所ノ者ハ、只技術ト理論ト有ル而已、技術トハ何ゾ、窮理分析ノ類是レナリ、理論トハ何ゾ、法律經濟ノ類是レナリ、然レバ則チ我レ彼レニ均カラント欲セバ、只当ニ務テ技術ヲ布キ理論ヲ宣ブ可キ耳、是レ乃チ今日洋師ヲ延キ、洋書ヲ学ハ令ムル所以ナリ、洋儒ニ課シ洋籍ヲ訳セ令ムル所以ナリ、然リ而テ道義ノ心ハ居常之ヲ淬礪スルニ非ラザルヨリハ、浸ク靡滅スルニ至ル、且究理分拆ウツリノ術タル厘ヲ剖シ錙ヲ拆シ、法律經濟ノ学タル權ヲ談シ、利ヲ説クヲ以テ、其弊ヤ、或ハ高妙ヲ喜ンデ而テ近功ヲ厭フニ至ル、是ヲ以テ欧亞諸州ニ在テハ教法ヲ盛ニシ道学ヲ広メ、以テ輕馳ノ習ヲ防ク、今我邦ノ若キハ然ラズ、洋書大ニ世ニ行ハル、以來、経伝ノ学日ニ消シ月ニ滅シ、今日ニ至テハ則チ幾ンド仁義孝信ヲ以テ迂屈ト為ス、吁嗟、何ゾ思ハザルノ甚キ、西土ノ道学ハ希臘失蘇ソクラテス曷アリストテレス刺篤アキナ・必羅頓ブラトンニ原本ス、而テ二賢ノ道ヲ論スル、仁義忠信ヲ外ニセズ、臣欧地ニ在テ其書ヲ読ミ、誠ニ斯道ノ古今遠邇確乎トシテ易フ可ラサルヲ

知ル、夫レ道義ノ心ノ消滅スル、是ヲ以テ官職ニ掬テ私利ヲ營ム者有リ、旧故ニ頼テ國罰ヲ逭ル、者有リ、其他紛々実ニ言フニ堪ヘズ、而テ斯心ノ消滅スルハ輕馳ノ習漸ク人心ヲ蕩スルニ因ル、夫レ天下ノ事、或ハ功ヲ現下ニ収メ、或ハ効ヲ將來二期ス、一ヲ以テニヲ廢セズ、故ニ輕馳ノ習ヲ今日ニ去ラント欲セバ、宜ク純明方正且謙見有ル者ヲ摘拔シ、其レヲシテ天下ノ耳目ヲ一變シ、本末急緩ヲ弁シテ向フ所ヲ知ラ令ム可シ、則チ庶幾クハ竊窺智ヲ弄スル者蕩然跡ヲ滅スルニ至ラン、輕馳ノ習ヲ後來ニ去ラント欲セハ、宜ク公私學覺ニ課シ、技書理論ノ外、更ニ彼邦ノ道學ヲ鑽研シ、又兼テ漢土ノ經傳ヲ講習セ令ム可シ、則チ庶幾クハ技芸ニ淫シ理談ニ溺スル者高ニ就クモ近ヲ棄ツ可ラサルヲ知り、漢籍ニ拘牽セラル、者空道ヲ守テ、而テ実益ヲ遺ス可ラサルヲ知ルニ至ラン、誠ニ是ノ若クナレバ、英ヲ凌キ仏ニ駕シ、宇宙第一ノ善國ト成ルコト、日ヲ計ヘテ待ツ可シ、

第四策

爰ニ呆人有リ、其隣人ノ錦繡ヲ衣キ、梁肉ニ飽キ、高樓ニ住ミ、出ルニ彫車ニ乘リ居ルニ絵牀ニ踞スルヲ見テ、其之ヲ致ス所以ノ道ヲ問ハスシテ、而テ俄ニ之ヲ學バ、必ス竟ニ困敝ノ憂ニ陥ラン、夫レ英仏ノ富盛ナル、其由テ來ル所甚遠シ、希臘・羅甸ノ遺址ニ出ル者ハ姑ク焉レヲ舍ク、英ニ噶李^{エリザベツ}撤別有リ、仏ニ顛理^{ベンリ}有リ、皆希世ノ英主ニシテ大ニ意ヲ治教ニ用ヒ、爾來學術漸ク闡ケ智巧浸ク進ミ、銘儒高士統々トシテ出テ、鞫窮淬礪各々其長ヲ鳴シ、遂ニ以テ宇内ヲ雄視シ、今日ニ至テハ其輸出スル所、輸入スル所ニ比シテ猶余贏有ルヲ致ス、即チ余贏有ラサルモ、焉レニ資テ以テ國益ヲ補フニ足ル、我邦ノ若キハ則チ然ラズ、孔孟ノ教ハ身ヲ修ムルニ優ニシテ物理ヲ發明スルニ足ラズ、其他製器ノ類皆草創緩慢、僅ニ國民ノ日需ニ供スルニ過キス、而テ遽ニ英仏ト對抗通市セント欲ス、是レ亦呆人ノ為ナラズヤ、困敝ノ憂國ヨリ其所ナリ、臣以意ヘラク、宜ク今ニ及ンデ而テ洋貨ノ中ニ就キ、其二三或ハ四五ニ賦スルニ高額ノ関稅ヲ以テシテ、

以テ乱買ノ弊ヲ除ス可シ、彼レ万一誓盟ノ名ニ拠リ、約
 条ノ項ヲ執リ、固争聴カズンハ、臣ハ則チ一策有リ、今
 敢テ言ハズ、謀ハ密ヲ尚ブ、文武皆然リ、若シ下問ヲ辱
 フセバ、臣請フ、明ニ之ヲ述ベン、議者曰ク、洋貨ヲ買
 フテ而テ其価我貨ヨリ賤シキトキハ、益有テ而テ害無キ
 ニ似タリ、今洋綿ノ価和綿ニ比スレハ賤シ、然リ而テ綿
 ヲ用ユルノ家多フシテ綿ヲ織ルノ家少ケレバ、究竟得ル
 所失フ所ヲ贖フナラズヤ、臣以為ラク、是レ数ヲ知ラサ
 ル者ト設シ我邦智巧既ニ少ク、盛ンニ工社既ニ少ク行ハ
 レ令メバ、洋綿ノ至ルニ及ンデ、綿ヲ織ルノ家或ハ去テ
 他ノ業ニ就クトキハ其効功ト、夫ノ洋綿ヲ用ユルノ家余
 ス所ノ金ト、卒ニ以テ我輸出ノ数ヲ増スヲ得可シ、今ヤ
 然ラズ、一工他業ニ就クモ至竟少ク、国民ノ便ヲ益スニ
 過キスシテ、我金幣ハ則チ常ニ彼レノ攫去スル所ト為ル
 是レハ乃チ彼レノ怒濤ヲ凌キ、猛瀾ヲ冒カシテ匪細矢地
 方ニ来ルヲ樂ム所以ナリ、向キニハ英ノ清国ヲ撃ツヤ、
 仏人大ニ之ヲ助ケリ、夫レ仏人鴉煙ヲ鬻カズシテ、而テ

猶英ト共ニ赴攻スルヲ見レバ、彼レノ憂樂スル所明ニ知
 ル可シ、臣彼レヲシテ憂ヘ令ムルノ策有テ、而テ彼レヲ
 シテ怒ラ令ムルニ至ラズ、冀ハクハ國家ノ為メニ一タヒ
 之ヲ言ハン、

第五策

輸出ノ数ヲ増サント欲セハ、只当ニ貨物ノ数ヲ増ス可シ、
 而テ貨物ノ数ヲ増スノ道ニ有リ、曰ク、国貨ノ製ヲ講ス
 ルナリ、曰ク、洋貨ノ製ヲ学フナリ、夫レ繭糸ノ類ハ我
 邦多ク産スル所ニシテ、而テ繰織ノ道未甚開ケス、故ヲ
 以テ絹屬ノ製當ニ精緻ナラサル而已ナラズ、亦多ク日時
 ヲ費ヤス、臣向キニ仏国里昂府リヨンニ在テ工場ヲ巡視セシニ、
 其業守ノ順序、器械ノ精便、実ニ宇内ノ偉觀ト謂フ可シ、
 臣意フニ、宜ク速ニ我絹工ノ中、巧鍊ニシテ且丁壮ナル
 者ヲ遣ハシ、之レニ附スルニ一人ノ仏語及ビ其土情ヲ諳
 知スル者ヲ以テシテ、親ク其製ヲ学ハ令メ、又彼国ノ工
 人ヲ召募シ、西京奥羽ノ地ニ於テ二三工場ヲ起シ、以テ
 広ク我国人ヲシテ其秘訣ヲ領受セ令ム可シ、是レ乃チ貨

物ヲ今日ニ益スノ道ナリ、夫レ羅氈・呉縞ノ類ヨリ日用雜貨ノ中、我邦未曾テ製セサル者ハ一日ニシテ之ヲ學ヒ得可ラズ、臣意フニ、宜ク亦英仏ノ工人ヲ召致シ、我工場ニ於テ之ヲ製シ、漸ク以テ國人ニ領知セ令ム可シ、又毛皮ノ若キハ其獸ヲ蕃殖スルノ後ニ非レバ、俄ニ得可キニ非ラス、而テ我邦原野衍沃、洋人ノ稱揚スル所ナリ、宜ク今ニ及ンテ大ニ牛羊ヲ殖養ス可シ、異日彼レヲシテ我不動産ヲ買得ルノ權ヲ得セ令メハ、噫臍ノ悔奈何トモスルコト無ラン、是レ乃チ貨物ヲ將來ニ増スノ道ナリ、人或ハ曰ク、今俄ニ工場ヲ起シ洋工ヲ召サハ、何ヲ以テ其費ニ給セン、臣謂フニ此レ難カラズ、臣昔歲歐地ニ在テ其工人ノ情況ヲ察スルニ、恒ニ財主ト相軋シ嘯聚援引、之レニ抗シ以テ備償ヲ増サント欲スルコト屢々ナリ、且彼邦今代ノ史ヲ見ルニ、財産ヲ均フシ所有ヲ廢スルノ論ヲ主張スル者、常ニ工人ヲ憇憑シ頼テ以テ力ト為ス、亦工人ノ窮乏ヲ証ス可シ、今我レ機ニ投シ時ヲ伺ヒ、優招疑說セバ、何ソ必ス重償ヲ以テ之ヲ公召スルヲ要セン、

且臣以為ラク、鉄道ヲ起シ石樓ヲ架スルハ、其功唯頑陋ノ耳目ヲ驚カスニ過キスシテ、費ス所実ニ夥シ、其他目今諸般ノ徒費少カラズト為サズ、乃チ此レヲ廢シテ彼レニ移サバ、何ゾ遽ニ給セサルヲ恐ル、コトヲ是レ為サン、亦唯斷シテ之ヲ行フニ在ル而已、

第六策

經濟家徒費ヲ戒ムコト尤深シ、夫レ徒費ノ害タル、実ニ大ナリ、何トナレバ、我レ梁肉ニ飽キ輕煖ヲ襲ネテ、而テ功效ノ以テ之ヲ贖フ、有ラサルトキハ我費ヤス所ノ金ハ常ニ天下ニ存スト雖モ、其食衣ハ卒ニ糜滅スルヲ以テ幾ント之ヲ水火ニ投スルニ異ナラス、且夫レ彼衣食ナル者ハ幾人ノ手ニ成ルゾヤ、一炙肉一襲衣ニシテ仔細ニ之ヲ考フルトキハ、國中ノ力ヲ經テ始テ成ル、然リ而テ我レ今マ之ヲ買フテ我が与フル所ノ金ハ、我レ寸功無フシテ之ヲ取レリ、是レ之レヲ國盜ト謂フ、柳宗元所謂其直ヲ受ケテ其事ヲ怠ル者、乃チ是レナリ、吁嗟、國盜ノ多キ國何ヲ以テ困乏セサラン、然リト雖トモ國盜ノ類ニ有

リ、曰ク、沿襲ノ盗ナリ、曰ク、僥倖ノ盗ナリ、沿襲ノ盗ハ累世ノ政弊ヨリ成ル者ニシテ、其責全ク政府ニ在リ、之ヲ廢スルニ至テハ臣別ニ論有リ、今マ之ヲ舍ク、僥倖ノ盗ハ夤縁請囑ノ猜計ニ成ル者ニシテ、要政府ヲ責メサル可ラスト雖トモ、抑々彼レノ心術誠ニ惡ム可キ者有リ、請フ、速ニ之ヲ去ラン、維新以來政府月々登用スル所數十人ニ下ラスシテ、未全ク黜クル所有ルヲ聞カズ、今日國務洵ニ繁劇、固ヨリ昔日ノ比ニ非ラスト雖モ、能ク督責守任ノ道ヲ嚴ニシ勤惰賞懲ノ術ヲ明カニセバ、何ゾ遽ニ斯ノ如キノ大数ヲ要セント、臣故ニ曰ク、宜ク速ニ其数ヲ減殺シ以テ徒費ノ害ノ一半ヲ除ス可シ、若シ夫レ人員ハ、請フ、実地ヲ檢シテ後之ヲ定メン、議者曰ク、方今官人古昔ノ家祿有ルガ若クナラズ、今卒然之ヲ黜ケバ、必ズ遂ニ饑餓ニ至ラン、臣以為ラク、此レ人ノ情性ヲ解セサル者ト、夫レ人ノ死ヲ惡ミ生ヲ欲スル天理ニ本ツク、今其俸ヲ絶タバ、未耜車馬豈口ヲ糊スルニ足ラサランヤ、且彼レノ無術不能ナル人ニ力役スルハ、固ヨリ其所ナリ、

烏ゾ無能ニシテ之ヲ養フニ国民ノ膏血ヲ以テスル有ラン哉、議者又曰ク、彼レ今優游衣食ス、而テ俄ニ之ヲ力役ノ勞ニ陥ルレバ、必ズ將ニ我レヲ反噬セントス、臣以為ラク、此レ時ヲ知ラサル者ト、夫レ我邦士氣ノ萎衰今日ヨリ甚キハ無シ、伏水奧羽ノ乱十戰ニ過キスシテ治シ、肥前ノ變一モ之レニ応スル者莫シ、此レ豈悉ク人士名義ヲ重ンスルノ故ナランヤ、亦唯戰ヲ畏ル、ナリ、曷ソ我ヲ反噬スルコト之レ有ラン、且綱紀ヲ肅張シテ更革スル所有ラント欲セバ、何ゾ一二動擾ヲ恤フルニ遑有ラン、臣亦復曰フ、断シテ之ヲ行フニ在ル而已、

第七策

仏蘭西ノ碩儒孟得士瓜^{モンテスキエ}曰ク、國ノ草創ニ在テハ英傑制度ヲ造リ、既ニ開クルニ及ンデハ制度英傑ヲ造クルト善キ哉言ヤ、我邦教化ノ行ハル、已ニ久シク、車夫阜隸ト雖トモ皆礼節ヲ知ル、洵ニ草創ヲ以テ之ヲ目シ難キニ似タリト雖モ、而レトモ源平以還武人権ヲ弄シ、漸ク霸政封建ノ制ニ赴キ、專濫束縛至ラサル所無シ、今朝ニ至ル

ニ及ンテ、始テ数百世ノ汚習ヲ滌蕩シテ、而テ一定ノ憲制猶未立タサレハ、則チ之ヲ草創ト謂ハサル可ラズ、然リ而テ一定ノ憲制ヲ立テント欲セハ、一人ノ理勢ニ達シテ、且守ル所有ル者ヲ得ルニ非サレバ能ハズ、何トナレバ、理勢ニ達スル者ニシテ、而後能ク本源ニ溯リ、支流ヲ挹ミ變通スルヲ知テ、而テ因循模擬ノ病無シ、守ル所有ル者ニシテ、而後能ク決行シテ惑ハス、確執シテ移ラズ、乃チ能ク、遂ニ一定ノ憲制ヲ立テン、其レ然ル後臣カ言フ所ノ六策、乃チ以テ實施スルヲ得可シ、鄙語ニ曰ク、器ヲ製セント欲スル者ハ必ス先刀鋸ヲ具フ、天下ハ器ナリ、憲制ハ刀鋸ナリ、刀鋸ノ具ハラサル方円ノ正ヲ得ル能ハス、憲制ノ立タ^(サク)ル治安ノ策ヲ行フ能ハズ、故ニ臣カ所謂第七策トハ、憲制ヲ立ル是レナリ、且夫レ絳灌有テ而テ長沙ノ計聽カレズ、秦檜有テ而テ忠定ノ謀施ス所無シ、今幸ニ我朝絳灌ノ鄙陋、秦檜ノ黠奸無シト雖モ人心ノ同ラサル、縱令一旦才識超絶スル者ヲ得ルモ、宏度ノ任、堅確ノ信、重威ノ助、之ヲ翼蔽シテ其智ヲ竭

スヲ得セ令メズンハ、必ズ中道ニシテ退敗スルニ至ラン、然レハ則チ今日ノ事、唯才識其人ヲ得テ、其レヲシテ左右紛々ノ議ヲ恤ヘズ、以テ能ク一定ノ制度ヲ造ラ令ムルニ在ル而已、

元老院権少書記官臣中江篤介昧死献言

冊子原寸 縦二四・五糎 横一六・八糎 一九枚

三三 齋藤簡ヨリ左府公ヘノ呈書

詩十五首

奉

左相公詩并引

明治某年

聖主西巡之日

閣下献言於行在、臣簡窃拜閱其文、其首演

聖主宜就学之旨、次弁不變更方今政体、則終為外夷之属

国之意、其言雄偉痛快、不唯胡詮封事、再三誦之、憂

国之情、忠告之切、忘万死犯至

尊、其誠心義烈、凜然溢於言衷、真不堪感佩之至也、簡

先是二年、建言于集議院、諄々乎述設師伝立學則、教導

聖主於賢明之法、其說細大疎蜜不厭繁、而至其大綱則、

与

閣下吻合、因不自揣妄奉其稿於 膝下、為采菲之資、

爾來瞻望渴慕、屈指遲

閣下之東上、宛如一日三秋、無幾

閣下駕臨、而奸徒妬忌百端、其說不行、遺憾特甚、忽

聞

閣下昇台鼎、其悅何限、天下有志之士、亦欣欣然語曰、

回復方今弊政者、捨

公其誰也、簡遂固陋、屢上言、拳賢良供

閣下之股肱腹心、如張子·房·杜如晦之於其主、又言

薰陶

聖主賢德之法、与選拔賢俊之道、而一不報之、亦不諧之、

後再三請謁、亦不許之、獻芹無路、百思殆灰、雖然當

今之世、除

閣下之外、皆國蠹不足賴、而世態日頹、天下滔滔乎、

屈膝於夷狄、正如

閣下獻言、則不責

閣下、而責誰之為、私謂今天下疲弊雖極矣、猶有一線

生路存焉、何謂一線、神州土氣是也、苟得賢俊之士用

之、廓正外患、鎮撫海內、則神州之氣可蘇矣、

皇統可延矣、尚書曰、在干得人、中庸曰、其人存則其政

舉、其人亡其政熄、如虞舜捨己從人、大禹之拜昌言、

周公之為吐握、及晉陶侃、引接疏遠、門無停客、皆求

賢之急如此、今

閣下當其任、而建言不報、謁見不許、与所謂顏色拒人

于千里之外者何異乎、如簡愚蠢固雖憂死於山林可也、

若有豪傑維持國家之士、而徒為齊門之瑟、則恐拳天下

一線之生路、遂滅絕歸于披髮左衽之域、使

閣下前之獻言屬於徒為、窃為

閣下不取也、簡區々之心、不堪憂悶、茲裁蕪詩十余首、

以奉

閣下、夫一弘衣蜂、父亦疑、三唱市虎、參母驚之、簡

雖狂警不見容之言、

閣下抱衣蜂市虎之疑、庶幾一顧之、簡其甘瞑乎、万一

有取、天下之幸福何物如之、敢冒威尊、罪当万死、

其一

久聰回天忠憤名 一朝何事晦還明

恐因帷幕股肱乏 麟閣勲功竟匹成

其二

滿朝士氣悉洋塵 未見神州社稷臣

天下俟

君方有日 蘇采唯望一天人

其三

左公建白本高論 何事廟堂屈不伸

況是如今變理乎 一賢不拳奈維新

其四

洋風滿地驅塵飛 悉使神州滅旧威

民怨債奈奚得復 此事方識婦一人

其五

聖主無教何得知 史無左右伝兼師

是非

帝罪存相輔 直筆千年孰貶之

其六

応皇采勅延鴻儒 聖道文章四海敷

仁德葛城為後統 礼儀学校永範模

其七

旧幕諸侯千万第 雄棲魏閣凌雲軒

已崩已折如網履 数里華京作広原

其八

広原不日築工成 渾是新材巨木楹

局々做来洋院閣 吏人絞尽国膏肪

其九

国膏斯尽債担彭 子息崇高量外洋

培穿自為躬殞没 狡黠誤投彼計量

其十

知若不知自真奸 真不知之実驚頑
彼此併觀斉国蠱 是男一箇除何艱

其十一

諸省大俸儻教師 政院弊風不可限
何事堂々神国体 断髡衫袴變洋夷

其十二

皇邦大典祖神存 況副

応皇聖道尊

万世依之冠万国 何損我貴下獐豚

其十三

皇国鋼刀万国無 断裁鍊鉄如蕪菁
可知天授神靈器 況有和魂輕死愉

其十四

和魂輕死傑俊夫 精力活機刀法殊
令此傑人揮此劍 万軍猛虎恰羊馭

其十五

願回復国弊巨疲 第一尚賢任用之

師伝教

君能使哲 其詳呈上建言辭

右

奉

斎藤簡九拝

島津左相公

閣下侍史

文書原寸 縦二一・三糎 横二一五・五糎

三美 左院発表ノ国憲総論

(表紙) 「国憲総論」

国憲総論

共和政治ノ国ハ其体制自ラ其民俗ニ適シ、其宜シキヲ得
タル者也、君臣同治、一君独裁等ト称スル国モ亦其体制
各其民俗時勢ニ適シ、其宜シキヲ得タル者也、是レ他ナ
シ、其帰スル所ノ者一ナレハ也、其帰スル所ノ者如何、

曰、民ヲ安ニスルニ在ル而已、徒ラニ他國ノ体制ヲ羨ミ漫リニ我固有ノ体制ヲ捨テ、他ノ体制ニ依拠セント欲セハ、唯紛紊ヲ生スル而已ナラス、政必ス多岐ニシテ民必ス猜ヒ國必ス乱レン、然レトモ若シ其枝葉ノ因襲ニ固着膠柱シテ、時勢ノ変ニ由リ其固有ノ体制ヲ活動拡充スルヲ知ラサレハ亦必ス民心離レ、政府互解ニ至ラン、夫レ宇宙ノ間國皆開國固有ノ体制アリ、皇國ハ神武天皇都ヲ橿原ニ定メシヨリ以降、億兆天孫ヲ奉戴シ、一姓聯綿以テ今日ニ至ル、豈偶然ナラン哉、蓋シ由ル所アリ、天祖統ヲ垂ル、ノ初メ、詔シテ曰、宝祚ノ隆、当サニ天壤ト極リ無ルヘシト、是レ則皇國ノ体制也、是ヲ以テ蘇我氏ノ強僭、源氏・足利氏等ノ禍乱アリト雖モ、此体制確乎トシテ揺カス、只其レ此体制揺カス、故ニ当朝一鼓シテ數百年廢衰ノ朝權ヲ復シ中興ノ建業ヲ立、実ニ掌ヲ回スカ如シ、其例古今東西未タ曾テ之有ラサラン、蓋シ中古ノ世、國土稍開ケ風俗民情太古ニ異ナル所アリ、於是乎、聖明ノ天子其時勢ノ変ニ由リ、漸ク唐制ヲ斟酌

シ、以テ中古ノ民俗ニ適セシム、乃嚮ニ所謂時勢ノ変ニ由リ、固有ノ体制ヲ活動拡充スル者ニシテ、我固有ノ体制ハ万古不變、此其唐末五季ノ乱ノ如キ禍ナキ所以也、今亦西洋諸國ノ善事ヲ援据シテ、我未タ備ラサル所ヲ補ヒ、以テ方今ノ時勢ニ由リ、固有ノ体制ヲ活動拡充シ、民俗ニ適セシム、固ヨリ古聖天皇ノ遺志ニシテ、則万国ノ通宜ナリ、然レトモ此拡充活動ノ時ニ當リ、客氣異ヲ好ムノ徒其方向ヲ誤リ、往々ハ其固有ノ体制ヲ合セテ變更セントシ、終ニ國家ヲ乱シ無辜ノ億兆ヲシテ土炭ニ陥ラシム、是レ亦天下ノ通患ニシテ、國家ヲ憂ルモノ最モ当サニ戒慎スヘキ所也、太古ノ世其固有ノ体制ヲ變更シテ國亡ヒ億兆流亡スル者アリ、希臘・羅馬是也、近代其固有ノ体制ヲ變更セントシテ、國乱レ万民屢々土炭ニ苦ム者アリ、仏蘭士・西班牙是也、其固有ノ体制ヲ維持シテ國治リ、万民業ニ安ニスル者アリ、瑞士・英吉利是也、故ニ今我カ天祖ノ定メシ固有ノ体制ニ就キ、事ニ因リ類ヲ彙メ鄭重ニ討論シテ、時勢民情ノ変ニ由リ、適宜ノ

活動ヲ為シ、以テ古聖天皇ノ遺謀ヲ拡充シ、宇内万国ノ
通宜ヲ大成スルノ基礎ト為サント欲ス、其要ハ安民ニ帰
スル而已、

第一条

国ノ体制文物ニ顕レ、之カ経緯ヲ為ス者、之ヲ根元
立法ト云、根元立法ヲ纂輯スル、分テ前編正編トナ
スヘシ、前編ハ往古ノ典例ヲ論定シテ立法ノ根拠ト
ナシ、正編ハ現今ノ法憲ヲ論定シテ後來政務ノ則ト
ナスヘシ、

第二条

前編之体裁	忠孝教民
皇孫垂統	開国規模
公議建国	女帝承統
方面命帥	定立聖嗣
皇后摂政	郡県制治
外国交際	
定冠服制	

但シ此類纂輯スルニ從テ之ヲ増補スヘシ、且本条
ハ右ノ如ク事蹟ヲ掲出シ、分註ハ漢洋ノ事蹟ヲ挿
入シ、末尾ニ総評ヲ置テ是非善惡ヲ議シ、其至当
ノ条目ヲ標識スヘシ、

第三条

正編ノ体裁

- 一 広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシ、
- 一 上下心ヲ一ニシ、盛ニ経綸ヲ行フヘシ、
- 一 官民一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシ
テ倦サラシメンヲ要ス、

- 一 旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ、
- 一 智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ、

但シ右五箇条御誓文ノ意ヲ拡メテ、加ルニ緊要ノ
条件ヲ定議スヘシ、

冊子原寸 縦二七・八釐 横二〇釐 六枚

〇三三三 久光公ノ進退ニ就キテ某氏ノ神託伺覚書

三六 奈良原繁ヨリ久光公へノ建言

忠義公ノ学校奨励金ノ施行ニ就テ

方今我国ノ形勢ヲ管見仕候ニ、上下ノ疲勞日一日ヨリ甚シク、此疲勞今一層ノ極ニ至レハ、政府□独り不得其安全ヲ、固ヨリ不待論ヲ、然ルニ近年政府ノ有様ヲ見ルニ、佐賀ノ征伐ヨリ台湾・支那ノ事件、続テ今日朝鮮ノ事ニ至リ、一時ノ僥倖ニ誇リ反テ内地人民ノ如不顧苦情ヲハ、此勢ニテハ不知々媿^(魏)呉ノ術中ニ陥リ、居ナカラ彼ノ不免為奴隸、不出数年、

御前ニハ疾ニ其機ヲ御洞察被為 在、先年西国

御巡幸ノ時、十四ヶ条ノ御建白、続テ酉年

御上京以來、千辛万苦被為在 御尽力候ヘトモ、時運ノ

令然ムル処ナルカ、終ニ御趣意被行カネ、実ニ遺憾ノ至

皇国ノ不幸ト不言シテ何ソ、然レトモ於

御前ニハ、去ル壬戌ノ年初テ 御上京在マシテヨリ以來、

古今無双ノ御忠勤ニ依テコソ、今日ノ

王政ニモ更リ、最早人事ノ極ヲ被遊 御尽候末ニテ、聊

遺憾ハ無御座候得共、此末

皇国ノ形勢ヲ愚考仕候得ハ、前文衰頹ノ機、顯然ニテ不

堪皓歎ニ次第、去ナカラ目前救急着手ノ見留全ク無之、

八方短慮ニ涉候処、甚^(迂遠)廷達ノ論ニ候ヘトモ、今日ヨリ事

ヲ期、遠大ニ今一往鹿兒島県下ノ人心ヲ掌握シ、他日有

事ノ日一層ノ御尽力有之度、ソノ策如何トナレハ一昨々

年、

從三位様五万石ノ御賞典米ヲ県下学校ノ資本ニ御施行被

下候事ハ、表通 政府エモ御届相成居候事ニテ、当分差

配ハ惣テ県庁工御委任ノ事候エトモ 御方々様モ被為入

候御事故、右学□今一層親敷御世話被成下、御仁恤被召

加候様仕度、左候ハ、一同猶又奉感服御仁徳ニ、生徒ノ

内往々御用立候者トモ輩出仕、他日御尽力ノ折、幾分ノ

御為^(ニカ)モモ可罷成儀ト奉存候、只今ノ取扱ニテハ、幼若ノ

者共ナトハ

朝廷ヨリ被召建候学校ノ様、心得違候者モ可有之、是迄ハ

聊目前ノ忌憚モ有之候ヘトモ、往々ノ事□勘考仕候ヘハ、

一日モ不可置儀ト奉存候、右ニ付テハ政府ハ勿論、在県

ノ征韓論家、又ハ県庁辺ノ都合モ如何ト 思食難計奉存

候ヘトモ、初メヨリ政府エハ御届ニモ相成居候事ニテ、

尤大山令エハ如何様トモ熟談出来候事ニ奉存候間、御勸

考被成下候テ何分ノ御沙汰奉拝願度候、此段令扶中申談、

不願恐ヲ奉伺候、以上、

奈良原繁

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 三枚

三光 左府公ヨリ三条相国へ

服制図等返上ノ件

艸稿

服制図一冊、表一冊、外二二通

御下問拝承仕、驚愕恐縮之外無御坐候、小臣宿痾今二全

快二不至、目前之小事モ遺忘仕指揮不相叶、況天下之大

政可否難相弁御坐候、依之不敬之至御坐候得共、其儘返

上仕候、此旨不惡御聞取被成下、宜御執奏奉伏願候、誠

恐誠懼頓首謹言、

文書原寸 縦一六・八種 横五八・七種

三〇〇 白川県士族桜田惣四郎ヨリ政府へノ建言

朝鮮事変ニ就テ

(表紙)
愚存

桜田惣四郎

今般我レノ軍艦、朝鮮ト兵端ヲ開キシ所以ノ者、其曲直

未タ何レニ在ルヲ知ラス、然トモ一旦彼ヨリ和信ヲ破リ、

兵端ヲ開カハ、我亦戦ハサル能ハス、其軍ヲ出スノ緩急

ハ固ヨリ廟議ノ至密ニシテ、敢テ外人ノ窺ヒ測ル可ニ非

ス、且妄リニ議スヘキ所ニ非サルナリ、然ト雖トモ征討

ノ議、今日断然廟決無カラサル可ラサルナリ、然而我レ

ノ患ヒタルヤ、朝鮮ニ在スシテ支那ニ在リ、支那ニ在ラ

スシテ魯ト英仏トニ在リ、何トナレハ則チ若シ一タヒ朝

鮮ト隙ヲ開クヤ、彼レ必ス援ヲ支那ニ請ハン、彼レ台湾

ノ恨ミ満腹、之ヲ報ヒント欲シテ未タ其機ヲ得ス、今其

応援ノ名分ヲ得ハ、断然兵ヲ出シテ其恨ヲ報ルハ必然ナリ、我レ二国ト争乱ヲ発セハ、其久シキ、幾年ヲ経ルヲ知ラス、今国内已ニ疲弊ス、猶之ニ非常ノ軍費ヲ以セハ、億兆ノ人民益ス困弊ニ陥ルヘシ、此時二当リテ、渠等鸕蚌ノ謀ヲ施スハ必然ナリ、是我レノ尤モ可恐ノ大ナル者ナリ、夫レ魯ノ我レニ於ル浸漸以蝦夷ニ迫リ、已ニ樺太ヲ蚕食ス、魯ノ蝦夷ニ迫ル、譬ヘハ脱疽ノ小指ニ発スルカ如シ、其毒尤些微ニ似テ而一身ヲ腐脱シ尽サ、レハ止マス、彼レノ素志タル、寸ヲ積ミ尺ヲ伸ヘ、終ニ五大洲ヲ并吞セサレハ措カサルナリ、故ニ魯ノ後患予メ朝鮮ト隙ヲ開ノ日、之ヲ慮リ、之ヲ防カサルヘカラサルナリ、将タ英仏ノ我レニ於ル、駸々トシテ我膏血ヲ腠ルヲ事トス、今彼レ我レノ諸省各寮ニ潜居シ、鼓動シテ百事ヲ起興シ、品物ヲ輸入シテ疲弊ヲ極メシム、其術ノ巧ミナル、譬ヘハ薬ヲ以テ病夫ニ与ヘ、而テ終ニ之ヲ死セシムルカ如シ、彼レ強兵ノ法ヲ以テ兵ヲ弱メ、富国ノ策ヲ以テ国ヲ瘠セシム、其他百端皆国用ニ備ヘ、人事ニ便ナルヲ以

テ我ヲ鼓舞ス、我レ其力ヲ測ラス、時ヲ察セス、悦テ之ヲ倣ヒ、楽テ之ヲ措カス、故ニ兵ノ衰弱スルト疲弊スルヲ覺ラス、将タ佞令ヒ覺ト雖トモ彼レ強テ起興シ、圧シテ輸入シ、其勢ヒ中コ口止ムコト能ハサラシム、是彼レノ尤モ黠ノ黠ナル所ナリ、蓋シ渠等ノ術タル、亦各其国名ニ似タリ、魯ハ其術魯鈍ニシテ、其功ヲ百年ノ後ニ全フス、我レ之ニ接スル、北門ノ鎖鑰ヲ敵カニシ、敢辞命ヲ謹ミ、我レニ迫マルノ術ナカラシムヘシ、英ハ則チ英邁ニシテ専ラ压制ノ術ヲ以テ我レニ迫ル、我亦愈屈撓セサルノ人ヲ撰ヒ、压制セラレサルノ法ヲ設ケサルヘカラス、仏ノ術タル、亦仏氏ノ民心ヲ蠱惑スルカ如シ、隱然以テ我レニ迫リ、民心ヲ得テ而後利ヲ得ルヲ務ム、我亦慎密ノ術ヲ以テ之ニ接セサルヘカラス、然レハ今日ノ急務、佞令ヒ朝鮮ト隙ヲ生セスト雖トモ、渠等ニ接スルノ術一日モ無ルヘカラス、況ヤ朝鮮ノ事アル、尤モ急ニセサルヘカラス、今各国トノ交際其害百端ナリト雖トモ、其要スル処压制ト蠱惑ノ二事ニ出テス、压制ノ恥ヲ覺リ

蠱惑ノ非ヲ知り、断然以諸省各寮ノ雇人ヲ解キ、港口輸入ノ品物ヲ嚴シ、唯其軍用ノ者ヲ雇ヒ、其軍用ノ品ヲ入レ、之ニ謝スルニ朝鮮ノ事ヲ以セハ、我愈ヨ之ヲ拒ムノ辞アリテ、彼レ強テ入ルノ論ナカラシム、夫如斯ナルトキハ疲弊以救フヘク、朝鮮以テ征ス可ク、压制以テ防ク可ク、蠱惑以テ解ク可ク、蝦夷ノ蚕食以テ其経界ヲ定ム可シ、若不然ハ則チ恃リ朝鮮ヲ征スル能ハサルノミナラス、遂ニ渠等ノ術中ニ陥リ、臍ヲ噬ムノ禍ヲ招クニ至ルヤ必セリ、

白川県士族

桜田惣四郎

冊子原寸 縦二八・三厘 横二〇厘 五枚

三三 白川県士族桜田惣四郎ヨリ政府ヘノ建言

財政救済策

(表紙)
「愚」

存

「桜田惣四郎」

伏惟ミルニ、方今天下貨幣ノ透過日ヲ逐テ否塞シ、人民生活ニ困ミ洵マトシテ日夜寢食ニ安セス、一旦之ニ加ルニ天災非常ノ變ヲ以テセハ、必ス官府ノ賑恤ヲ仰カサル能ハス、窃ニ聞、官府亦甚闕乏スルト、古来貨幣ノ透過、其權或ハ官府ニ帰シ、或ハ豪富ニ帰シ、人民其不通ニ困ムコト有リト雖トモ、貨幣恒ニ国内ヲ出テス、我ヲ以我ヲ救フ、亦甚タ難カラス、今也、則チ海外各国ト貿易シ、不知々々全国ノ疲弊ヲ招ケリ、加之ミナラス、官府外債亦不少、嗚乎、皇國ノ疲弊未タ今日ノ甚シキニ至ルヲ聞ス、臣子タル者誰カ傍觀坐視スルニ忍ンヤ、廟議深遠、固ヨリ窺ヒ図ル可ラス、必ス救助富國ノ良算有ルヘシ、小臣不肖、敢テ国政ヲ裨益スルノ識見有ルニ非ス、衆人ノ見ル処、其言フ処ニ随テ之ヲ上言ス、冀クハ之ヲ了察シ玉ヘ、人々謂ヘラク、今日ノ勢ヒ其弊ノ此ニ至ル所以ノ者多端ナリト、今其一ニヲ挙ン、曰、妄ニ土木ヲ興シ玉フナリ、曰、頻リニ外人ヲ傭ヒ玉フナリ、曰、衣服百物外国ニ依ルナリ、曰、輸出輸入節制無キ也、曰、

国内ノ風俗奢侈ヲ極メ華美ヲ好ム也、曰、人民相競ヒ農
工ヲ棄テ商賈ニ馳スル也、曰、其他百端有リト雖トモ皆
此二原ツケリ、然ルニ是ヲ難ズル者ノ曰、維新遷都ノ際、
土木興サ、ル可ラス、我レ律法ニ暗シ、百工ニ拙ナシ、
外人雇ハサル可ラス、衣服百物能ク健康ヲ養ヒ、日用ニ
便ナリ、外国ニ依ラサル可ラス、彼レ我ノ産ニ依ル少フ
シテ我レ彼レニ依ル、尤モ多シ、輸入多カラサル可ラス、
下民ノ束縛ヲ解テ自主自由ノ權ヲ与フ、是其奢美ヲ極メ
シムルトスル所以ナリ、大ニ商法ノ道ヲ開キ富國ノ策ヲ
建シム、是其商賈ニ馳スルトスル所以ナリ、事ト害ナキ
能ハス、法弊ナキ能ハス、今日我レノ急ヲ救ヒ、短ヲ補
ハント欲ス、而シテ其功未タ半ハナラスシテ其弊害ヲ奉
テ是ヲ責メハ、何事カ之レ成シ、何人カ之ヲ達シ、若シ
一時我レ疲弊セハ彼レニ負債シ、國富テ然後是ヲ返却ス、
何ソ晩カラシ、疲弊何ソ憂シ、負債何ソ恐レント、夫一
時ノ疲弊ヲ憂ヘス、負債ヲ恐レシ、益ス今日ノ運ヒヲ開
張スルト否サルトノ利害得失、察セサル可ラサルナリ、

大ニ商法ヲ開ク、固ヨリ國ノ益タル、論スルヲ待タス、
然トモ各國ノ貿易ヲ為スヤ、金力ヲ百工製造ノ本ニ用ヒ、
器物内ニ充塞シ、其余物ヲ輸出ス、是其利ヲ得ル所以也、
我レノ貿易タルヤ、物産百工ノ本ヲ務メシテ、専ラ金
力ヲ商法ノ末ニ尽シ、將タ彼レノ物品ヲ以テ我國內ニ散
布シ、而シテ利ヲ得ルコトヲ務ム、恰モ彼レノ外肆ノ如
シ、斯ノ如キ商法ヲ以テ益ス開張セハ、恐ラクハ國內空
虚トナラサレハ止マサルナリ、是其改ム可キノ一也、人
民奢美ヲ極ムルハ、束縛ヲ解テ自主自由ノ權ヲ与フルト
ス、束縛固ヨリ解カサル可カラス、然トモ人民ノ生活ハ
各其職ニ食ミ其分ニ安ンスヘシ、若シ自主自由ノ權ヲ与
ヘントシテ、其産業ト自奉ト相適セス、只管ヲ奢美ニ馳
セ自由ヲ肆マ、ニセハ、其生活ニ窮スルニ至ルハ必然ナ
リ、是其改ム可キノ二也、衣服百物彼レニ依テ健康ヲ養
ヒ日用ニ便スト、健康固ヨリ養ナハサル可カラス、日用
必ス弁セサル可ラス、然トモ天ノ物ヲ生スルハ、自カラ
其水土ニ因テ生タス、百物皆然ラサルナシ、況ヤ人民為

ル者万里ノ海外ニ依テ健康ヲ養ヒ、日用ヲ弁スルノ理アラシヤ、其勢ヒ疲弊セサルヲ得ス、一旦自国ニ就テ之ヲ求ハ輸出輸入モ亦随テ減少スヘシ、是其改ム可キノ三也、外人ヲ雇ハ律法ヲ明カニシ、百工ヲ精フスルト、是亦無ルヘカラサルナリ、然トモ国力ヲ計ラス妄リニ是ヲ雇フ、其給俸及ヒ費用ノ多キ、国益ヲ生スルト比較スルニ相償フコト能ハス、仮令後日大利ヲ興スト雖トモ給俸費用万々接続ス可ラス、即今我政府ノ勢ヒ雇人諸省ニ在テ、律法ヲ以テ雜稅ヲ興シ、鉾山ヲ開キテ金銀諸鉞ヲ得ルト雖トモ、毫モ官府ノ有トナラス、拳ル処多々マスマタ外
 国ニ運輸ス、恰モ彼レノ外府ノ如シ、我レ彼レヲ雇フノ名アリテ、其実八百官群職三千余万ノ人民、自費ヲ以テ彼レニ仕役セラル、ヲ免カレス、是其改ム可キノ四也、維新遷都ノ際土木興サ、ルヲ得ス、是固ヨリ衆ノ知ル処ナリ、然トモ緩急ヲ計ラス、本末ヲ察セス、施行ノ順序ヲ失シ、専ラ末ニ馳セ、緩ヲ務ムルトキハ危急救フ能ハス、基本強フスル能ハス、今日軍國ノ用非常ニ備ハラス、

賑恤蓄ヘ天災ニ充タス、只管ヲ鉄道・石屋・電線ヲ急務トス、実ニ本末緩急ノ順序ヲ失スルノ甚シキニ非スヤ、若今日ノ運ヒヲ以テ益ス開張セハ、仮令ヒ石屋国内ニ碁布シ鉄道四方ニ通達スルモ、恐ラクハ飢夫石屋ニ仆レ餓莩鉄道ニ横ハリ、遂ニ他人ノ有ト為ラサレハ止マサルナリ、是其改ム可キノ五也、然レハ今日ノ急務何レニカ在ル、曰ク、家屋ハ雨露ヲ凌キ、橋梁ハ人馬ヲ通シ、一切ノ建築目前ノ急務ノミヲ修繕シ、雇人ノ如キハ止ヲ得サルヲ存シテ悉ク是ヲ解雇シ、衣服百物自国ニ依テ之ヲ他ニ求メサラシメ、節儉ノ令ヲ下シ冗官贅費ヲ省キ、上下奢侈ノ風俗ヲ一変シ、人口物産ノ多寡ヲ精算シ、輸出入ノ節制ヲ嚴ニシ、本ヲ務メテ利ノ末ヲ争ハシメス、惟タ其急務トスル処ハ軍國ノ用ト賑恤ノ蓄トヲ以テシ、然後順序ヲ以テ百事ヲ興サハ、国用自ラ充実シ、負債随テ返却シ、鉄道・電線ノ如キ国内ニ達セシムルニ至ルヘシ、維新ノ業茲ニ八年、是ヲ变革スルノ難キ、所謂虎ニ乗ルノ勢ヒアラン、然ト雖今日断然一変セハ、却テ其事ヲ有

ツヘシ、若シ然ラスンハ特ニ是ヲ維持スル能ハサルノミ
ナラス、恐クハ言ヘカラサルノ禍ヲ招クニ至ル也、必セ
リ、小臣固ヨリ不肖、国政ヲ裨益スルノ識見有ルニ非ラ
ス、唯衆ノ見ル処、其言フ処ニ随テ之ヲ上言ス、僭越ノ
罪固ヨリ不可免、杞憂ノ献芹、冀クハ之ヲ察シ玉ヘ、誠
恐誠惶頓首百拜、

白川県土族

明治八乙亥年

桜田惣四郎

冊子原寸 縦二八・五糎 横二〇・五糎 七枚

三〇三 三輪田元綱ヨリ左府公ヘノ建言

政府大改革ノ件

〔封筒〕 左府公殿下 三輪田元綱

御親覽

〔封筒ウラ〕(朱)「三輪田」

封〇

記

一 御委任ニ相成候上ハ至急御着手被遊候事、
一 一条公辞表御差出シニ相成候ハ、至急御聞届ニ相成度
事、

一 官方御用召ノ事、

一 諸官ノ長ハ官方ニ有之度事、

一 諸官員奏任以上ノ者惣免職ノ事、

一 生命ヲ擲ツ報國ノ者ニ非レハ御採用ニ成ラサル事、

一 雇夷人惣断リノ事、

一 諸官員再任スヘキ者ハ兼テ御聞ヘ置ノ事、

一 正服帯刀ノ事、

文書原寸 縦二七・五糎 封筒原寸 縦二〇・五糎

横 四〇糎

横 七・五糎

三〇三 五等議官中金正衡ノ国体名分論

五等議官中金正衡

存国体進開化

渾水不可不決焉、而成決之利則易、防決之害則難、決之

而誤其術、則奔瀉激注、崩岸壞堤、以至流沒田園漂蕩家屋也、故能制水者、必先虞其害、而開其利、嗚呼除天下之弊、其猶決水哉、今夫太平之久、姑息偷安、上下閉塞、而政令不活、人心厭焉、鬼神憤焉、然而其弊之既窮也、天必降俊傑、大破旧弊、以通新利、夫水決而滯害去、導之不得宜、則復生大害矣、政革而旧弊除、処之不得宜、則更生大弊、可不戒哉、謹按、戊辰以來、唱王政一新、速除旧政府之弊、中興之業、赫如升日、広議決于公論、求知識於世界、以振皇基、聖誓之所揭示、表信於遠邇、開化大進、四海刮目、蓋聖德天縱、輔相稱職、何其業大而功速也、爾後之政、取準于西洋、夫世運之變、其風化從西及東、推其源則皆出洋人之知識、何謂知識、以神智窮万物之理、推物理以明人倫之道、故造化之自然、務除人生之束縛、上下各達其權利、尽力利用、以共其幸福、是以治國之術、經濟之道、人民交際之法、理義精細、無有遺漏、尚恐有其未至、改旧就新、汲汲是務、仔仔是修、其學博而其術精、遠出于本邦支那之右、故今欲進開化之

政、不依西洋、則無復可取方於他也、是自然之氣運、非人所能制之、從勢而施事、人亦安而不疑、嗚呼末造之利害、果何如哉、今日廟堂能察時運之變、不知乘其變而制其勢、則我國体亦必不一變不已矣、夫國之存亡猶人之生死也、人之精神既亡、而形骸徒存、亦不可謂其人有也、國体已亡而國人尚存、亦不可謂其國存也、夫本邦何以為体、日以人心為体、然与外人所謂國体者不同、我建國鴻荒之世、姑舍不論、天照大神以來、累世積德、而其都在西辺、王沢未周、至 神武天皇、以神明之胤、具神武之德、東征誅滅諸神裔而割拠者、遷都大和、以開万世之業、伝至 天智天皇、廢國造梟首者、立封建之制、拳天下尽郡県之、以置國司、其後國司交代、亦以門流命之、至後遂有大小名之目、及源氏執權、置守護地頭、蓋皆源于此矣、夫貴氏族者、可謂固有之國俗也、再成封建之形、使武臣掌握兵權、然後、王政衰廢、及北条足利氏、凌躐王室、跳梁拔扈、廢立天皇、其後群雄割拠、攻戰無休、海内擾亂、至織田・豊臣二氏、始一定全国、至德川氏、

終能全其功、開幕府而專執國政者、二百余年矣、夫王政之衰如彼、武門之隆如是、而未嘗一日亂君臣之名分、群雄相討、亦必藉朝旨、以爭其名、蓋國俗去名分、則無所容身也、原之一國一胤、國人之於王室、以血統論之則祖宗也、以名分論之則君主也、故列聖保民如子、國民尊君親上、相共保護焉、不可犯之名分固存、而不可斃之情義亦自存、神明之靈、一氣凝結、以為大倭之魂、是我國體之所以卓越万国、而其理亦不可誣也、今也廢門地奪世祿、天皇定國是而為之、君民一体、以振起国力、則模西洋之法制、用西洋之衣食、用西洋之言語、亦誰謂不然、苟存夫大和之魂、人心不變、則皇祚万世無有毀損也、夫世界政體之種、大別之為二種、曰君政也、曰民政也、又區別其君政為三種、曰君主專權、曰君主專治、曰君民同治、民政為二種、曰貴族專治、曰万民同治、今不就各種弁之、如本邦一種、自然之制、而皇帝固有專制之權、而且有專治之美、所謂專治者、以國憲限制君權、如本邦以神德與人心保護之、不可以余國之體比較之、何為神人之保護、

昔 孝謙天皇之朝、道鏡恃寵、欲竊大位、群臣捍賀以為法王、 天皇亦將授其位、尚且使清磨（和氣）稟神旨、而清磨亦以神旨拒之、一言之下、大奸不能成其志、 天皇亦不得行其意、清磨雖忠節、苟非賴神德與人靈、何以能致之乎、今夫氣運之變化、日月層進、主張自主自由之說、而大變民法、々々漸變、國憲亦從而移、利用是務民心澆漓、至如名分舍而不論、所謂未造之弊、實不可測也、嗚呼今日之人心、乃積年之所養成、假令變其俗、名分則不可不弁、臣恐從今過三十年、則人心漸移、名分之事至無復所語、則國體亦變而無形跡矣、是臣所以區々憂慮而不已也、今聖主在位、良輔在職、計時為政、算當無遺失、竊願施良策於今日、以防後年不測之害、則祖宗之靈始安、而天下蒼生之福也、

修教道明名分

知心神之理、而後可以論教道、教道明而名分始可存也、夫心之為物、靈而能識、形氣則感物、而生情、知覺其情

者神也、神者心之源、就其作用謂之意識之神、謂之運動之神、情由感而發動、以心思度之、不失其天良者、是之謂智、苟任其情、而不智以節之、則心放而靈亡矣、故造物者、資心而立教、格之以明名分廉恥之義、養之以悟平和忍受之理、其高尚者君子依之、近邇者小人信之、夫精神常健旺則平和也、常平和則能健旺也、是以能明其智識、權衡正直、不失其度也、今弁所謂國體與國俗、而名教以存、國體之美、開化以除國俗之弊、俗弊自去而體美益現矣、是故保國體在維持人心、維持人心則在明教道、欲明其教、則心神之理、修心之學、不可不講也、維持之道未至、而風化徒開、則利用完備、亦無益於國也、蓋西人有見于此、深究精神之理、精論修善之方、性行是勤、禮義是守、天理之所命、万国莫不奉也、今也朝廷急唱開化、學者爭唱自由通義之說、獨至修身之學精神之理、束閣不論、是知開化之皮膚、而未至腦髓也、知所謂國體以人心為體、則豈有是過乎、臣聞西洋開化之國、人教有校、法教有院、人教以修經濟之業、法教以講養心之理、挾良師

以訓導後學、規則嚴正、無有躐等、如博物算數之學、亦必普通、而後從其好、專門成業、至修身之學、則綜貫諸科、因天賦之性理、以開經世之智、而後自由通義可得而論、可得而行、出眼於風俗之外、發識於規矩之表、考思定斷、卓乎自信、其品行不同、亦至心神、固歸一理也、乃如仏蘭西、學術之精、兵馬之強、夙有稱譽、然每生內外之亂、屢改革政制、治績終不及英吉利、是不在為政之工拙、而在教道之不至也、今國學者研窮太古鴻荒、稱揚自尊、其弊頑梗、儒者之徒、唯務溫古而無知新之効、不為迂闊、則為文弱、如諸派法徒、株守祖說、安保守施、至理論決行、則絕不自任、觀其近狀、或破戒或變容、以不過求媚於時勢、西人指為無教之國、亦非過貶矣、雖然彼頑梗者必有真率剛烈之氣、苟修養得宜、則化為剛毅、是國俗之弊、而國質之良亦存者也、今西人乘我教之衰、而欲大布彼教、嗚呼彼果狡黠耶、抑造物者使之然耶、人多患之、臣竊以為幸矣、古人有言、無敵國外患則亡、今外教將入、是天使我興教也、皆曰不防外教則失國體、果

然、宜修我教使彼無可容之地、苟能如此則耶蘇雖再生、

安得施焉、不修人心、而欲防外教、猶不振士氣、而欲防

敵兵也、政府模倣西制、謀不得其宜、恐終生趨末失本之

弊、蓋其勢至于茲者、抑亦有故焉、今日開化、進運太急、

既出人爲之外、是以國眼眩惑、或有失錯、從局中睹之、

人不覺之也、不如一反其本、而占地步之爲優也、其法先

興大學校、選擇有望實行之人以督之、如教師之撰及學則、

一委任之、盛唱修身之學、論心神之原理、諦名分之真義、

各立意見討論弁駁、如西洋法徒、則教理精密而人心不惑、

朝議嘗置教部省、而法教沈低如今日、其何以維持人心哉、

是亦宜施改正之良策也、伏願上從三職、下至奉判之官、

夙夜勉勵、抖擻精神、使今日之心、如戊辰年之心、修身

先衆、大興名教、使人々知名分不可失之真理、則開化之

功、為國家之真益、其可庶幾歟、

冊子原寸 縱二四・五種 横一六・五種 七枚

三器 權少教正三輪田元綱ヨリ曆法改正案ヲ久光

公へ提出

皇國固有曆策 改正旧曆策 旧曆變格改正策

〔封筒〕 曆日草稿

權少教正三輪田元綱

二七四四ノ一

〔表紙〕 皇國固有曆上策

上中下共三冊

皇國固有曆卷之二百二十三

凡例

一天文略論云、人民天地ノ間ニ生ル、ヤ、正ニ覆載ノ造
ル所以ヲ知ルヘシ、彼ノ蒼天ノ浩蕩タルニ、日月何ヲ
以テ光懸スル、星宿何ヲ以テ躡伏スル、地球何ヲ以テ
圓運シテ停ラサル、歳序何ヲ以テ互古ヨリ紊レサル、
靜ニ言ニ之ヲ思ヘハ、必ス一ノ造化真宰ノ冥々之中ニ
默主スルアルヲ知ル、凡ソ天ニ在リテ象ヲ垂レ、地ニ
在リテ形ヲ成スモノ、挙テ真宰ノ之ヲ形象スル所ニ非

ハナシ、是ニヨリテ遠クハ諸ヲ物ニ取り近クハ諸ヲ身
ニトルニ、何レトシテ真宰ノ化スル所、造ル所ニ、非
ハナシ、則チ朝ニ乾^{ツク}レタヘニ惕レテ、君子敬畏ノ心ヲ
興シ、俯テ地理ヲ察シ仰キテ天文ヲ觀シ、小人鑒臨ノ
念ヲ凜^{ツツ}ム、孰カ敢テ天ヲ談シ地ヲ説クヲ謂テ、迂闊ト
センヤ、ト云リ実ニ然リ、

一地球ノ体、円クシテ橙ノ如ク、南北ニ極アリテ東西ニ
極ナシ、北極ハ上ニ向ヒ、南極ハ下ニ向フ、毎日自ラ
轉ルコト一週、東ヨリ左へ旋ル、日ニ向フトキハ光ク、
日ニ背クトキハ黒シ、是ヲ昼夜トス、是レ万国同説ナ
リ、

一我世ノ人、天ヲ戴キ地ヲ履ミ、却テ曾テ地体ノ旋動ヲ
覺エサルハ、譬ヘハ、人民地上ニアルハ、尚船中ニ在
ガ如シ、地轉リテ人其動クヲ覺エサルハ、船行キテ人
去ルヲ覺エサルガ如シ、仰テ星辰ノ西へ邁^{マシ}ヲ望見^{ミル}ハ、
即チ舟行テ岸ノ移ルヲ覺ユルト同理ナリ、人民ノ輕小
ナルヲ以テ之ヲミレハ、地体ハ極メテ大ナリ、轉動常

アリ日夜息マス、固リ習慣シテ自然ノ如ク安ンスレハ、
轉動ヲ覺エサルモ宜^{ヨク}ナリ、

一地球ノ轉動ニ、ニアリ、一ハコレ即チ自ラ轉ルナリ、
一ハ是レ即チ日ヲ圍ルナリ、地球ノ自ラ轉ルハ三百六
十五日ノ昼夜ヲナシ、日ヲ圍ルハ一年ノ四季ヲナス二
十四節即チコレナリ、仍テ地球ノ圍轉スル日数ヲ号シ
テ、後世ニ之ヲ太陽曆ト云、

一月輪、又地球ヲ圍リテ之ヲ行ク、地球行ケハ月輪モ亦
之ニ隨ヒテ行ク、地球日ヲ圍ル一週スレハ、月輪即チ
地ヲ圍ル十二週有零旋ス、仍テ月ノ圍行スル日数ヲ号
シテ、後世ニ之ヲ太陰曆ト云、

一月輪ノ、地球ヲ圍行キ一週スルヲ計ルニ、二十七日三
時余ナリ、若シ日輪ト交会スルコト一次ナルハ、必ス
二十九日六時余ヲ須^スチテ交会ナリ、月行ケハ地球モ亦
行クニ因テ、月再^{マシ}追行クコト数十度、其自ラ軌道^{ミチ}ヲ行
クノ数ヲ過キテ、方^ハメテ能ク交会ス、必ス二日二時有
零ヲ多クスル所以ナリ、

一世人、日月ノ東ニ昇リ、西ニ墜ルヲ見テ、日月皆地ヲ
圍リ行クカト思フハ非ナリ、

一閏日ハ、太陽ノ行度ヲ以テ年ヲ紀ス、閏月ハ即チ太陰
ノ行度ヲ以テ歳ヲ作ス、月份ワケ閏法、各同シカラサルア
リト雖モ、而レトモ歳序ノ紀綱ハ、則チ少シノ差異ナ
シ、此レ所謂約セスシテ合フモノナリ、

一地球ヲ五帶ニ區別スヘシ、地球ニ中線ヲ引キテ、之ヲ
赤道ト名ツク、赤道ヨリ南北、各二十三度半ノ所ニ至
ル土地、四十七度ノ間ヲ熱帶ト号ス、又南北、各二十
三度半ヨリ六十六度半ニ至ル迄四十三度ノ間ノ土地ヲ、
温帶ト号ス、又南北、各六十六度半ヨリ西極ニ至ル迄
二十四度ノ間ノ土地ヲ、寒帶ト号ス、故ニ中帶ニ近キ
土地ハ、則チ春夏秋冬ノ四時熱サ多ク、氷雪少ナシ、
中帶ヲ離ル、漸ク遠キ土地ハ、熱サ少ナク冷多シト知
ルベシ、

以上万国大略同論説ナリ、

一皇國固有曆ハ、天祖真神ノ、大國主神ニ伝ヘ賜ヘルガ、

コノ曆法ヲ、天壤無窮ノ曆法トシテ、朝廷ニ残シ置賜
ヒ、同法ヲ以テ支那ヲ初メ外国ヘモ伝ヘ及ホシ賜ヘル
原曆ナリ、

一外国ノ曆法ハ、何レノ年ヲ曆元トスルコトサツカ明了ナラス、
我皇國固有ノ無窮曆ハ、天地開闢、日ハ甲子年ハ甲寅
ト云フ曆元トシテ、推シ下リ、天孫降臨ノ年ヲ越エ、
神武天皇紀元ヲ経テ、今ヤ明治八年乙亥ヨリ、未來ノ
年契四千八百八十五年ニ至ル迄ヲ、推シ究メタル、皇
國固有ノ曆法ナリ、コレ即チ天祖ノ真曆ナレバ、方今
ノ天度ニ計リテ毫末モ違フコトナキハ云モ更ナリ、大
地球ノ人民、コノ曆ヲ以テ祖曆トナシ、正朔ヲ奉シ、
又其寒熱ノ帶度ニヨリテ、人民ニ時ヲモ授クヘキナリ、
一天地開闢ヨリ、大國主神百四十年癸酉ニ至ル迄ハ、大
虚二月ノ見ユルコトナシ、仍テ太陽曆ナルコトハ論ヲ
待ス、大國主神百四十一年甲戌ヨリ太陰大空ニ見エ初
ヌレハ、日月ヲ望ミテ正ニ合朔ノ式ヲ初メ賜ヘリ、

一皇國固有曆ニ、先天曆アリ、後天曆アリ、先天曆ト云

ハ、大國主神百四十一年甲戌ヨリ、崇神天皇五十年ニ至ル迄ヲ、一元四千五百六十年トス、其法ハ、章部紀元ノ分別ヲ立テ、古曆法ト合セテ、合朔ノ法ヲ設ケ、氣策八十五日三十二分日ノ七分トシ、朔策ハ二十九日ト九百四十分日ノ四百九十九分トス、是ヲ先天曆ト云、一天地開闢ヨリ、冬至ヲ以テ歲首トセルガ、大國主神ノ御世ニ合朔ノ式行レテヨリ後ハ、即チ建子ノ月冬至ヲ以テ歲首トセリ、然ルヲ神武天皇元年辛酉紀元ニ至リテ、建子ノ月ヲ改メテ、建寅ノ月ヲ以テ正月トナシ賜ヘリ、此曆法明治六年ニ至ル迄二千五百三十三年相續セリ、

一後天曆ト云ハ、先天曆ナル孝安天皇四十一年十一月ヨリ、三百四年二一日ノ朔差ヲ生シ、孝元天皇十五年辛丑冬至ヨリ、百二十年二一日ノ氣差ヲ生セリ、故ニ而來此法ヲ設ケテ、七千二百年ノ間、合朔ノ式ヲ作り一元トナス、是ヲ後天曆ト云、

一今ヤ後天曆ノ法ニ依テ、曆面ヲ作り、以テ上中下ノ三

等ニ分別セリ、上段ヲ以テ一年ノ日數、周天三百六十五日四分日ノ一分ナルコトヲ知ラシメ、一周二周三周ト次第二記シ、一年三百六十五日ヲ示ス、四年ニシテ三百六十六日ナリ、中段ハ太陽曆ナレハ、一日二日ト日ヲ以テ記シ、太陽曆トハ白昼ナルコトヲ示ス、カクテ太陽曆ナル孟氣・仲氣・季氣ノ三節ニ大小ヲ分チ、大ナルハ三十一日トシ、小ナルハ三十日ナルコトヲ知ラシム、彼西洋曆二月二月ト云コトノ僻說ナル弁ハ、別ニ論アリ、下段ハ太陰曆ナレハ、月ハ夜陰ニ在ルコト云モ更ナリ、事實ヲ以テ一夜二夜ト記セリ、カクテ太陰曆ナル大ノ月ハ三十夜トシ、小ノ月ハ二十九夜トス、最下段ニ六十幹支ヲ置クハ、上中下ノ三段ニ貫徹スルモノナリ、譬ハハコノ幹支ヲ見レハ、上段一年ノ日數二百十周二当ル日モ、中段太陽曆ナル孟秋二十七日ニ当ル日モ、下段太陰曆ナル七月二十一夜ニ当ル夜モ、壬戌ノ日ナリト知ルノ類ナリ、

一神武天皇紀元ヨリ、今ニ至ル迄、凡二千五百三十五年、

其年契少シトセス、然ルヲ皇国ノ人民、我國ニ太陽曆有ルコトヲ知ラサルハ何事ゾ、抑太陽トハ日ノコトニシテ、曆面ニ見ユル二十四節ハ即チ太陽曆ナリ、コレ則天常ヲ論シ長久ヲ記ス朝廷ノ古儀ニシテ、数千年ヲ相續セリ、且ツ太陽曆ヲ以テ人民ニ時ヲ授ケ、事ノ宜キヲ計リ節ヲ制シテ、建寅ノ月ヲ以テ正月トナシ賜ヒ、太陽太陽並ヒ行レシハ、兩善全キノ曆法ナリ、然ルヲ明治六年ニ西洋ノ曆法ニ改メ賜ヒシ曆面ヲ、太陽曆ト心得テ、旧曆ヲハ太陽曆ト思フハ、抱腹ニ絶エタル笑談ナリ、

一西洋曆ニ、七曜ノ日トシテ、日月火水木金土ノ日ヲ出セリ、然レトモ曆元明了ナラス、且ツ杜撰ノ配当說ナレバ、捨テ取ラス、後世理學行レテ是ヲ見レハ、土星ノ外ニ穀星アリ、彗星アリ、又火星ト木星ノ間ニ、小行ノ四星アリ、是等ノ星ヲモ日數ノ順序ニ當ツヘキ理ナルニ、方今ノ西洋曆ニスラ挙サルコトナレハ、捨テ取ラサルナリ、抑吾皇国ノ曆日ニ於テ、朔日ト云ヘハ、

月ノ初メテ西ノ空ニ立チ初ルノ意ナリ、望日ト云ヘハ、月ノ闕亡ナクシテ滿チ溢ヘタル夜ヲ云、晦日ト云ヘハ、月隠リテ夜深ク出ル意ヲ云、何レモ事实上ニ確証アルコトナリ、然ルヲ七曜ノ日トシテ、或ハ日曜日ト云トモ、日光ニ確証ナク、或ハ水曜日ト云トモ、水星ニ關係ナシ、火木金土星モ亦然リ、サレハ天地間ニ於テ、無用ノ冗物ニアラスヤ、

一皇祖、御歴代ノ御祭日、的當セス、譬ヘハ神武天皇崩日ハ七十六年三月十一日ナルヲ、改曆ニテハ四月三日トセリ、其所以ハ春分ヨリ十三日目ニ当ル日ナレハ然定メタリ、然レトモ僻說ナリ、天朝無窮曆ニ依テ、當昔ノ御崩日ヲ求ルニ、春分ヨリ十五日ニ當レリ、サレハ真曆ノ国忌ニ叶ハズ、綏靖天皇崩日ハ、三十三年五月十日ナリ、然ルヲ六月二十二日トセリ、コレ夏至ノ日ナリ、是又無窮曆ニ依テ正セハ、當昔ノ忌日ハ夏至ヨリ四日目ニ當レリ、其他百二十余代ノ天皇等ノ国忌日、尽ク的當セス、如此杜撰ナルコトヲ示サムヨリハ、

大宝令ノ定メニ依リテ、今正ニ是ヲ改テ、皇曾祖ヨリ以下御三代ハ正ク御忌日ヲ以テシ、御四代以上ハ数百代アルモ、尽ク四季ノ国忌日ニ祭ラムトス、

一春ノ国忌日ヲ、春分ノ翌日トシ、春三箇月ニ見ユル所、

高倉院天皇ヨリ後白川院天皇ニ至ル迄、十八代天皇等

ノ国忌トナシ、夏ノ国忌日ヲ夏至ノ翌日ト定メテ、夏

三箇月ニアル処ノ仁明天皇ヨリ光明院天皇ニ至ル迄、

二十八代ノ天皇等ノ国忌トナシ、秋ノ国忌日ヲ秋分ノ

翌日ト定メテ、秋三箇月ニ記ス処ノ平城天皇ヨリ後土

御門院天皇ニ至ル迄、三十九代天皇等ノ国忌トナシ、

冬ノ国忌日ヲ冬至ノ翌日ト定メテ、冬三箇月ニ示ス処

ノ土御門院天皇ヨリ後花園院天皇ニ至ル迄、二十四代

ノ天皇等ノ国忌トナス、

一皇曾祖ヨリ皇考ニ至ル迄ノ三代ハ、正シク国忌日ヲ以

テスルコトナレハ、皇后皇子モ亦忌日祭奠アルヘシ、

今是ヲ略ス、

一元始祭ハ孟春三日、春季祭ハ春分の当ノ日ヲ以テシ、

秋季祭ハ秋分至当ノ日ヲ以テシテ、天神地祇ヲ祭り賜

フ大祭トナス、

一官国幣ノ神社祭奠ハ、其官司是ヲ職レハ、委任シテ曆

面ニ記サズ、

以上忌諱ヲ憚ラスシテ記スハ、潜越ノ罪遁ル、所ナ

シ、仍テ斧鉞ヲ待ツノミ、

皇國固有曆卷之二百三十三

植少款正三輪田元綱惶謹記

明治七年甲戌

○太陽曆 年三三三至三三四日 / ○太陰曆 年三三三至三三四夜

○年日數 ○孟春太陽小祀日 ○立春巳三

四方拜 元始祭

一	月一日	日赤緯南十五度	十九夜	癸巳
二	月二日		二十夜	甲午
三	月三日		廿一夜	乙未
四	月四日		廿二夜	丙申
五	月五日		廿三夜	丁酉
六	月六日		廿四夜	戊戌
七	月七日		廿五夜	己亥
八	月八日		廿六夜	庚子

紀元節

二遊末夜

九	月九日		廿七夜	辛丑
十	月十日		廿八夜	壬寅
十一	月十一日		廿九夜	癸卯
十二	月十二日		三十夜	甲辰
十三	月十三日		一	夜 甲辰
十四	月十四日		二	夜 乙巳
十五	月十五日		三	夜 丙午
十六	月十六日		四	夜 丁未
十七	月十七日		五	夜 戊申

○太陰正月大祀日戌八

雨水未七

十八	月十八日	日赤緯南一度	六夜	己酉
十九	月十九日		七夜	庚戌
二十	月二十日		八夜	辛亥
廿一	月二十一日		九夜	壬子
廿二	月二十二日		十夜	癸丑

出雲祭

廿三	月二十三日		十一夜	乙卯
廿四	月二十四日		十二夜	丙辰
廿五	月二十五日		十三夜	丁巳
廿六	月二十六日		十四夜	戊午
廿七	月二十七日		十五夜	己未
廿八	月二十八日		十六夜	庚申
廿九	月二十九日		十七夜	庚申
三十	月三十日		十八夜	辛酉

○仲春太陽大祀日 ○啓蛰巳四

一	月一日	日赤緯南五度	廿一夜	癸亥
二	月二日		廿二夜	甲子
三	月三日		廿三夜	乙丑
四	月四日		廿四夜	丙寅
五	月五日		廿五夜	丁卯
六	月六日		廿六夜	戊辰
七	月七日		廿七夜	己巳
八	月八日		廿八夜	庚午
九	月九日		廿九夜	辛未
十	月十日		三十夜	壬申

祈年祭

春分祭

十一	月十一日		一	夜 癸亥
十二	月十二日		二	夜 甲子
十三	月十三日		三	夜 乙丑
十四	月十四日	日赤緯南一度	四	夜 丙寅
十五	月十五日	日赤緯北一度	五	夜 丁卯
十六	月十六日		六	夜 戊辰

春分丑初

十七	月十七日	日赤緯北一度	七夜	己卯
十八	月十八日		八夜	庚辰
十九	月十九日		九夜	辛巳
二十	月二十日		十夜	壬午
廿一	月二十一日		十一夜	癸未
廿二	月二十二日		十二夜	甲申
廿三	月二十三日		十三夜	乙酉
廿四	月二十四日		十四夜	丙戌

○太陰二月小九日巳三

陽曆
陰曆

八十六	八十五	八十四	八十三	八十二	八十一	八十	七十九	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四	七十三	七十二	七十一	七十	六十九	六十八	六十七	六十六	六十五	六十四	六十三	六十二	六十一	六十	五十九	五十八	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十二	五十一	五十	四十九	四十八	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三	四十二	四十一	四十	三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	三十二	三十一	三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	日	赤緯北三度
										<p>○季春太陽小批日。清明卯六</p> <p>日赤緯北六度</p>																																																																													
										<p>○太陰三月大批日亥六</p> <p>一、夜 癸卯 朔月午後七時</p> <p>二、夜 甲辰 朔月午後八時</p> <p>三、夜 乙巳</p> <p>四、夜 丙午</p> <p>五、夜 丁未</p> <p>六、夜 戊申</p>																																																																													
										<p>日赤緯北三度</p> <p>七、夜 己酉 上弦午後九時</p> <p>八、夜 庚戌</p> <p>九、夜 辛亥</p> <p>十、夜 壬子</p> <p>十一、夜 癸丑</p> <p>十二、夜 甲寅</p> <p>十三、夜 乙卯 月最盛午前一時</p> <p>十四、夜 丙辰</p> <p>十五、夜 丁巳</p> <p>十六、夜 戊午</p>																																																																													

百十六	百十五	百十四	百十三	百十二	百十一	百十	百九	百八	百七	百六	百五	百四	百三	百二	百一	百	九十九	九十八	九十七	九十六	九十五	九十四	九十三	九十二	九十一	九十	八十九	八十八	八十七	八十六	八十五	八十四	八十三	八十二	八十一	八十	七十九	七十八	七十七	七十六	七十五	七十四	七十三	七十二	七十一	七十	六十九	六十八	六十七	六十六	六十五	六十四	六十三	六十二	六十一	六十	五十九	五十八	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十二	五十一	五十	四十九	四十八	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三	四十二	四十一	四十	三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	三十二	三十一	三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	日	赤緯北三度
										<p>○立夏太陽小批日。立夏申八</p> <p>日赤緯北六度</p>																																																																																																											
										<p>○太陰四月小批日巳八</p> <p>一、夜 癸卯 朔月午後七時</p> <p>二、夜 甲辰</p> <p>三、夜 乙巳</p> <p>四、夜 丙午</p> <p>五、夜 丁未</p> <p>六、夜 戊申</p>																																																																																																											
										<p>日赤緯北三度</p> <p>七、夜 己酉 上弦午後九時</p> <p>八、夜 庚戌</p> <p>九、夜 辛亥</p> <p>十、夜 壬子</p> <p>十一、夜 癸丑</p> <p>十二、夜 甲寅</p> <p>十三、夜 乙卯 月最盛午前一時</p> <p>十四、夜 丙辰</p> <p>十五、夜 丁巳</p> <p>十六、夜 戊午</p>																																																																																																											

節氣月建

熱四條

節氣月建

百三十一	百三十二	百三十三	百三十四	百三十五	百三十六	百三十七	百三十八	百三十九	百四十	百四十一	百四十二	百四十三	百四十四	百四十五	百四十六	百四十七	百四十八	百四十九	百五十
八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月
入梅							夏至												
三夜	二夜	一夜	三夜	二夜	一夜	八夜	七夜	六夜	五夜	四夜	三夜	二夜	一夜	九夜	八夜	七夜	六夜	五夜	四夜
癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲辰
新月午後四時十一分							上弦午前四時	滿月午前四時											

節氣月建

大暑

節氣月建

百五十一	百五十二	百五十三	百五十四	百五十五	百五十六	百五十七	百五十八	百五十九	百六十	百六十一	百六十二	百六十三	百六十四	百六十五	百六十六	百六十七	百六十八	百六十九	百七十
八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月
三夜	二夜	一夜	三夜	二夜	一夜	九夜	八夜	七夜	六夜	五夜	四夜	三夜	二夜	一夜	十夜	九夜	八夜	七夜	六夜
癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲辰
															上弦午前四時	滿月午前二時			

大波

百九十九	百九十八	百九十七	百九十六	百九十五	百九十四	百九十三	百九十二	百九十一	百九十	百八十九	百八十八	百八十七	百八十六	百八十五	百八十四	百八十三	百八十二	百八十一
十六日	十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	三十日	二十九日	十八日
避暑 卯四 日赤緯北十度										○孟秋太陽小地日 ○立秋子五								
十九夜 辛未	十八夜 壬申	十七夜 癸酉	十六夜 甲戌	十五夜 乙亥	十四夜 丙子	十三夜 丁丑	十二夜 戊寅	十一夜 己卯	十夜 庚辰	九夜 辛巳	八夜 壬午	七夜 癸未	六夜 甲申	五夜 乙酉	四夜 丙戌	三夜 丁亥	二夜 戊子	一夜 己丑
下弦午後二時		月最北午後九時	滿月午後十時								月最南午後十時							下弦午前八時

秋分

秋分

秋分

二百九十九	二百九十八	二百九十七	二百九十六	二百九十五	二百九十四	二百九十三	二百九十二	二百九十一	二百九十	二百八十九	二百八十八	二百八十七	二百八十六	二百八十五	二百八十四	二百八十三	二百八十二	二百八十一
十六日	十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	三十日	二十九日	十八日
秋分 申四 日赤緯北十度										○仲秋太陽小地日 ○白露子七								
十一夜 辛巳	十夜 庚辰	九夜 己卯	八夜 戊寅	七夜 丁丑	六夜 丙子	五夜 乙亥	四夜 甲戌	三夜 癸酉	二夜 壬申	一夜 辛未	廿九夜 庚午	廿八夜 己巳	廿七夜 戊辰	廿六夜 丁卯	廿五夜 丙寅	廿四夜 乙丑	廿三夜 甲子	廿二夜 癸亥
		上弦午前八時								新月午前二時十九分								

二七四四ノ二

(表紙)
改正旧曆草稿中策

旧曆

凡例

一 皇國ニ固有曆法アレトモ之ヲ用キスシテ従前ノ旧曆ヲ用ウルトナラハ、如此作ラム故ニ忌諱ヲ憚ラスシテ仮リニ記ス、

一 改曆ニ一月二月トアルハ、西洋ニテハ順番ノコトニテ、一番二番ト云ガ如シトカヤ、一月ヲジヤニユエリト云、二月ヲヘブリユエリト云、三月ヲマアチト云、四月ヲエプリルト云、五月ヲメイト云、六月ヲジユント云、七月ヲジユライト云、八月ヲアウグストト云、九月ヲセプテンバト云、十月ヲヤクトヲハト云、十一月ヲノベンハト云、十二月ヲヂセンバト云、其一月二月ノ月

ハ大空ニ見ユル月ノコトニハ非スト云リ、仍テ太陰ニマガヒテ人民惑乱スル種トナレハ捨テ取ラサルナリ、吾皇國ノ月ノコトハ下ニ云ベシ、

一 改曆ナル一月二月ト云ニ付テ弁アリ、抑一日ト云ハ万国共ニ日出ルヨリ日入ルニ至ル迄ノ来経ヲ云、一夜トハ日没ヨリ翌日ノ日出ル迄ノ時刻ヲ云、カクテ一月トハ大空ニ月ノ見レ初テ遂ヒニ満月トナリ、漸々ニ影ホソリ、暁ニ亦弦ノ如クナリテ又初ノ如クナル迄ノ日数ヲハ二十九日ニ、マレ三十日ニマレ、之ヲ一月ト云、一年トハ草木ノ芽タチ初^{ツメ}テ枝葉繁茂シ、又草木ノ色付テ落葉スルガ、其間ノ日数或ハ暑ク或ハ寒ク成リテ、又初メニ復ル迄ノ日数凡十二箇月ノ程ヲ一年ト云、コレ一日一夜一月一年ト云コトノ大略ナリ、然ルヲ改曆面ニ一月二月ト云月ハ大空ノ月ノコトニハ非スシテ、月ト云文字ヲ当タルハ何事ゾヤ、譬ヘハ一日一夜ト云詞ニ昼夜ニ關係ナキ文字ナリト云ト雖モ予ハ信セズ、一曆面ニ上中下ノ三段ヲ分チ、上段ヲ以テ一年ノ日数三

百六十五日ナルコトヲ示シテ、立春ヨリ光陰ノ立ツコト幾日ニ成レリト云コトヲ知ラシメ、中段ハ太陽曆ナレハ一日二日ト記スベキコトナレトモ、下段二一日二日トアルニ迷ハシケレバ、文字ヲ替ヘテ一周二周ト書シ、次第二一点ヲ用キタリ、サテ太陽曆ニハ大ヲ三十一日トシ、最大ヲ三十二日トス、小ヲ三十日トシ最小ヲ二十九日トス、仍テ地球ノ遊旋墮円ナルコトヲ知ラシメ、四年二一日ノ閏日ヲ置クベシ、下段ハ太陽曆ニシテ従前ノ曆法ナリ、朔日二日ト記スハ慣習ヲ其儘ニ用キテ人民ノ日用ヲナス、サテ小ノ月ハ二十九日トシ、大ノ月ハ三十日トス、最下段ニ幹支ヲ置クハ上中下ノ三段ニ通用スルナリ、

一日蝕ハ太陽曆ニ出シ、月蝕ハ太陰曆ニ出セリ、

一八十八夜二百十日ノ一日違ヘルカ如クナルハ、立春ノ日ノ前日ニ四分ノ一掛レバナリ、

一改曆面ニ七曜ノ日トシテ日月火水木金土ノ日ヲ出セレド、所謂白日黒日ヲ云ト同日ノ論ニテ、人民無用ノ冗

物ナレバ捨テ取ラズ、

一太陽曆二日出何時分日入何時分ト云ハ改曆法二任ス、

一太陰曆ニ新月満月或ハ最高最卑ノ刻分ヲ出スモ亦改曆法二任ス、

一皇祖御歴代ノ御祭日ハ四季ノ国忌日ニ纏メテ祭奠アルベシ、皇曾祖以下ノ御三代及皇后皇子ノ国忌ハ正シク真曆ヲ用ベシ、

一農ハ天下ノ大本ナリ、天照大神人民ノ食物衣類ヲ優カニセムコトヲ思召ル、極メテ篤ク、豊受姫ノナセル穀物蚕桑ヲ御自身耕作シ賜ヒシヨリ農業肇興シ、其後大國主神少名持神ト戮力シテ国土ヲ開キ賜ヒ、其後神武天皇建寅ノ月ヲ以テ正月トナシ賜ヒシヨリ、開化・崇神・垂仁ノ諸帝殊更ニ農政ヲ励ミ賜ヒ、皇子大臣等ヲ國々ニ遣ハサレテ、遍ク田畑ヲ開カセ、所々ニ堤防ヲ築キ溝洫ヲ通シ百姓ニ便ナラシメ賜フハ、其土地寒暑ノ強弱ヲ審カニシ、其氣候ニ合慮スル五穀ヲ植テ繁栄、

豊熟ノ功ヲ充盈セシムルノ法ナリ、往昔支那ニシテ唐堯ノ時ニ義和ノ四人ヲ四方ノ偏土ニ分宅セシメ、氣候寒暖ノ強弱ヲ審カニ驗シ、作物ヲシテ寒暑強弱ノ大過ト不及トニ依リテ損傷スルコト無ラシメ、百姓二人時ヲ授テ以テ農政ニ精密ヲ尽セルハ、実ニ天地ヲ崇敬シ、人民ヲ愛育スルノ大事ニシテ王者ノ要務ナレバナリ、一天下ノ人民ハ天皇ノ勸慮ヲ心トシテ太陽太陰ノ兩曆ニ随ヒ、立春ヲ以テ年初トナシ、建寅ノ月ヲ以テ正月トシテ一歳ノ農政ヲ大成ス、故ニ代々ノ天皇等モ亦人民ハ国家ノ基ニシテ、農業ハ政事ノ本ナルコトヲ察シ、至誠懇到ヲ尽シテ天下ノ蒼生ヲ蕃息セシメムコトヲ欲シ、慎テ人時ヲ授ケ賜ヘリ、仍テ立春ヨリ八十八夜ニシテ穀ノ種ヲ播シ、或ハ二十日ニシテ是ヲ墾殖初ム、故ニコノ月ノ号ヲ植月ト云、引続キテ百姓田作ルニ勞スル月ナルヲ以テ田月ト云、カクテ早稲タルモノハ七月ニ花サク、故ニ此月ヲ含月ト云、或ハ中稻ハ八月ニ熟ス、仍テ此月ヲ穗熟月ト云、其晚稻タルモノハ十月

ニシテ成熟ス、故ニ此月ヲ稻刈月ト云、而シテ田面ニ後作ヲ営ミ、麦豆ヲ植ウ、田租ヲ納ルニ至テハ、或ハ稻コギ或ハ臼スリ繁勞極テ盛ナリ、年貢ヲ皆済スルハ為竟月ニ非レバ能ハズ、コレ公法ナリ、カクテ私情ニシテハ来年ヲ待ツノ営ミヲナシ、自主自由ノ權ヲ得テ安然トシテ家政ヲ大成ス、此ニ於テ年初メテ暮ルカク洋僻曆ノ如キハ、農政未ダ治ラスシテ年来ル故ニ、皇國慣習ノ本業ヲ害シ人民ニ益ナシ、

一神武天皇紀元以來建寅ノ月ヲ以テ正月トナシ、民ニ時ヲ授ケ賜フ、確証トスベキハ周天三百六十五日ヲ以テ一年ト云モ、穀ヲ以テ号タルナリ稔歲皆、抑正月ト云ハ萌月ニテ木草ノ萌始ル義ナリ、二月ト云ハ芽更月ニテ芽ノ更ニ盛ナル義ナリ、三月ハ弥生ニテ草木ノ弥益ニ生茂ル月ノ義ナリ、四月ハ殖月ニテ稻ヲ殖ル月ノ義ナリ、五月ハ田月ニテ田作りニ勞ク月ノ義ナリ、田乙女ヲサヲトメト云ヒ田、六月ハ実成月ニテ木ノ実ノ成開キヲサヒラキト云例ナリ、七月ハ含ミ月ニテ稻穂ノ含マル月ノ義ナリ、

ハツキ
八月ハ穗熟月ニテ稻穂ノ熟ラム月ノ義ナリ、^{ナガ}九月ハ稻刈月ニテ稻ヲ取り収ムル月ノ義ナリ、^{カムナシキ}十月ハ枯無月ニテ木草トモニ枯彫ム月ノ義ナリ、^{シモツキ}十一月ハ縮月ニテ稻ハ更ナリ、木草ノ実モ皆取り縮ル月ノ義ナリ、^{シハス}十二月ハ為竟ニテ一年ノ事ヲ皆為竟ル月ノ義ナリ、コレ民時ヲ授ケ賜ヘル月号ナレバ、百姓日用ノ実ニシテ、強ヘカラザル太陰曆ノ名義ナリ、

一夫レ生命ハ天ヨリ之ヲ各人ニ賦与シ、各人生来固有セルモノナリ、仍テ母胎ニ宿リテ微動スレハ、即チ己ニ其生命ヲ稟享セリ、故ニ欲スル所生ヨリ甚キハナク、悪ム所死ヨリ甚キモノナシ、サレハ孕婦其胎子ヲ毒刺シ、或ハ他ヨリ孕婦ヲ毆打シ、之ニ因テ其胎子ヲ殺死スレバ、即チ之ヲ重罪トスルハ何ゾヤ、抑天地ノ至理ニ基キ、天賜自由ノ權ニ於テハ生命ヲ以テ最大貴重トスレバナリ、然ルヲ曆日ノ施ス処ニ因テ害ヲナシ、之ガ為ニ生命ヲ海上ニ失フ者数ヲ知ラズ、嗚呼曆日ヲ以テ民ニ時ヲ授ルニ非ルモ尚可ナリ、改曆ニ因テ億兆ノ

人民之ガ為ニ束縛セラレ、到底生命ヲ害セラル、ニ至テハ歎セサル可ムヤ、

一潮汐八月ニ從フモノナレバ、人民月ヲ見テ潮ノ差引ヲ悟リ、或ハ何月幾日ナリト云ヲ聞ケバ、忽チ二四分増ノ法ヲ以テ潮時ヲ悟リ、海上ヲ安逸ニ渡世ス、然ルヲ改曆ナル何月一日ト云ニ満月ナルコトアリ、何月十五日ト云ニ闇夜ナルコトアリ、或ハ旧曆ト全ク同格ナルコトアリ、コノ錯綜アルニ因テ、害ヲナシ群愚ノ船人海上ニ落命スル者其数ヲ知ラズ、サルヲ強チニ改曆ヲ与ヘ、文盲ノ漁夫船人ニ闇誦セシメ、或ハ耳ヲ提テ洋僻ヲ説得セムヨリハ、神武天皇ノ紀元ニ從ヒ建寅ノ月ヲ以テ正月トナシ、天道地理ニ合応セル自然ニ隨ヒ、太陰曆ヲ示シテ人民自由ノ權ニ任セムトス、

一今ヤ改曆面ニ潮汐ノ時ヲ知ラシムルガ為ニ表ヲ作り、或ハ新月満月二月ノ形ヲアラハシテ、之ヲ人民ニ授クルナト云ハ僻説ナリ、

一国体ヲ変スルト云ハ、他ノ屬国トナルカ、或ハ外国ノ

正朔ヲ奉スルカニ在リ、サルヲ皇國獨立ノ名アリテ、
 他ノ正朔ヲ奉スルニ似タルハ何コトゾ、曆面モ亦獨立
 ノ体裁ヲナスヘシ、

皇曆 權少教正論田元綱性謹記		明治七年甲戌		本曆曆年五月廿四日 壬辰大前廿五日 壬辰大前廿七日 壬辰大前廿九日 壬辰大前三十日 壬辰大前三十一日 壬辰大前三十二日 壬辰大前三十三日		太陰曆年十二月廿四日 壬辰大前廿七日 壬辰大前廿九日 壬辰大前三十日 壬辰大前三十一日 壬辰大前三十二日 壬辰大前三十三日		四月料 元朔祭		祀元朔 祀元朔		祀元朔 祀元朔		祀元朔 祀元朔		祀元朔 祀元朔		祀元朔 祀元朔		祀元朔 祀元朔										
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三
八	七	六	五	四	三	二	一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三

明治八年 (1875)

春分節		春分節		春分節		春分節		春分節		春分節		春分節		春分節	
日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時
四十六日	十六時	四十八日	十七時	四十九日	十八時	五十一日	二十時	五十二日	二十一時	五十三日	二十二時	五十四日	二十三時	五十五日	二十四時
春分前晴全至秒															
十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰
二月十九日															
廿五日	亥酉	廿七日	酉未	廿九日	未巳	三十日	巳卯	三十一日	卯丑	初一日	丑癸	初二日	癸酉	初三日	酉未
春分節															
廿一日	亥酉	廿二日	酉未	廿三日	未巳	廿四日	巳卯	廿五日	卯丑	廿六日	丑癸	廿七日	癸酉	廿八日	酉未
春分後晴全至秒															
廿九日	未巳	三十日	巳卯	初一日	卯丑	初二日	癸酉	初三日	酉未	初四日	未巳	初五日	巳卯	初六日	卯丑
春分節															
廿九日	未巳	三十日	巳卯	初一日	卯丑	初二日	癸酉	初三日	酉未	初四日	未巳	初五日	巳卯	初六日	卯丑

秋分節		秋分節		秋分節		秋分節		秋分節		秋分節		秋分節		秋分節	
日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時
七十六日	十六時	七十七日	十七時	七十八日	十八時	七十九日	十九時	八十一日	二十一時	八十二日	二十二時	八十三日	二十三時	八十四日	二十四時
秋分後晴全至秒															
十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰	十五日	酉辰
三月廿九日															
廿九日	未巳	三十日	巳卯	初一日	卯丑	初二日	癸酉	初三日	酉未	初四日	未巳	初五日	巳卯	初六日	卯丑
秋分節															
廿九日	未巳	三十日	巳卯	初一日	卯丑	初二日	癸酉	初三日	酉未	初四日	未巳	初五日	巳卯	初六日	卯丑

三百三十八日	二			十二月十九日	庚午	新月午前二時五分
三百三十九日	三			一日	辛未	
三百四十日	四			二日	壬申	
三百四十一日	五			三日	癸酉	
三百四十二日	六			四日	甲戌	
三百四十三日	七			五日	乙亥	
三百四十四日	八			六日	丙子	
三百四十五日	九			七日	丁丑	
三百四十六日	十			八日	戊寅	
三百四十七日	十一			九日	己卯	
三百四十八日	十二			十日	庚辰	
三百四十九日	十三			十一日	辛巳	
三百五十日	十四			十二日	壬午	
三百五十一日	十五			十三日	癸未	
三百五十二日	十六			十四日	甲申	
三百五十三日	十七			十五日	乙酉	
三百五十四日	十八			十六日	丙戌	
三百五十五日	十九			十七日	丁亥	
三百五十六日	二十			十八日	戊子	
三百五十七日	廿一			十九日	己丑	
三百五十八日	廿二			二十日	庚寅	
三百五十九日	廿三			廿一日	辛卯	
三百六十日	廿四			廿二日	壬辰	
三百六十一日	廿五			廿三日	癸巳	
三百六十二日	廿六			廿四日	甲午	
三百六十三日	廿七			廿五日	乙未	
三百六十四日	廿八			廿六日	丙申	
三百六十五日	廿九			廿七日	丁酉	
三百六十六日	三十			廿八日	戊戌	
三百六十七日	三十一			廿九日	己亥	
三百六十八日	三十二			三十日	庚子	
三百六十九日	三十三			三十一日	辛丑	
三百七十日	三十四			十二月	壬寅	
三百七十一日	三十五			元旦	癸卯	
三百七十二日	三十六			二日	甲辰	
三百七十三日	三十七			三日	乙巳	
三百七十四日	三十八			四日	丙午	
三百七十五日	三十九			五日	丁未	
三百七十六日	四十			六日	戊申	
三百七十七日	四十一			七日	己酉	
三百七十八日	四十二			八日	庚戌	
三百七十九日	四十三			九日	辛亥	
三百八十日	四十四			十日	壬戌	
三百八十一日	四十五			十一日	癸亥	
三百八十二日	四十六			十二日	甲子	
三百八十三日	四十七			十三日	乙丑	
三百八十四日	四十八			十四日	丙寅	
三百八十五日	四十九			十五日	丁卯	
三百八十六日	五十			十六日	戊辰	
三百八十七日	五十一			十七日	己巳	
三百八十八日	五十二			十八日	庚午	
三百八十九日	五十三			十九日	辛未	
三百九十日	五十四			二十日	壬申	
三百九十一日	五十五			廿一日	癸酉	
三百九十二日	五十六			廿二日	甲戌	
三百九十三日	五十七			廿三日	乙亥	
三百九十四日	五十八			廿四日	丙子	
三百九十五日	五十九			廿五日	丁丑	
三百九十六日	六十			廿六日	戊寅	
三百九十七日	六十一			廿七日	己卯	
三百九十八日	六十二			廿八日	庚辰	
三百九十九日	六十三			廿九日	辛巳	
四百日	六十四			三十日	壬午	

冊子原寸 縦二八種 横二三種 二〇枚

二七四〇三

(表紙)
「旧曆変格改正下策」

旧曆変格

凡例

一先キニ皇国固有曆及旧曆正格ヲ作り、忌諱ヲ憚ラスシテ之ヲ記シツ、サレトモ尚再按シテ変格ヲ作り人民ノ為ニ心ヲ配ル事左ノ如シ、

一曆法ノ古義ハモト天常ヲ論シ、長久ヲ記ス所以ナリ、カクテ神武天皇建寅ノ月ヲ以正月トシ玉ヒ、民ニ時ヲ授ケ玉ヒシヨリ、今ヤ二千五百三十三年相統セリ、然ルヲ明治六年十二月三日ヲ以テ改曆シ玉シヨリ、人民時ヲ失ヒ家業ヲ過チ、生命ヲ死亡スル者少シトセズ、故ニ今又之ヲ改曆シテ、神武天皇元年紀元節ヲ以一月一日トナシ、所謂洋僻ノジヤニユエリ、ヘフリユエリ

等ノ名義ヲ用ヒ、曆面ヲ作ルコト左ノ如シ、是ハ止事
 ヲ得ザルノ策ニシテ、人民惑乱ヲ保護スル迄ノ意ナリ、
 一地球上ニ曆日ノ異ナルモノ少シトセズ、支那ハ皇國ト
 同シク建寅月ヲ以シ、魯細亞ハ西洋曆ニ近ケレトモ土
 日ヲ異ニセリ、其他天竺曆・フイノ曆・エゾ曆等暑
 寒ノ強弱ニヨリテ、其民其土地ニ慣習シ家業ヲ修ムル
 ハ、公法ナリト知ルベシ、

舊曆		明治七年甲戌		○太陽曆年三百六十五日四分一		○太陰曆年三百五十四日	
權少教正三輪臣元綱謹記		一年日數		シヤエリ大三十日			
一 日		一 日		一 日		廿五日己亥	
二 日		二 日		二 日		廿六日庚子	
三 日		三 日		三 日		廿七日辛丑	
四 日		四 日		四 日		廿八日壬寅	
五 日		五 日		五 日		廿九日癸卯	
六 日		六 日		六 日		三十日甲辰	
元始祭		元始祭		元始祭		正月小九日	
紀元節		紀元節		紀元節		一日乙巳 新月午前四時五分	
八 日		七 日		七 日		二日丙午 月最午前十時	
九 日		八 日		八 日		三日丁未	
仁孝天皇		雨水午前四時七分四十秒		四日戊申		四日己酉 日出午前六時三十三分三十秒	
十一日		十一日		十一日		五日庚戌	
十二日		十二日		十二日		六日辛亥 上弦午後八時五分	
十三日		十三日		十三日		七日壬子	
十四日		十四日		十四日		八日癸丑	
十五日		十五日		十五日		九日甲寅	
十六日		十六日		十六日		十日乙卯	
十七日		十七日		十七日		十一日丙辰	
十八日		十八日		十八日		十二日丁巳	
十九日		十九日		十九日		十三日戊午 滿月午後二時四十分	
二十日		二十日		二十日		十四日己未	
廿一日		廿一日		廿一日		十五日庚申 月最午後五時	
廿二日		廿二日		廿二日		十六日辛酉	
廿三日		廿三日		廿三日		十七日壬戌	
出雲祭		出雲祭		出雲祭			

明治八年 (1875)

百八十一日	未二、	月念六分	日出午前四時三十分
百八十二日	未三、	朔月午正前一時九分六秒	
百八十三日	未四、	十八日庚申	
百八十四日	未五、	二十日壬戌	
百八十五日	未六、	廿一日癸亥	
百八十六日	未七、	廿二日甲子	
百八十七日	未八、	廿三日乙丑	
百八十八日	未九、	廿四日丙寅	下弦午後四時十分
百八十九日	未十、	廿五日丁卯	
百九十日	未十一、	廿六日戊辰	
百九十一日	未十二、	廿七日己巳	
百九十二日	未十三、	廿八日庚午	
百九十三日	未十四、	廿九日辛未	月最午前四時
百九十四日	未十五、	四月小廿九日	
百九十五日	未十六、	一日癸酉	朔月午前四時十六分
百九十六日	未十七、	二日甲戌	
百九十七日	未十八、	三日乙亥	
百九十八日	未十九、	四日丙子	
百九十九日	未二十、	五日丁丑	
百一百日	未二十一、	六日戊寅	
百一百一日	未二十二、	七日庚辰	上弦午後四時五分
百一百二日	未二十三、	八日辛巳	
百一百三日	未二十四、	九日壬午	
百一百四日	未二十五、	十日癸未	月最午後四時
百一百五日	未二十六、	十一日甲申	
百一百六日	未二十七、	十二日乙酉	
百一百七日	未二十八、	十三日丙戌	
百一百八日	未二十九、	十四日丁亥	
百一百九日	未三十、	十五日戊子	

百九十九日	十九、	十五日丁亥	滿月午後四時五分
百一百日	二十、	十六日戊子	
百一百一日	廿一、	十七日己丑	
百一百二日	廿二、	十八日庚寅	
百一百三日	廿三、	十九日辛卯	
百一百四日	廿四、	二十日壬辰	
百一百五日	廿五、	廿一日癸巳	
百一百六日	廿六、	廿二日甲午	
百一百七日	廿七、	廿三日乙未	下弦午後四時五分
百一百八日	廿八、	廿四日丙申	
百一百九日	廿九、	廿五日丁酉	
百一百日	三十、	廿六日戊戌	
百一百一十一日	三十一、	廿七日己亥	月最午前四時
百一百一十二日	三十二、	廿八日庚子	
百一百一十三日	三十三、	廿九日辛丑	
百一百一十四日	三十四、	三十日壬寅	
百一百一十五日	三十五、	五月大廿九日	
百一百一十六日	三十六、	一日癸卯	朔月午後四時十分
百一百一十七日	三十七、	二日甲辰	
百一百一十八日	三十八、	三日乙巳	
百一百一十九日	三十九、	四日丙午	
百一百二十日	四十、	五日丁未	
百一百二十一日	四十一、	六日戊申	
百一百二十二日	四十二、	七日己酉	
百一百二十三日	四十三、	八日庚戌	上弦午前四時五分
百一百二十四日	四十四、	九日辛亥	
百一百二十五日	四十五、	十日壬子	
百一百二十六日	四十六、	十一日癸丑	月最午前四時
百一百二十七日	四十七、	十二日甲寅	
百一百二十八日	四十八、	十三日乙卯	
百一百二十九日	四十九、	十四日丙辰	
百一百三十日	五十、	十五日丁巳	

百六十九日	十九日	十六日	丁巳	朔月午前四時七分
百六十八日	二十日	十七日	戊午	
百六十七日	廿一日	十八日	己未	半夏生
百六十六日	廿二日	十九日	庚申	日最高午前七時
百六十五日	廿三日	二十日	辛酉	
百六十四日	廿四日	二十一日	壬戌	日最高午前七時
百六十三日	廿五日	二十二日	癸亥	
百六十二日	廿六日	二十三日	甲子	日最高午前七時
百六十一日	廿七日	二十四日	乙丑	
百六十日	廿八日	二十五日	丙寅	日最高午前七時
百五十九日	廿九日	二十六日	丁卯	
百五十八日	三十日	二十七日	戊辰	日最高午前七時
百五十七日	三十一日	二十八日	己巳	
百五十六日	一	二十九日	庚午	日最高午前七時
百五十五日	二	三十日	辛未	

百八十三日	二日	辛丑	朔月午後一時十九分
百八十二日	三日	壬寅	
百八十一日	四日	癸卯	日最高午後四時
百八十日	五日	甲辰	
百七十九日	六日	乙巳	日最高午後四時
百七十八日	七日	丙午	
百七十七日	八日	丁未	日最高午後四時
百七十六日	九日	戊申	
百七十五日	十日	己酉	日最高午後四時
百七十四日	十一日	庚戌	
百七十三日	十二日	辛亥	日最高午後四時
百七十二日	十三日	壬子	
百七十一日	十四日	癸丑	日最高午後四時
百七十日	十五日	甲寅	
百六十九日	十六日	乙卯	日最高午後四時
百六十八日	十七日	丙辰	
百六十七日	十八日	丁巳	日最高午後四時
百六十六日	十九日	戊午	
百六十五日	二十日	己未	日最高午後四時
百六十四日	廿一日	庚申	
百六十三日	廿二日	辛酉	日最高午後四時
百六十二日	廿三日	壬戌	
百六十一日	廿四日	癸亥	日最高午後四時
百六十日	廿五日	甲子	
百五十九日	廿六日	乙丑	日最高午後四時
百五十八日	廿七日	丙寅	
百五十七日	廿八日	丁卯	日最高午後四時
百五十六日	廿九日	戊辰	
百五十五日	三十日	己巳	日最高午後四時
百五十四日	三十一日	庚午	
百五十三日	一	辛未	日最高午後四時

大槓

天長節

二百六十二日	十九日	十一月廿一日	庚午	日出午前七時三十分
二百六十三日	二十日	十一月廿一日	辛未	日出午前七時三十分
二百六十四日	二十一日	十一月廿一日	壬申	日出午前七時三十分
二百六十五日	二十二日	十一月廿一日	癸酉	日出午前七時三十分
二百六十六日	二十三日	十一月廿一日	甲戌	日出午前七時三十分
二百六十七日	二十四日	十一月廿一日	乙亥	日出午前七時三十分
二百六十八日	二十五日	十一月廿一日	丙子	日出午前七時三十分
二百六十九日	二十六日	十一月廿一日	丁丑	日出午前七時三十分
二百七十日	二十七日	十一月廿一日	戊寅	日出午前七時三十分

イクトノハ六十三日

二百七十二日	十一月廿九日	十一月廿九日	庚午	日出午前六時三十分
二百七十三日	十二月一日	十一月廿九日	辛未	日出午後五時三十分
二百七十四日	十二月二日	十一月廿九日	壬申	日出午後五時三十分
二百七十五日	十二月三日	十一月廿九日	癸酉	日出午後五時三十分
二百七十六日	十二月四日	十一月廿九日	甲戌	日出午後五時三十分
二百七十七日	十二月五日	十一月廿九日	乙亥	日出午後五時三十分
二百七十八日	十二月六日	十一月廿九日	丙子	日出午後五時三十分
二百七十九日	十二月七日	十一月廿九日	丁丑	日出午後五時三十分
二百八十日	十二月八日	十一月廿九日	戊寅	日出午後五時三十分
二百八十一日	十二月九日	十一月廿九日	己卯	日出午後五時三十分
二百八十二日	十二月十日	十一月廿九日	庚辰	日出午後五時三十分
二百八十三日	十二月十一日	十一月廿九日	辛巳	日出午後五時三十分
二百八十四日	十二月十二日	十一月廿九日	壬午	日出午後五時三十分
二百八十五日	十二月十三日	十一月廿九日	癸未	日出午後五時三十分

神嘗祭

二百八十六日	十二月十四日	十二月十四日	甲申	日出午前七時三十分
二百八十七日	十二月十五日	十二月十四日	乙酉	日出午前七時三十分
二百八十八日	十二月十六日	十二月十四日	丙戌	日出午前七時三十分
二百八十九日	十二月十七日	十二月十四日	丁亥	日出午前七時三十分
二百九十日	十二月十八日	十二月十四日	戊子	日出午前七時三十分
二百九十一日	十二月十九日	十二月十四日	己丑	日出午前七時三十分

神嘗次祭

二百九十二日	十二月十九日	十二月十九日	十一月廿一日	庚午	日出午前七時三十分
二百九十三日	十二月二十日	十二月十九日	十一月廿一日	辛未	日出午前七時三十分
二百九十四日	十二月二十一日	十二月十九日	十一月廿一日	壬申	日出午前七時三十分
二百九十五日	十二月二十二日	十二月十九日	十一月廿一日	癸酉	日出午前七時三十分
二百九十六日	十二月二十三日	十二月十九日	十一月廿一日	甲戌	日出午前七時三十分
二百九十七日	十二月二十四日	十二月十九日	十一月廿一日	乙亥	日出午前七時三十分
二百九十八日	十二月二十五日	十二月十九日	十一月廿一日	丙子	日出午前七時三十分
二百九十九日	十二月二十六日	十二月十九日	十一月廿一日	丁丑	日出午前七時三十分
三百日	十二月二十七日	十二月十九日	十一月廿一日	戊寅	日出午前七時三十分

大雪午後二時五十分七分七秒

三百一日	十二月二十八日	十二月十九日	十一月廿一日	己卯	日出午前七時三十分
三百二日	十二月二十九日	十二月十九日	十一月廿一日	庚辰	日出午前七時三十分
三百三日	十二月三十日	十二月十九日	十一月廿一日	辛巳	日出午前七時三十分
三百四日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	壬午	日出午前七時三十分
三百五日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	癸未	日出午前七時三十分
三百六日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	甲申	日出午前七時三十分
三百七日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	乙酉	日出午前七時三十分
三百八日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	丙戌	日出午前七時三十分
三百九日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	丁亥	日出午前七時三十分
四百日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	戊子	日出午前七時三十分

北極天皇

イハハ小三十日

三百五十一日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	己卯	日出午前七時三十分
三百五十二日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	庚辰	日出午前七時三十分
三百五十三日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	辛巳	日出午前七時三十分
三百五十四日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	壬午	日出午前七時三十分
三百五十五日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	癸未	日出午前七時三十分
三百五十六日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	甲申	日出午前七時三十分
三百五十七日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	乙酉	日出午前七時三十分
三百五十八日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	丙戌	日出午前七時三十分
三百五十九日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	丁亥	日出午前七時三十分
三百六十日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	戊子	日出午前七時三十分

冬至

三百六十一日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	己卯	日出午前七時三十分
三百六十二日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	庚辰	日出午前七時三十分
三百六十三日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	辛巳	日出午前七時三十分
三百六十四日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	壬午	日出午前七時三十分
三百六十五日	十二月三十一日	十二月十九日	十一月廿一日	癸未	日出午前七時三十分

冊子原寸 縦二八種 封筒原寸 縦三七・五種

横三二種 一五枚 横一三・五種

三疊 久光公手控

日月雨雪等ノ熟語一冊

五十音ノ漢字及十八変筮共二枚

中川宮以下高官姓名書一枚

明治二年三月六日久光公官位任叙扣一枚

明治八年樺太其他經綸事業ノ件一枚

以上一冊ト五枚

二七四五ノ一

日・白日ハレタ 晴日同 旭日アサ 初日同 曉日 和日
ノドカ 風日 海日ウミノ 海暎同 沙日イサゴヲ 落日
イリ 斜日同 日影 日晴 日照 日上 日高 日斜
日沈 日晏アサノヲ 日華 日夕 午日ヒル 朝暉アサ
晴暉ハレタ 夕陽 斜陽 落暉 落暎 斜暉 斜暎 返
照 落照 残照 夕照 晚照 微陽ユフ 晨曦 朝暎

景日 太陽宗トク 衆陽長同 五色備同 四海明同 群

陰伏同 葵心傾

透樹 穿窗 竹映 長短 測景 倒影 步暑

隔簾 過隙 葵傾 輝光 惜陰 流光 寸陰

離透戸 重陰合 金波碎 節竹徑 下危簷

暈穿林 一片明 花影重 透書幃 浮曲沼

隨波上下

逐樹樞斜

月

明月 朗月 皎月 新月 望月 滿月 霽月 初月 夜
月 曉月 殘月 斜月 西月 落月 臘月 涼月 寒月
霜月 烟月 山月 江月 海月 浦月 汀月 林月 簷
月 窓月 織月 片月 欠月 璧月 松月 竹月 蘿月
夕月 月色 月影 月光 月華 月輪 月外 月上 月
出 月明 月高 月斜 月懸 月落 月吐 月湧 月脚
月殘 月迴 月橫 月弦 月下 月中 月午 月宮 微
月 彎月 鉤月 銀鉤 玉鉤 半輪 如鉤一彎 待月

漏·月·樓 湧·月·水 法·月·舟 步·月 踏·月 輪·未·滿

曲·如·鉤 初·滿·空 一·痕

新月

樓·外·怯·鉤·隱·々·勢·曲·纒·半·破·金·波·淺·欽·鏡·匣
天·辺·疑·弓·纖·々·形·彎·未·全·成·桂·影·偏·快·廉·鉤

如·璧·欠

似·眉·彎

殘·月

燭·滅·輪·虧·晨·起·光·晴·淡·々·氣·沈·景·淡·光·尚·在
睡·醒·鑑·欠·西·傾·影·斜·纖·々·輪·昇·光·微·色·猶·寒

光·漸·滅·沈·海·底·楊·柳·枝·頭
影·將·斜·上·雲·瑞·梧·桐·梢·上

月·影

池·塘·散·彩·入·簾·玉·彩·節·庭·竹·青·楓·外·光·含·宇·宙
庭·院·流·輝·穿·戶·金·波·映·檻·花·白·水·辺·色·界·寬·榻

皓·彩·臨·庭
清·光·入·戶

待·月

江·上·望·久·倚·檻·登·台·凝·情·極·月·秋·風·爽·滄·海·崎

欄·辺·吟·余·停·盃·携·酒·玳·立·傾·心·夜·眠·遲·碧·欄·干

憑·檻·久·出·霧·遲

賞·月

舉·盃·登·樓·星·稀·無·點·翳·無·雲·無·雨
捲·簾·泛·渚·雲·靜·有·余·清·如·雪·如·霜

步·月

徘徊·獨·步·顧·影·中·庭·踏·花·影·光·燭·衣·浥·々·爐·香
逸·遶·微·吟·褰·衣·皓·彩·步·廊·西·影·隨·人·離·々·花·影

雨

春·雨·秋·雨·朝·雨·暮·雨·夜·雨·驟·雨·涼·雨·寒·雨·宿
雨·山·雨·江·雨·烟·雨·度·雨·過·雨·沛·雨·陰·雨·積·雨
霖·雨·風·雨·小·雨·輕·雨·細·雨·甘·雨·織·雨·密·雨·微
雨·疎·雨·梅·雨·梅·霖·嬾·雨·帶·雨·引·雨·冒·雨
和·雨·經·雨·雨·聲·雨·色·雨·足·雨·中·雨·後·雨·痕

雨多 雨過 雨晴 雨洒 密酒 潤物 点滴 簷溜
 滴瀝 細滴 点注 経微 湿透 滴階 傾盆 入窓
 湿衣 染花 如糸 如膏ハルメ 高唐古事 陽台日
 霰ハクホク 好雨 瑞雨 白雨ユフタチ 淫霖 霖余 雨勢
 雨点 雨作 雨佳 雨宜 雨遠 雨香 雨遙ハラシカ 雨
 閑 雨迷 雨濃 雨垂 雨乱 雨打 雨敲 雨穿 雨沐
 浴 雨停 紛如織 細若糸 纒洒道 淡遮山 新流濁
 積絮濃 琴系緩 柱礎潤 鳩逐婦 螻蟻封 商羊舞 古事
 月離畢 同 山雲 救旱 翻盆 洗塵 破塊 入夜 沛然
 簷溜 及時 淋幔 添漲 寒声 通宵 俄爾
 霖霖 沾濡 蘇阜 密酒 隨風 淋漓 水鳥 屋漏
 空濛 潤沢 如膏 乱飄 潤物 点滴 久雨 泥蛙 垣頽
 傷稼 行潦 終月 肅々響 如坐井 厭塵雨 妨農作
 阻程 炊煙 経旬 滴々声 欲乘舟 望晴暉 阻客程
 夜階滴々 濑暑 迷空 盈潤 投燕 倒海 電影
 曉漏 滂々 驟雨 送涼 蔽野 噴山 墮蟬 傾河 雷声

失炎暑 昏宇宙 風動竹 風震湯 雲濃布 声何暴
 動高秋 打窓扉 雨敲窓 勢崢嶸 水迸流 勢甚壯
 疎鐘 夢短 野径 入枕 寒声 孤館 眈夢 和蝶蜂
 寒漏 更長 江船 滴階 爽氣 青灯 驚眠 打芭蕉
 山已黑 袞稠冷 涼生枕 驚好夢 三更雨 窓無月照
 酒初醒 割漏長 冷逼窓 感離想 一夜涼 壁有蛩鳴
 千里暮雲 竹窓瀝々 梅雨 如霧 黃熟 林陰 梅肥
 一灯孤館 茅舍凄々 如糸 紅肥 畦潤 礎潤
 細々 飛塵 梅黃 海霧連 山遠近 黃初熟 深連海
 冥々 散霧 草碧 夜声繁 樹高低 暝不問 近松簾
 潤從花上 一犁 蘇阜 冲雲 稱賀 救旱 相慶
 声向竹間 喜雨 万物 来鮮 沛雨 応祈 開顔 交歡
 潤物 時雨 皆潤沢 生悦気 蘇阜歲 禾苗秀
 知時 田家 頓清凉 起飲声 起枯苗 草木肥
 頓回春意 桑麻變々 江山霽色 孤館 孤寂
 新沐恩光 禾稼凡々 村落歡声 客中雨 征途 愁思
 荷節 对床 濡面 淹留 路何在 欺短笠 嗟去路
 敬枕 驚夢 停驂 展軫 馬不前 濕征衣 濺征衣

雪
 白雪 飛雪 飄雪 雨雪 初雪 新雪 急雪 積雪 深雪
 密雪 淡雪 風雪 山雪 曉雪 暮雪 寒雪 臙雪
 殘雪 晴雪 融雪 雪花 雪片 雪中

○笑他ワラフト云コトム 從任聽偷知謝憎
 泥一等賺誤思妬為勞憂愁嗟
 除頼怪嫌恐贖看

○聽得ハクナリル 料贏憶想買購待乞
 請記學染怪收拾挑驟頻忽
 直拋歸贖双併拈寫書画借
 輸了添留占認断釣獵換
 覓携奪強著免鍊繫生死載
 御薰吹吸剩贖分別惹引醫
 愈貌狀描知識催判抱診
 伝捉統守賦撰語論尋訪
 扶招啼遮承斫剪解會養

慰喚新旧粘粉特得更
 ○遮断 助語 占 吹埋望思把隔聞割
 鎖剪燃挽飛截判吟啼嘶飄
 腸断 夢目橋 以上断ノ
 字主トナル
 ○落尽 助語 断 流 消 占 飄 吹 啼 看 歡

春雪花 奥 主トナル
 啼破助字 枉 点 掃 舞 吹 印 書 画
 擊 勸 吟 照 識 更 剩 了 歷 警 消
 界 泣 読 看 耕
 采 聽 読 障 老 殺 見 淨 白 紅 綠
 費 添 餐 開 滴 劍 奪 送 著 撥

○從來来ハ助字 向 飛 飄 朝来夜 昨 宵 晨 夕
 晷 晚 寄 都 自 遠 近 醒 重 買
 因 病 別 孤 豪 早 爾 起 古 今 頻
 頃 由 坐 拈 本 元 旧 新 怪 春 夏
 秋 冬 歲 每 此 情 還 何 曾 以上舊来ノ字

○消却 却ノ字遺ス 除老洗間減忘掃意

○發換典壳看賽偷多披少漏

○拭燒失買拋埋脫破却墮卷謝

○占背爛拚飄黏頓執占倚

○睡著助字 憶問取黏頓執占倚

○依停沈道挽愛鎖多並問情說

○衝學揮敲耽題土地心

○陶然欣妻一寂蕭偶依悠冷飄淡

○凜愴忽宛肅繙蔚完劃適琅

○嶄巍蕪媽珊粲窠犁井滄沛

○疑莹鏗纈公端赫煥儼豁果

○杳斐慘塊倬油艷無懼浩湛

○喟慨坦丞穆澹醜徒斷了邊

○騫俄超傲俏筦賑恍瞥芒眩

○怡黯翻帖倒颯

○記取斷貌及志盛取借割喚謝書

○寫看聽惜副奪分帶認乞就留

○映拾携酌呼判侍抽占懷招

○愛一以上ミナ取ノ 零飄寥牢沈淪擊退

○揺落八助字 錯零飄寥牢沈淪擊退

○剝剪歴摧 以上落ノ 村里部 辺 篤 碧

○乞与 借寄留輸說嫁付聽分送

○訴一散 礙刺慰贈斷携一更与聊

○却一三好二重三且三絶三独三特三長

○笑殺ワラフ羞醉惱間愛誤娛愧吹渴

○思看愁恨払拜躑躅冰凍啼吟

○香清睡嫌羨憶驚忙 殺ハサイトヨ

文書原寸 縦二・八 横二六三 櫃

二七四五ノ二 阿伊有衣於

加幾久計古 左之須世曾

アイウエオ あいうえお
カキクケコ かきくけこ
サシスセソ さしすせそ

多知都天登

奈爾奴禰能

波比不返保

末美武米毛

耶以由盈余

良利留礼魯

和為于惠遠

ウキ クキ

ルキ ウキ

タチツテト

ナニヌネノ

ハヒフヘホ

マミムメモ

ヤイユエヨ

ラリルレロ

ワキウエヲ

ツキ

又キ

水

陸

又キ

フキ

ムキ

ユキ

十八麥筮

一五八八少陽 一九八四少陽 一九四八少陽

一五四四老陽

一五四八少陰 一九四四少陰 一五八四少陰

一九八八老陰

文書原寸 縦一六・八種 横二八・八種

縦 一七種 横 一一種

二七五ノ三

中川宮朝彦親王

前関白左大臣忠愍公

関白左大臣齐敬公

左大臣忠房卿

山階宮晃親王

一橋中納言慶喜卿

松平肥後守容保

長岡良之助護美細川越中守 會弟

近衛

二条

近

松平越前守慶永

松平下野守慶贊

池田從二位慶徳 大原從二位重徳

池田從三位茂政 松浦正四位詮

伊達從二位宗城

文書原寸 縦一五・七種 横二六・五種

二七四五ノ四

参議從三位兼行左近衛權中將大隅守源朝臣久光

明治二巳三月六日

任叙行年五十三

文書原寸 縦一九・七釐 横八・五釐

二七四五ノ五

皇国経綸事業之目的ヲ立、方略順序ヲ定ル事、

条約改定ノ事、

樺太島之事、

文書原寸 縦一六・八釐 横二二・四釐

三吳 楠本後覚ヨリ久光公ヘノ呈書

元老院ヘノ建白書及漢詩一首添

(包紙ウツ書)
「拝上」

旧平戸藩士族

楠本後覚

楠本後覚頓首頓首再拜、

恐ナカラ言上ス、臣本西海ノ微賤計ラス明藍ニ逢遇シ、
カヲ計ラス一分ノ丹心ヲ尽サントシ、数内閣諸公ニ建言
シ、公明正大真ノ聖賢ノ道ヲ天下ニ施行シ、閣下ノ元勳
大功ノ余力ヲ以テ宇内ノ蒼生ヲ活シ、彼外夷醜類ヲシテ
肝膽地ニ寒カラシメント欲ス、豈計ンヤ姦邪日ヲ蔽ヒ、
雲雨時ニ暗ク今日ノ挙動ニ至リ、閣下官ヲ免シ正義地ニ
沈ミ言フ可カラサルノ秋ニ至レリ、喆嘆長息モ亦余アリ
知ラス、以後如何ノ形勢ニ馴致スヘキカ、戦場ノ至ナリ、
臣客冬元老院ニ尚一言ヲ献ント別紙草稿成ル、随テ聞ク、
院中閉塞上言ヲ採ラスト、因テ丙丁ニ付ス、但シ
閣下ヲシテ其微衷ヲ知ラシメント欲シ、則 台覽ヲ供ス、
巴調一首并呈ス、幸ニ寸丹ヲ悉シ玉ヘ、天運循環事中止
スヘカラス、必ス 皇運拡張ノ期アルヘシ、仰乞フ、
台襟ヲ晦養シ玉ヘ、古語云、天道好還ト決テ虚言ニ非ス、
誠恐誠惶頓首頓首、

明治九年一月三日

楠本後覚再拜

前左大臣島津公閣下

奉呈

前左大臣島津公閣下

古来難獲濟 時才一旦奮

髯登上台弁 似奮夫欺世

甚忠如平勃 挽天回龍姿

本匪凡鱗伴 鳳德普為群

雀猜留寂精神 須事会廓清

寰宇照雲台

明治九年一月吉日

楠本後覺再拜

□^(朱)
□

文書原寸 縦三・五種

包紙原寸 縦二八種

横 一二種 三枚

横三五種

三宅 内田政風ヨリ法元太郎左衛門へ

金禄公債証書ノ件

(端裏付箋)
「明治九年頃カ」

御賞典禄配付之儀、

御沙汰之趣被為在形行可申上旨委細致拜承候、右は五ヶ

年分相屯候金高二相掛ル五部利銀ヲ三ツ割ニいたし、一

ツ分温故金、二ツ分ヲ県庁江振向候積ニ奈良原在県中粗

談合いたし置候、然処華族方御家禄等公債証書 朝廷江

御借入之儀、被変向相成候得は、亦何欵と可利銀相下候

哉之内評ニ同人より承候、左候得は御賞典禄ニ相掛右之

利足前件之三ツ割一より増金之積候間、之レヲ 此御方

江御請取三ツ割一分も県庁江遣候方、可然旨奈良原見込

二候、乍去いまた成立ニ不相成事候得は、内々決議いた

し兼候趣御答置候、右邊は 朝廷御決定之上旁相伺候合

二候、

右之通相答置候間、

御前向宜敷御披露可給候也、

一月十三日

内田政風

法元太郎左衛門殿

文書原寸 縦一七・五種 横六〇種

三六 三条太政大臣ヨリ木戸顧問へ

弥御清康大賀候、抑

皇政一新之義、素ヨリ元勳諸臣之尽力ニ依リ、今日之盛運ニ至候ハ不待論候、然処往々大臣中不凶之進退有之、実ニ

皇家之御不幸遺憾此事ニ候、然ルニ今般御英断ヲ以テ非常変革之際、両氏尽力遂戮力同心、前途弥根軸之地ニ立大任ヲ担当有之協議ニ至候事、誠 朝廷人民之為幸甚不可謂、於小官モ欣喜ニ不堪候、就テハ速ニ其職ニ可被仰付之処 行幸御発輦之期ニ迫リ、不得止還幸後直ニ可被仰付候、仍テハ愚衷ヲ述へ、両氏之承諾ヲ可承之処、昨今折悪ク病氣ニ付、昨日右大臣ヲ以テ申入候次第、何モ御承知有之候事と存候得共、為念此段一筆申入候也、

一月廿一日

実美

木戸顧問殿

文書原寸 縦一七・二櫃 横九三櫃

三九 山階宮晃親王ヨリ島津前左府公へ

年賀状

(封筒) 島津二位様 晃

侍史中

(封筒ウラ) 子一月廿九日

(封紙ウラ裏) 島津前左大臣様 晃

侍史中

新年之慶賀不可有休期芽出度申納候、益御勇健御超歳奉大賀候、猶委曲奉拝承度候老躰無異加寿仕候間、乍恐御安慮可被下候、寔ニ此品麁末不珍、乍赤面不相変改曆之吉兆申上候驗迄ニ奉進上之度、御笑留被下候ハ、本懷畏入奉度候、万々期永日之佳会候也、

敬白、

子一月廿九日

二白、大寒中大雪趣折角御用意奉伏願候、早春呈書之筈候ニ延引失礼御賢察奉希入候也、

文書原寸 縦一六・五櫃 横四六櫃

封筒原寸 縦一八・五糎 横五・四糎

三三〇 山階宮晃親王より島津前左大臣公へ

時候見舞及當時の形勢ニ就て

(封筒)

島津二位様

晃

侍史中

(封筒ウラ)

(封紙ウラ書) 島津前左大臣様

晃

(欠損)

ノ

ノ

子二月廿九日

二白、不序之天象折角御厭奉伏願候、晃義年々老衰乍恐御憐察被下候、乍蔭内外多事之風評、神州往々ノ安危如何ト至愚之心中儀モ恐怖仕リ候、万々宜々奉願上候、併廟堂賢雲群下番々ト八万々奉存候へ共、陸沈紙魚之中流行之義ナキニシモアラズ、唯々神祇之加護ヲ奉仰候、御憐察被下候、再拝、

三陳、略紙失敬真平高免奉願上候、

文書原寸 縦一五・二糎 封筒原寸 縦一六・五糎

横九二・五糎

横 四・五糎

三三一 琉球使者ヨリ三条相国へノ歎願書

清国政府へノ交渉ニ付

藩情困難之儀付度々歎願仕候処、御聞届難被成旨御達之趣拝承仕、幾度茂請願候儀、誠ニ恐懼至極御座候得共、此程ヨリ縷々上申スル通、清国ニ対シ五百年來恩徳ヲ受ケ、愛顧ヲ蒙リ今日ニ至リ懇切不相替、然ニ御

晩春之節ニ御座候得共、未寒光難去御座候、益御勇建ニ被為入候哉、曲折拝承仕り度奉存候、晃無為消光乍恐御安慮可被下候、抑此一折麓末赤面仕り候へ共、時令御見舞申上候驗迄ニ進上之仕り度御笑納被下候ハ、本懐之到深々畏入奉存候、尚奉待拝眉之佳期候已也、

敬白、

趣意通彼レヲ断絶イタシ候儀ニ御座候ハ、いつれ其道ヲ立順序ヲ踏ミ不申ハ天理ニ戻リ、人道ニ背キ何ノ面目アリテ宇内ニ立ツヘケンヤ、夫而已ならず清国ヨリ不信不義ノ罪ヲ譴責スル時ニ当リ、弁スルニ辞ナク如何ナル患難醸シ出スモ計リ難ク、実ニ危急存亡之機ニテ憂悶ニ不堪、是故ニ幾回モ歎願仕儀ニ御座候処、御聞届難被成と之御達迄ニテ、いまた了解スヘキ御説諭拝承不仕候付而ハ藩王江復命シ、人民説諭スル不能、此儘帰藩難仕事御座候間、此等之情状御惻察被成下、先書奉願候通政府ヨリ清国へ御談判被成下、如何様ニ茂名義分明之御処置被為在、確乎断然之道御立被下候上ハ可奉遵奉候得共、自然其通難被仰付儀茂御座候ハ、敝藩固ヨリ日清御両国ニ間シ、數百年來西屬シテ御高恩之程更ニ厚薄ナク、父母ノ如ク奉仰居候処、清国ノ恩意ヲ不顧、彼ニ不告シテ、唯

天朝ノ命ノ儘ニ従事スルモ、信義ニ関シ実ニ行ハル可カラス、此上ハ無拠本藩ヨリ清国ニ陳情シ、信義ヲ不失

様仕度候間、此儀御聽許被下度奉頼候、右ニツノ間御採用無之ニ於テハ、臣等進退道ナク必死ニ歸スル而已ト置所ヲ知ラス、歎息愁傷之至ニ不堪仕合御座候、敝藩只今之姿ニ而ハ將來外国ヨリ難事ヲ醸出スヘクトノ由、厚思召を以御説諭之趣を茂承知仕、行末之事迄御苦慮被成下難有儀ニハ御座候得共、未來ノ事ヲ慮リ、眼前清国之厚恩ニ背キ、信義ヲ失ひ候而ハ行末是レヲ雪クヘキ道理之レナク、いつれ始ヨリ信義ヲ貫キ、(兼カ)全次是ニ応シ申ヘク、縱令外国ヨリ如何様之難事申掛候共、動キ不申所ハ固ヨリ確定仕居候間、此等之儀を茂御賢察被為在、何卒寛洪之御処置有御座度泣血奉懇願候也、

明治九年二月

親里親雲上

内間親雲上

喜屋武親雲上

幸地親方

与那原親方

大政大臣三条実美殿

冊子原寸 縦二七・五釐 横二〇釐 二枚

小 禄 親 方

高 安 親 方

池 城 親 方

柳高鞆殿二名列座ニテ応接有レ之、問答ノ条々、猶亦委

細ニ認メ、九日呈上シテ可否ノ判裁ヲ願フ、右書上七ヶ

条ノ扣左ノ通りニ御座候、

明治九年三月 日

山本広栄（巻）〇

三三三 東京日枝神社祠掌山本広栄ヨリ大教正千家

尊福等へノ願書

神道問答ニ付可否裁断願

（表紙）
上

東京第十一大区四小区上小合村

日枝神社祠掌

山本広栄（巻）〇

第一条

上

紀記之略解摘要ノ陰陽不（メ）分（マ）ノ条ヲ難テ曰ク、如是云フ

テハ天地未（ガ）生（ガ）前（チ）ハ死物ナリ、氣モ不（レ）動、水モ不（レ）流ト

アリテハ之（コ）死物ト見タルヤ云々、対曰ク、氣動クハ則チ

陽ニアラズヤ、動ケバ必ズ静マルコトアリ、静ハ則チ陰

ニアラズヤ、動静アレバ陰陽不（レ）分トハ云フベカラズ、

陰陽不（レ）分トハ未ダ氣ノ動静セザル所ヲ指テ云フ文意ナ

リ、然（レ）動静アリト説（ト）テハ御文面ノ句義ニアハザルナリ、

亦動静ナキト云テハ死物ト見タルヤト問ヒ、教正方ノ

問トモ思ハレズ、次ノ句ニ雞（コ）子（コ）ニ喩タルヲ見テ活物カ死

明治八年十二月四日麹町神道事務局ニ於テ説教大試験
ノ節、日本書紀ノ御文ニ付、中教正本居豊頼殿ト対論ニ
及ヒ呈上致シ置候講録ノ義ニ付、本月七日日比谷御門内
神道事務局ニ於テ、権少教正西川須賀雄殿、権少教正青

物カノ理ヲ自知スベキコトナリ、雞子ハ動くモノナリヤ、
動かザルモノナリヤ、考テ見ベシ、之動くモノニ非ズ、
動くモノニアラザレトモ活物ナリ、雞子ヲ見テ死物ト云
者未ダ聞カズ、其動かズシテ活物タルヲ以テ、天地未^レ
剖^レ、陰陽^ヲ分^レトアル所ノ理ヲ譬タル者ナリ、宜ク熟考
アルベシ、

第二条

高天原ト云ハ日宮ヨリ遙^シ上ニシテ^{此所僧侶方}天地ノ未^ズレ^生
以前ヨリ在ル所ナリ、其高天原ニ參神ノ坐^ステ天地ヲ造リ
タマフ者ナリ云々、対曰ク、高天原ト指ス所神典学中一
定セズ、日宮ト云ヒ^{本居派}、或ハ紫微宮ト云フ^{平田派}、実
ハ高天原ト云フハ一ヶ所ヲ指テ云フ名ニハアラズ、天ノ
惣名ナリ、其証ハ古語拾遺ニ天地剖判之初天中所^レ生神
名天御中主神トアリテ、天中所^レ生神トアレバ高天原ト
云ハ剖判タル天ヲ指テ云ヘルナリ、然ハ古事記ニ高天原
ト云フハ天地ノ初^{ハジメ}発^{シラ}タル其天ナルコト明ナリ、如是^カ正
ナル証文アルヲ捨テ、天地未生以前ヨリ高天原ト云フ、

天ノアリシト云フ、先哲推量ノ憶説ヲ取テ大教ノ定説ト
ナスハ、実以テ歎息ノ至リナリ、

第三条

古事記ニ成神トアル、成神ノ体ハ則チ隱身ナリ、隱身ト
云ハ有ト云ヘトモ、目ニ見エザルユエ隱身トハ云フ、隱
身ノ義イカニ云々、対曰ク、成神ノ其体ヲ指テ隱身ナリ
トアル、其隱身ノ神ハ古事記ニ七神アリ、隱身ノ神ナル
國常立神ヲ日本紀ノ一書ニ便化^ニ為人、号^ニ國常立尊ト
アレハ其隱身ト指、其形ハ人体ナルコト明ナリ、隱身ナ
リト雖モ人体ヲ成^{ナス}ニハ品物ナクハ其形ヲ成ベカラズ、其
隱身ノ人体ヲ成^{ナス}品物ハ何物ゾヤ、品物ノ外ヲ物ノ形ヲ成^{ナス}
モノナシ、然ハ隱身ノ人体モ定テ品物ニテ成タル者ナル
ベシ、天地日月ノ未^ズレ^成、以前ニ品物アルベキ所^{イハレ}故アラ
ンヤ、品物ナリシテ隱身ノ人体ノ成ヘキ理更ニナシ、教
正方ノ論ノ如ク地球上ノ理ヲ以テ説^トベシ、日輪赤道線ニ
中スルトキハ之^{コレ}春分秋分ノ節ニシテ、日光南極北極ノ直
下ノ地迄ニ至ル、然シテ一日南方ニ偏リ、或ハ北方ニ偏

バ日光ニ遠クナル極下ノ地日光ヲ見コトナシ、日々一度ツ、遠クナリテ、遂ニ半年ノ夜ヲナス、故ニ其地ヲ夜国ト云フ、其夜国ノ地ハ大海ノ潮迄水ルユエ其海ヲ氷海ト云フ、以レ此考ベシ、日光ニ遠クナリテスラ大海ノ潮マデ水ルモノナリ、若今日輪ヲ取除テ見ナハ此世界中ノ海ハ水リ、土モ水モ水リテ此世界ハ忽チ一塊物トナリ、水モ流レズ氣モ動カズ、水土一塊トナリテ品物ノ分離アルベカラズ、然ハ天地日月ノナキ以前、品物ノ分離ナクシテ人形ノ隱身ノ神体ヲ成ベキ理ナシ、況ヤ神体スラナキニ天地ノ象形ヲ何ノ品物ニテ鑄造^{ヅル}ベキヤ、皆之天地成定ノ理ニ疎キ草昧ノ説ナリ、宜ク熟考アルベシ因付天主トテ全書ニ己ノ像ニ肖テ「アダシ」イハレト云フ男女ヲ作トアレハ、天主ノ形モ人体ナリ、然ハ天地未生以前ニアルヘキ理ナシ、天主ノ天地鑄造ノ説以テ虚ナルコト知ヘキナリ

第四条

參神ハ天地成レル以前ヨリ在ル所ノ神ナレトモ、古事記ニハ成神ト云ルナリ云々、対曰ク、試ニ問ベシ、古事記ニ成神トアル文ハ真説ナリヤ、偽説ナリヤ、古事記ノ成

神トアル文ヲ真説トスレハ、天地未生以前ニ參神アリト云ハ妄談偽説ナリ○古事記ノ成神トアル成ト云フハ坐ト云フ意ニテ高天原ニ坐神ト解ベシ云々、対曰ク、成神トアル文古語拾遺ニ所生、神トアレバ今迄無キ神ノ新ニ成リ、新ニ生タル義ニテ成神所生神トアルナリ、然ラ成ト云、生ト云フ、字ヲ坐ト云、意ニ解スルハ未ダ所見アラズ、其証ナキコトハ憶説妄談ナリ、正シク成神トアレハ成神トシテ之ヲ信ジ、之ヲ教ベキナリ、強テ先哲ノ謬解固着シテ公典タル神典ノ文ヲ自恣自由ニ解ヨナシ、先哲ノ過失ヲ主張スルハ必恥シキコトニアラズヤ、速ニ其推量ノ憶説ヲ一洗シテ、神典ノ証文ヲ以テ新ニ正解シテ大教ヲ布ヘキコトナリ、

第五条

天之御中主神ハ新ニ成ル神ノ名ニハアラズ、本来在マセル靈ニ名付奉ルモノナリ云々、対曰ク、本ヨリ在ル所ノ靈ニ名付奉ル名トセルトキハ、古事記ニ成神名トアリ、古語拾遺ニ所生神名トアルハ虚説ニヤ、偽説ニヤ、此

二典ヲ虚偽ノ書ト云ハ何ノ書ヲ証トセンヤ、以テ論スルニタラズ、二典ノ文ヲ真説ナリトセバ成神名所_レ生、神名トアレハ成出タル神ノ名ナリ、生ル所ノ神ノ名ナリ、如是成神名所_レ生、神名トアルヲ真説トスレバ、本_モヨリ在ル所ノ靈ノ名トセルハ偽説ナリ、先哲ノ謬解セル無証拠ノ憶説ニ固着センヨリ、速ニ一洗シテ神典ニ其証確呼タル説ヲ信受スベキナリ、

第六条

混元既凝トアル物ソレヲシカ凝_ヲシムル者ヲ指テ、天之御中主神ト云フナリ云々、対曰ク、此説ヲ弁スルニハ句義ヲ解テ後ニ弁ゼザレバ、其義ノ通カタケレバ先句義ヲトカン、夫混元トハ天地万物ノ象形トナルベキ品物未ダ分離分子セズ、混雜シテ一元トナリテアルヲ指テ云フナリ、既凝トハ今新ニ凝ルニハアラズ、既凝テアルト云フ義ニテ、既ニトハ早くヨリト云フ意ナレトモ、此所ニテハ元ヨリト云フ義ニ用タル者ナリ、偕此既凝ト云ルモノハ之_ヲ天地トナルベキノ元、參神トナルベキノ精ヲ含メル一靈

ナリ、日本書紀ニ含_レ牙ト云テ雞子ニ譬タル者_ノナリ、然ニ此既凝ノ一物ハ無名トアレバ、天之御中主神トモ名ツクベキ者ニアラズ、此一物ヲ天之御中主神ト云フトキハ、之名_ヲアルモノニテ無為トハ云フベカラズ、亦此一物ガ念慮アリテ天地ヲ造シモノナランニハ無為トハ云フベカラズ、亦人体ノ神ナランニハ誰知_レ其形トハ云フベカラズ、如是混元既凝ノ一物ハ無名無為誰知_レ其形トアルヲ、此混元既凝ノ前ニ若有_レ名有_レ為_レノモノアランニハ、其後ニ凝ル一物ノ無名無為誰知_レ其形ト幽遠ナル旨ニ云フベカラズ、然ニ此混元既凝トアル物ヲシカ凝_ヲシムル者アリ、之_ヲ天之御中主神ト云フト説ヲ立ルハ、之_ヲ無証拠ノ憶説ナリ、混元既凝ルノ前ニ人像タル神アランニハ混元トハ云フベカラズ、混元ノ元ハ則チ元始ニテ太極大本タル元所ヲ云フナリ、方今品物ノ元品ヲ元素ト云フ、元素ヨリ前ニ品物アラバ元素トハ云フベカラズ、混元ヨリ前ニ物アラハ混元トハ云ハザルナリ、然ニ混元ノ元タル前ニ高天原ト云フ天アリ、人体ノ參神アリト云フハ、日

本紀ヲ始メ古事記并序文及ヒ古語拾遺等ノ神典ニアルコトナシ、若其証アラバ之ヲ示スベシ、

第七条

顯宗天皇紀ノ神託ニ神ノ天地ヲ造リタマフコト明ニアリ、然リ天地未生前ニ神ナシト云フハイカニ云々、対曰ク、其神託ニ有テ預ニ鑄造天地之功トアリテ、天地ノ成レルトキニ御力ヲ添テ、天地成定ヲ助ケ造リタマフヲ云ヘルナリ、其義委細ニ説ベシ、日本書紀卷八 十丑丁表 三年春二月丁巳朔阿閉臣事代御命出使于任那、於是月神著レ人曰、我祖高皇產靈有テ預ニ鑄造天地之功云々、神託ノ有テ預ニ鑄造天地之功ト云フヲ、紀一本ニハ有テ預ニ鑄造天地之功トソヒトアル訓ヲ省ケリ、釈日本紀 十七三十丁有テ預ニ鑄造天地之功トアリテ預字ヲソヒテトテヲ付テアリ、書紀集解ニハ有テ預ニ鑄造天地之功トアリテ預字ヲソヒト訓、ソヒハソフ、ソヘルト通テ副ノ義、添ノ義ニシテ附添コトナリ、抑モ神託ハ其言ヲナシタマフガ元ニテ、其文字ヲ填ハ後ノコトナレハ、前二訓ヲ以

テ解シ、後ニ字義ヲ解ベシ、先神言ノ「天地ヲ添テアヒイタセル」ト云ヘルハ、天地ノ初テ発ル之時ニ其天中生テ、天地成定ニ力ヲ添テ造レル旨ニテ、天地ヲ預テ鑄造トハ云フナリ、以此見ベシ、天地ノ剖判ハ含レ牙トアル、既凝トアル所ノ元靈ヨリ發生セルモノ、其分發セル天地ヲ造リ固メタマフ者、則チ神ナリ、亦預字ヲアラカシメト訓バアラカジメハアルハジメト云義ニテ、物事ノ有ル始メト云フ意ニテ、物事初テ起ルコトアレバ備ヘ防ク用意ヲナスヲ預備預防ト云フ、然ハ天地ノアルハジメニ造リタマフヲ以テ預テアヒイタセルトハ云ナリ、故ニ古事記ニ天地初発ノ時、於高天原ニ成神トアル、初テ発ル時トアル、時ト云字ニ注目スベシ、此時ト云字ニ注目スルトキハ、天地ノ初テ発ル時ニ天ニ成神ナルコト明ニ知ル、ナリ、以此神ハ天地ノ初発之時ニ天中ニ生テ天地ヲ造リ固メタマフ者ト解ベキナリ、預ノ字、字書ニ作レ与トアリ、亦与予ト同トアリテ、与ハアタフト訓テ自ヨリ他ニ及ノ義ナリ、ソヒ、ソフ、ソヘル

ノ訓コレヨリ出ツ、予ハアツカルト訓ス、則チ其事ニ関
係スルコトニテ、他ノコトヲ犯ノ義、他ノコトヲ求ノ義
ニテ意ヲソヘ、ソフ旨ニカナフナリ、此神託ヲ誤解シテ
天地未生、以前ニ神アリテ天地ヲ造リタル者トセルトキ
ハ、日本紀・古事記ノ神代卷ノ本文ノ旨ヲ害スルナリ、
故ニ此神託ヲ解スルハ神典学ノ一大事件ナリ、宜ク熟考
アルベシ、

明治九年三月九日

山本広栄

国乃多米神乃教乎荷奈布身乃重伎、命乎奈保仰久可那、

大教正 千家尊福殿

大教正 久我建通殿

大教正 稻葉正邦殿

御掛り受付

権少教正 西川須賀雄殿

権少教正 青柳高輅殿

冊子原寸 縦二五糎 横一七・五糎 七枚

○三臺 池田慶徳ヨリ久光公ヘノ礼状

二通

久光公ノ和歌共

○三臺 晃親王ヨリ久光公ヘノ時候御見舞

御写真(六十一歳)添

三臺 権少教正三輪田元綱ヨリ久光公ヘノ願書

曆書編纂費借用ノ件

曆法ニ付歎願

一明治六年御改曆ニ相成候得共、全国ノ人民不弁理ノ筋
モ不少候ニ付、将又御改曆ニ相成度奉存候处、開化説
ニ云、開闢以来日本ニ自国ノ曆法ナシ、持統天皇ノ御
世ニ初テ元嘉曆儀鳳曆ヲ用ラレ、其後ハ支那曆ノミ行
レタリ、サレバ西洋曆ニ改ルモ何ノ障カアラン、所謂
五十歩百歩ノ違ヒ也、其上西洋曆法ハ日纏月離ノ蜜ナ
ルコト世界第一ノ良法トスト云リ、依之私共愚按仕候
ニ、皇国固有ノ曆法アル事ハ、既ク靈元天皇貞享ノ頃

司天台ノ学生渋川春海ノ著セル日本長曆、或ハ中根璋

カ皇和通曆、及平田篤胤ノ天朝無窮曆等二見ユル所也、

今又元綱右ノ曆法ニ本付テ皇国固有ノ曆法ヲ正シ、先

天太陽曆・同太陰曆及後天太陽曆・同太陰曆又ハ古今

日契曆等凡千三百十三冊ヲ大成仕リ、皇国固有ノ長曆

アルコトヲ示シ度奉存候、抑曆日ハ各国其自国ノ為ニ

仕候故、支那ニハ支那曆アリ、オロシヤニハ魯曆アリ、

西洋ニハ洋曆アリ、フイノエソ国モ亦同様ノコトニ

テ、各国共天帝ヲ論シ長久ヲ記シ、且ハ自国ノ人民ニ

時ヲ授ケ民権ヲ保護スル所以ノモノニ候、然ル所方今

ノ官人日本ニ自国ノ固有曆アルコトヲ不候候間、右ノ

書ヲ以朝廷ニ献シ度候得共、費用八百円ニ過キ候得ハ、

モハヤ私共ノ力ニ不能候仰願ハ、朝廷御改曆ノ儀ニ付

テハ御前ニ於テモ偏ニ御苦心被遊候事ニ御座候得ハ、

右曆書ノ費用今三百円モ有之候得ハ尽ク大成可仕候間、

何卒右金数三百円拝借被仰付度、此段百拜奉歎願候也、

明治九年三月

權少教正三輪田元綱

(先三輪田)

島津公玉案下

冊子原寸 縦二七・七釐 横二〇・五釐 四枚

三美 沢田総平川村唯助連名久光公へノ上書

公ノ帰国ヲ諫止ス

(封筒)

千葉縣第十四大区二小区
下総國香取郡名小屋村平民

沢田総平

(欠損、島之)
□津從二位殿

茨城縣第十大区十小区
常陸國河内郡小林町新平民

川村唯助

近時 朝廷ノ政漸衰ヒ内外危急存亡切迫ノ秋至レリ、然

ト雖モ 閣下ノ 君側ニ在ルヲ以テ三尺ノ童モ(特)トス、

然ルヲ豈科ランヤ、今日道路ノ説ニ聞ク、 閣下 君側

ヲ辞シテ遠ク旧国ニ歸ルト、若シ果シテ此説ノ如ナラハ

朝廷ノ為ニ争諫スル者ハ夫レ誰ゾ、嗚呼数千方ノ衆庶其

方向ヲ失フ、聞モノ誰カ涕泣サランヤ、臣等憂苦ニ(堪)湛ヘ

ス、無知ノ身ヲ顧ミス、來テ之ヲ歎訴ス、 閣下能シク

察シ玉へ、今ヤ道路・橋梁・家屋等土木ノ広大ナル外品
 輸入ノ夥シキ、外人雇入并外国留學生徒ノ多キ、皆内貨
 ノ濫出スル者ニシテ目前見テ之ヲ知ル、又方今ノ學者偏
 ニ欧米ノ風ヲ尊ヒ利害得失ヲ論セス、悉皆彼ノ制ニ模倣
 セント欲シ、以テ至尊ナル 皇國ノ道ヲ陋習ナリト云、
 國體ヲ濫スノ甚シキ、之ヨリ大ナルハナシ、是衆庶ノ皆
 能ク知テ歎スル所、 閣下疾クヨリ 朝廷ニ切言スルト
 聞、於之 閣下ハ國家ノ柱石 朝廷ノ争臣タルヲモ亦知
 レリ、故ニ不日國家安然、人民鼓腹ノ域ニ至ラント各信
 シテ其期ヲ渴望セシナリ、然ルニ 閣下今ヨリ遠避帰駕
 アラセ玉ハ、人民特ムニ抛ルコトナク、鼓腹ノ日ヲ待ニ
 信ナク、弥疑惑ヲ生セン、人心疑惑ヲ生スル時ハ 國威
 ノ振フヘキ期ナシ、且今日 閣下西帰ノ事ヲ聞テ人或ハ
 曰フ、 閣下意不堪所アリテ旧國ニ歸リ、身泉后ヲ探リ
 テ心風月ヲ翫ムナラント、或ハ曰フ、 閣下國ニ歸リテ
 必ス國家維持ノ策略アルナラント、衆口囁々トシテ遂ニ
 志士(マ) 鄙民ノ神腦ヲ煩ス、於此臣等猥リニ鄙言ヲ上シ深意

ノアル所ヲ認メスシテ、切ニ西帰ヲ駐メント欲ス、幸
 閣下臣等カ言ヲ 領容シ、能ク耐忍スヘカラサルノコト
 ヲ耐忍シ、我 皇國三千万蒼生ノ為ニ長ク久シク 君側
 ヲ不去、薰陶竟ニ 皇國ノ 皇國タル所以ノ光輝ヲ發出
 セシメンコトヲ祈願ス、臣等素ヨリ採筆テ心中方カ一ヲ
 陳述スルヲ得ス、殘憾不少 閣下宜シク臣等カ意ノ在ル
 所ヲ憐察シ、帰駕ヲ駐メ玉ハ、独リ臣等ノミナラス、國
 家ノ僥倖ト奉存候、恐惶謹言、

千葉縣第十四大区二小区

下総國香取郡名小屋村平民

明治九年四月三日

沢田総平

茨城県第十大区十小区

常陸國河内郡小林町新平民

川村唯助

島津從二位殿

冊子原寸 縦二四・三横

封筒原寸 縦二〇・七横

横 一七横 四枚

横 八横

〇三七 池田慶徳ヨリ久光公へ

公ノ出發帰国ニ付挨拶

三七六 鹿兒島県下学校設立ニ付向井新兵衛ノ建言

賞典禄ヲ基準トスル從來ノ例ニ倣ヒテ

〔表紙
「上」〕

謹テ愚考スルニ我

皇國ノ危急存亡日ニ迫リ月ニ甚シク、我人民タル者傍觀スルニ忍ンヤ、憂國ノ情日夜如何トモスルコト無シ、今般脱刀ノ令下ルヤ和魂亦随テ脱シ、人心磨滅ニ到リ、洋夷ノ奴隸トナルヤ、少シモ疑ヲ容ルナシ、然トモ 朝旨此クノ如クナレバ力ヲ尽スニ術ナシ、然トモ今少シク輔救スベキ有ルガ如シ、其法方如何トナレバ学校ヲ設ルニ有リ、而 皇國ノ興亡亦当県ニ存スベシ、故ニ有志ノ者ハ勿論、幼年輩ヲシテ学ニ就カシメ、夜以テ日ニ繼キ、天地ノ大經大義ヲ講明セシムルニ有ルベシ、実ニ迂遠ナ

ルガ如シト云ヘトモ、今日ノ急務是レニ如シクモノ無キガ如シ、今ヤ学校ノ設ケ学則正シカラス、教養亦端シカラス、有志ノ者正学ニ就テ学バント希望スル者甚ダ多シ、故ニ人時失フ可ラザルノ機ナラス、然而七百年來旧恩ニ浴スル数万ノ人民モ、亦之ニ因テ淳然トシテ起リ、沛然トシテ学ニ就キ、誰カ能ク之ヲ禦ガンノ域ニモ至ルベシ、而鼓舞作興ノ責メハ教授ノ人ニ有リ、因テ広ク他県ニ求メ有徳ノ人ヲ撰挙シテ学頭ニ置ク、尤枢要ナルベシ、近日正則トカノ学当県ニ盛ニ行ル、其学タルヤ全ク道義ニ關係スルコトナシト聞ク、唯洋夷ノ学ニ類スベシ、此クノ如キ学ヲ以少年輩ヲ教導セバ、君臣父子ノ大倫有ルヲ知ルナリ、異日共和政治ノ風令ヲ下サス、駸々然トシテ国体ヲ共立スベシ、然ル后ニ到テハ聖人興ルトモ如何スベキナシ、因テ今日ノ急務学校ニ有ルガ如シ、今ヤ奸臣命ヲ偷ミ暴政日甚シ故、早ク庶民ヲ教導セズンバ聖学亦禁止ノ令下リ、秦皇ノ政出ルモ亦知ルベカラス、是ヲ以愚考ヲ献芹スル所以ナリ、而学费ハ來年ヨリ先御賞典ヲ

以テ今日ノ如ク御施行アラバ、巨大ノ学校設立シ、後來
教化我が全国ニモ及ヒ、随テ和魂磨滅スルニ至ラズンバ、
皇國輔救ノ一助ニ庶幾カラント杞憂ノ愚情止ムヲ得ス、
謹テ上言ス、

丙子四月十八日

向井新兵衛

冊子原寸 縦二六・五種 横一九・五種 三枚

三三九 九鬼隆都ヨリ久光公へ

公ノ帰國ヲ惜ム

(包紙ウツ書)
「奉呈」

九鬼隆都

御直覽

(封紙ウツ書)
「奉呈」

九鬼隆都

再拜

益御勇健為勝奉賀候、將又此程中久敷伺不申処、今曉承
り候得は近日御帰國も可相成哉之由驚入、先御勝手迄推
參仕候、兼而申上置候得共、思召通り無之而茂、尚時々

は御場所ニ御出有之候得は、自然天下之御為安心御座候
処、万一前文之次第有之候而は如何ニも心配奉存候間、
不取敢推參仕候、一寸心趣申上候、 頓首、

卯月十九日

文書原寸 縦二〇・二種 包紙原寸 縦二七・八種

横二七・八種

横二〇・二種

三三〇 琉球國中山王ヨリ清國督撫へノ覆照

欽命福建等処承宣布政使司布政使加十級紀錄十次葆

為

移咨事切照

貴國接

貢船隻歷係毎年九十月間到閩上年因

貴國接

貢之船未到先後扱福防庁具稟節経詳請分別咨查迄今
探無消息所有京回以及存留各官伴無從遣発回国誠
恐前項船隻在洋遭風漂取他口抑或在国内阻風並未開

駛來閩復經由司詳請咨查並令福州府查議去後茲獲

署福州同知洪亮采議詳查上年琉球國接

貢船上例應附搭恭進光緒元年分慶賀

皇上登極貢典並進

穆宗毅皇帝香品該船至今未到請將京回存留跟伴內撥出三

名附搭飄風難人慎氏謝花蔡德滋西銘筑登之等各船

上先行回國其餘各官伴人等心候

接

貢船隻來閩再行回國所有應領屢疏塩菜口糧米折應請

照例給發等情到司查

貴國上年例有接

貢船隻來閩至今探無消息茲飭拋福防厅議詳前情自應

如詳弁理所有遭風難人慎氏謝花蔡德滋等兩船均應

照例勘估給資修整完固方能遣發放洋其西銘筑登之

等一船拋該厅訊拋存留通事陳天福供稱此号球船船

身堅固無庸修葺堪以駕駛回國所有應給各官伴蔬薪

塩菜口糧米折照例接支給領以及遭風損壞船隻應行

給資修固以便乘辟放洋而示懷柔惟查該國接

貢船隻有闕恭迎

皇上勅書暨

欽賜物件並接京回使臣及存留各官伴回國迄將一載探無

音耗自應移咨

貴國王查覆弁理以昭妥慎除詳請

兩院憲咨明

大部查照並請分咨

山東

廣東

貴國王煩為查覆弁理望切施行沫至咨者

右 咨

琉球國中王尚

光緒二年閏五月 二十八

冊子原寸 縱二八・五糧 橫二〇糧 二枚

日

三六一 三条太政大臣ヨリ琉球藩王尚泰ヘノ令達

琉球藩王尚泰

其藩清国へ対スル臣礼謝絶ノ義ニ付、昨年内務大丞松田道之ヲ派遣シテ被相違候末、同人帰京復命ノ時ニ当リ、猶直ニ歎願ノ為委員トシテ三司官池城親方上京、縷々具陳ノ趣モ有之候得共難聞届、元来清国へ対スル臣礼ノ儀ハ我国体ト国権トニ関スル最モ大ナルモノニ付、断然謝絶セシメサルヲ得サルトノ深遠ナル御詮議ニ出タル義候条、一藩姑息之情ヲ酌量スヘキ筋ニ無之、依テ向後何様歎願候とも採用不相成候事、

明治九年六月一日 太政大臣三条実美

文書原寸 縦一四・三糎 横三七糎

三六二 土持綱幸ヨリ伊集院九郎等へ

久光公帰国後ノ政府姦策

謹而呈上仕候、薄暮之時分ニ御座候処、

御両殿様益以御機嫌克被遊御座大慶不可過之、陳ハ先般

從二位公当地御発艦、海上無御滞被遊御帰国目出度御儀

奉恐賀候、次ニ御両兄猶更無相障珍重奉存候、随而小子

事無異儀奉職仕申候間、乍憚御消光可被下候、於爰元爾

后格別相替申義無之、所謂大臣始木戸・大久保等之私意

日々増長、天下人民不平ヲ唱ヘサルナシ、追々諸新聞紙

上之評論スル在リ、該記者兇筆アラン限り斃レテ止マス

ト散々謗議致シ、禁獄罰金之法律ニ少シモ恐怖スル無ク、

恥ル色無ク、却而一身之榮譽ト為カ如ク記者ノ条例ヲ犯

シ、罪名ヲ蒙ルモノ凡四拾余名、且罰金ノ合計壹千七百

六拾円ニ相及候由、然ハ新聞条例之出シヨリ未一周年ニ

至ラスシテ、右ノ如クナルヤ、今後之処計リ知ルベカラ

ス、察スルニ堪タリ、且各県ノ勇士連モ隠然奔走スル在

リ、然ルヲ探訪者ノ網ニ罹ル不少、既先月上旬比土佐川

原塚茂太郎其他七八名、県元ヨリ招呼レ、即今詰問ト成

リ、併某白状スル確証ヲ不得、頗ル愛國有志士タルハ、

悉皆捕縛禁獄致シ慕虐奇酷至レリ尽セリ、然況或日本戸

別荘ナル染井里ニ於而、大久保・伊東等懇篤ヲ設ケ、弥

是ヨリシテ交信ヲ厚クシ、斃ル迄八国事ニ身ヲ尽サント
更ニ盟約ヲ議シ、世ニ之ヲ私意素餐会ト評笑スル所勿論
ニテ、彼等自由權利ヲ恣ニスル姦策ニ出ルナラン、將タ
不容易モ木戸別荘ニ

主上御臨幸迄モ被為在、統而大久保宅ニモ

入御、尤其供奉ノ面々ハ皆彼ノ徒ナル類ヲ以シ、本日獻
スル酒肴千美ヲ尽シ、其物品ナルハ兼而出入セシ商人等
ノ賄賂ヲ私用シ、沙汰ノ限リニ御座候、去レハ昨年地方
會議モ論説立タス瓦解致シ、本年亦如斯ナラント其要ス
ル所ヲ知ラス、俄ニ奥州

御巡幸之策ヲ成シ、其 奏スルニ広漠僻遠之土地人民之
頑陋ヲ開化進歩ニ及サン事ヲ欲スト、然リ而シテ

叡慮奉伺候処、尤野蛮之地、是迄參議スラ足ヲ一度モ入
レシヲ聞カサルヲヤト、

勅語降りシヲ屢々説ヲ 奏シ、漸クニシテ

勅諭決スル処ニシテ、恐多モ 叡慮ヲ曲テ私意ヲ逞フス
ルモノ、如シ、私意素餐ト曰ハサルヲ得ス、因テハ當時

地方官ハ地租改正事務繁雜之場合

御巡幸被為在困却相極シナラン、就中青森県之如キナル
ハ、先達而農夫等一揆ヲ起シ、可也鎮撫ニ相成候折柄ニ
而、内心ニ苦情ヲ懷キシトカ風説モ有之、尤可然候半、

且先月和歌山県下紀伊国那賀郡之人民凡三千人余一揆ヲ
起シ、竹槍ヲ提ケ席旗ヲ押立テ、奮然県庁ニ抵抗之處、

地方官大キニ恐懼、諸所江退散致シ、官吏一人出テ激徒
ニ立向ヒ応接スル者無之、説得不能、戰慄狼狽、其混雜

不可謂、然場合該地教導職二三名進出、激徒ヲ説諭シ、
又鎮台兵至急繰出シ取挫、先鎮撫之姿ニハ候得共、抑暴

挙之原由ヲ探求スルニ、近来彼地方官压制スル甚敷、加
之今度地租改正ニ就キ不公平之處分有之、再三県庁ニ歎

訴スレトモ採用無之、憤激ニ堪兼不得止事右時機ニ立到
リ、況鎮台兵ノ暴威ニ制セラレ、人民始県官庁ニ歎願セ

シ処ノ情実ヲ陳述スト雖トモ曾テ受ケス、民心ヲ問フ无
ク、压制ニ束縛ヲ加ヘ、尚且沸騰湧ガ如シ、物議紛々今

猶存スルニ在リ、然ニ激徒ノ魁首ト成リ煽動セシハ、旧

紀藩見玉某ニテ憂国慷慨論ヲ主張シ、頗ル文学ニ長シ、兼而孝道ノ名タ、ル有名ノ士庄制政府ノ為無名ノ罪人ニ陥ントス、嗚呼感然之至リ御座候、将夕朝鮮ノ使節上下八十人、去月廿九日着京、同三十日外務省ハ信使迎ヘラレ、応接相済本月一日参 内、

主上出御、鮮人上使・副使

天顔ヲ拝ス、此時御茶菓子下賜、又信使ヨリ虎豹ノ皮并白綿紬等品々二十種献上之、右畢而吹上禁苑拝観、同所ニ而洋食料理賜ハル、翌二日延遼館(遠)ニ於テ和洋酒食御馳走下サレ、同三日各省ニ見舞ヒ、夫ヨリ当時開化ナル場所々々来観ヲ許サレ、且陸軍操練等同断、鮮人以外ナル御会釈馬鹿々敷噺ニ而、洋人ナト物笑ニスト聞ケリ、且亦去ル二日奥州

御巡幸御発聲相成リ、供奉ノ人ニハ岩倉・木戸・大久保・宮内式部・内務省等ノ長官・判任官已下近衛并騎隊被召附、其内大久保ナルハ彼地方御用トヤラニテ二十日前東京出發致シ、巷説ニハ日光山其他名所旧跡ナド遊観

之趣、稍私費姿ニスルカ如シ、且

御発聲当日ハ、大臣ヲ始トシテ麝香之間詰華族各省勅奏任官、悉皆馬車ヨリ千住宿迄供奉、太粧ナル御行列ニ而之ヲ戊辰前年ニ遡リテ推考スルニ、徳川家日光社參等之習弊不脱ルモノニ似タリ、因テハ現今定額金不足シ、古来格別ナル官幣社御修繕モ御出来兼サセラレ、隨而各省人員黜陟之御処分トハ不似合ニ而、人或ハ謂ハン、姦計官吏旅費日当ヲ貪リ、自儘ニ遊観セント欲スル意中ニ出ルトノ評、尤可然ヤ、然ル処豈不料ヤ、

薰子内親王此ノ程内ヨリ御不例之処、去ル八日薨御奉絶言語候、就而ハ前条ニ演シ通り

御発聲前ヨリ御煩ヒ極之御大切ニ伺ハレ、彼是ノ云々ニヤ、此節之 御巡幸ハ最初ヨリ

天機ヲ進マセ給ハサリシヲ再度ニ及ンデ

奏上致シ、茲ニ至リ恐縮痛哭誰カ歎息セサランヤ、左候而去ル八日ニハ日光山 御発聲ニテ、宇都宮駅御駐轡行在所迄宮内省ヨリ西四辻急御使トシテ到着ニ付、俄ニ当

駅二一日ノ 御駐轡被為在候由、何共奉恐入次第御座候、右近来之新説上申仕候、尤前後不綴之略文二而、尚詳細ナルハ湖海新報二相譲リ、進呈之仕申候間御推覧可被下候、右ハ当三月発兌相成リ、第一ノ部ハ先般、

公御出艦前仕候之砌献本仕置候付、第二ヨリ十号迄城井君江依頼進上仕申候間御落手可被下候、尤当分第十号迄出来、跡ハ追々呈上仕可申候、依之ハ近比恐多奉存候得共、御都合ヲ以テ何卒前件形行御披露被下度、併セテ湖海新報献上之趣旁可然様御執達之処奉伏願候、先ハ御帰県之御祝詞、且時候御伺之為如此御座候、恐々謹言、

九年六月十三日

土持綱幸

伊集院九郎様

菊地助右衛門様

又曰、過日奈良原君御着京二而、久々振御県之御左右共拝聞致度候処、彼是行違未夕不得面会、併田中・城井両君ヨリ承候処、御県元静謐殊更

御両殿様御始、公子御機嫌克被遊御座候由、雀踊欣然之

至無此上難有義ト奉存候、且島又君・山本君二モ無御障御出務之由別段不申上候間、乍憚宜敷御鶴声可被下候、皆様御滞京之砌ハ御懇命之段不浅奉存候、万々御厚礼申上候也、

冊子原寸 縦二四種 横一六・五種 六枚

三五 山田有英ヨリ久光公へノ建言

二通

鹿兒島県下学校設立ノ件

政府当路ノ改革ノ件

二七六三ノ一

臣誠恐誠惶懼伏ノ至リニ堪ヘスト雖トモ止ヲ得スシテ愚存ヲ謹上言ス、

其事タルヤ先般 御滞京ノ頃ヨリ学校ノ御着手之レアルヤニ拝承シテ窃ニ喜悦セリ、然ル所 御帰県ニ相成リ、未夕御着手ノ次第ハ敢テ伺ヒ得スト雖トモ、日夜苦慮スルニ倬然盛大ナル者ト心ニ喜ヒ訴之、汲々然トシテ注目傾耳、今ハ明ハト一日千秋ノ思ヲナシ、天ヲ仰キ地ニ伏

シ、命ノ下ルヲ奉待居所豈料ン、意表ニ出テ今更如何トモシカタシ、啻々恐懼嘆シテ憤々感考ノ処、又築地御邸へ御連支様方ノ学校ヲ御設立、是レ亦乍恐懼愕ノ至リ泣然嘆息セリ、然リト雖トモ又意味深長ナル御趣意アツテ、如斯ヤト千思万考スト雖トモ愚懼ノ哀サ、其意味深長ナル根源ヲ恐察シ奉ル能ハス、心快々黙止スルニ忍ヒサル所以ナリ、蓋シ当今ノ形勢ヲ傍觀スルニ、如此ノ学校ハ細事ニアラスヤ、然シテ御連支様迄ト懽壁成サレ玉フテハ、外見ニ於テ如何誹謗冷笑スル者モ無キニシモアラス、然ルヲ況ヤ、今迄

御趣意ヲ欽慕シ居ル者モ方向ヲ替へ、日ニ減少セント愚慮ニ之レ生ス、然ル形勢ニ立チ至リ、日ヲ重ネ月ヲ積マハ股肱ノ人数ハ謂ニ及ハスト雖トモ怠屈シ、欽慕ノ者ハ却テ輕蔑スルニ至ラン、然レハ学校モ終ニ瓦解ニ及ヒ、又天下ノ事ニ好機會至ルト雖トモ切齒而已ニテ、遂ニ施行スルヲ得玉ハサルアラン欵、臣カ愚案ニ於テハ実ニ学校ノ事ヲ怪ミ、機會ヲ失シ玉フトハ之レノ謂欵ト嘆息セ

リ、然リト雖トモ窃ニ学校ノ事ヲ伺候スルニ、五万石ノ御賞典祿ハ何年何月ト云期限ハ之レナキヤニ拝承ス、然レハ三位公ト御熟談ニ相成リ、其適當ナル情実ヲ以テ新ニ盛大ナル学校ヲ御設立アランコトヲ、臣カ昼夜苦慮シテ嘆願スル所以ナリ、夫レ学校ノ事タルヤ、方今ノ時世ニ值遇シ、漢学而已ニテハ人氣振ハサル欵、果シテ然ラハ洋学モ所ヲ異ニシ、ニツナカラ御設立ニ相成リ、然シテ宇内ニ高名ナル人才ヲ依頼シ、以テ師員ニ居ヘ又洋学ノ方ニ於テモ洋人ヲ依頼シテ、而シテ後チ懇望ノ者ハ入学致スヘキトノ

御沙汰アレハ大ニ宜ニアラスヤ、又恐レ多モ御連支様方ノ許多在ラセラル、故へ、当今ニ於テハ人才ヲ捫ラミ、其者ニ託シ諸生回国等ヲ成サレ玉ヘハ、智識モ益々逞シクナリ玉ハン、然ルヲ況ヤ重富・今泉ノ両公并ニ悦之助様・真之助様方ハ擢ンテ、学文モ最早御不足ナキ故へ、之レヨリ実事ヲ施行シ玉フノ時ニアラスヤ、尤モ憂國ノ士ハ公子方ノ在ラセラル、ハ知ルト雖トモ、御心慮如

何ハ毫モ伺ヒ得ス、且深宮ニ黙止玉ヲ怪ミ、氷解スル能ハサル者多ラン故ニ、今日ハ人ト広ク交リ玉フニアラシク、願クハ海陸軍ノ間ニテモ入御アツテ、御尽力日ニ月ニ御徳望ヲ養生シ玉ヒ、

公ノ御精徳ニ又増輝シ玉ヘハ、今迄御趣意ヲ仰慕シ居ル者ハ一層憤発シ、他ハ皆翕然此驪尾ニ附テハ禍ヲ免ル、ト云テ、水ノ卑ニ就クカ如ク、果シテ易キコトカ之レアラシ、周ノ武王カ盟津ニ至ル二期セスシテ会スル者八百諸侯トアル、之レニハ至ラスト雖トモ髣髴タル機會ニ至ラン歟、実ニ晷々恐レ多モ臣愚寝席ヲ安セス、食スルニ味ヲ甘セスシテ熟考スルニ、今日ノ日本ハ応永以降ノ頃トハ大ニ異ナリ、赫々タル万古不易ノ

皇統モ已ニ危急存亡ノ秋ニ迫リ、洋夷ノ奴隸タランコト且夕ニアルカ如シ、真ニ 皇國ノ保ト保タサルニ係ルコトナレハ、安ソ姦妄ノ嫌疑ヲ受ルヲ恐ル、ニ足ラン歟、日一日選延スレハ方ニ憂ヒ、日ニ深ランノ耳、烏ソ其止ヲ見シ、故ニ断然義ニ從テ而シテ 天皇陛下ヲ非義ニ陷

レサルヲ臣子ノ職分ト存ス、併シ嫌疑ヲ受ルトカ云テ非道ヲ知りナカラ

王命ニ抗スルハ、敢テ君子ノ為ス所ニアラストスレハ、一身ノ潔キ、終ニ 天皇陛下ヲ非義ニ陷ル、ヨリ他アラシヤ、然レハ仁義礼智信ノ五常モ地ニ落チ、却テ不忠不義トナル者ニアラスヤ、臣愚昧詳ニ了解スル能ハス、嗚呼哀哉歎スヘシ、臣カ進退已ニ窮レリ、実ニ臣カ卑賤ノ身ヲ以テ 明公ノ嚴顔ヲ犯シ、且乳臭ナル喙ヲ以テ狂瞽ノ空論ヲ吐露スルハ恐縮ノ至リニ堪ヘスト雖トモ、又天下ノ危急恐レヨ顧ミルニ遑アラス、不遜ノ罪ヲ忘レテ上言ス、此上ハ如何様トモ伏テ 尊命ヲ待奉ル而已、誠恐誠惶頓首々死罪、

明治九年八月七日 山田有英

上弁

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・五糎 三枚

二七六三ノ二

臣有英誠恐誠惶頓首謹上言ス、先般恐懼ヲ顧ミス謹怒ヲ甘シ、不肖ノ身ヲ以テ奮然黙止スルニ忍ヒサル処ヨリ、愚存ヲ憚ラス上言セリ、然リト雖トモ未タ可否ノ 尊命ハ拝承シ奉ラス、然ル処此節家禄并ニ賞典祿奉還スルノ 勅命下レリ、嗚呼悲哉長嘆息ノ極ト云ハサルヘケンヤ、已ニ赫々タル 皇威モ地ニ落ントスルニ至レリ、之レ臣トシテ孰レカ切齒慨嘆セサランヤ、唯々四方ノ人民洵々悲嘆ノ声耳ニ堪ヘス、真ニ傍觀ニ堪ヘサル所以ナリ、然リト雖トモ愚昧ノ悲サ尽サント欲スルモ由ナシ、啻々慘然涕泣日夜焦思苦慮スル所、漸ク愚存ヲ生セリ、其事タルヤ先ニ建言スル学校ノ如キハ当今設立スルニ違アラランヤ、此機会ニ乘シ姦臣ヲ黜ケ苛政ヲ攘除セスンハ 皇運ヲ挽回シ、蒼生ヲ安堵サスルノ機会再ヒ得難ランカ、縦ヒ得ルトモ療治ヲ如何セン、実ニ今日ヲ好機會ノ極ト云ヘシ、然リト雖トモ此機会ニ乘スルニ就テハ、万々 御採用ノ処ハ難シト幾度カ思度スト雖トモ、又黙視スルニ忍ヒンヤ、其所以ハ先般遇々

四百余里ノ遠路ヲ歴玉ヒ、切ニ西郷ヲ 御教諭アリト雖トモ毫モ諍ナシ、皆水泡ニ属シタルコトナレハ、上申スルモ甚遺憾ノ至リ、然リト雖トモ又天下ノ危急、豈小事ニ拘ハラランヤ、然シテ此度ヒ迄ハ西郷ヲ 御教諭アラシコトヲ仰キ奉ルナリ、若シ此条 尊意ニ叶ヒ、且西郷カ弁服スルアラハ、各県ノ者共ハ皆水ノ卑ニ就クカ如ク、果シテ積年ノ 御鬱情モ晴レ、第一 天皇陛下ヲ輔佐シ、下ハ億兆ノ苦ミヲ芟除シ玉ハンコト此一挙ニアラン欵、臣嘆息流涕憂國ノ至誠ヨリ再ヒ忌諱ヲ憚ラス、謹怒ヲ畏レス、略々見ル処ノ愚存ヲ上言ス、臣恐悚ノ至リニ堪ヘス、伏テ 尊命ノ下ルヲ待奉ランノミ、臣有英誠恐誠惶頓首謹言、

明治九年九月二日

上

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・五糎 二枚

三 法元太郎左衛門ヨリ山下邸家令へ

当務免職ノ上米春掛拜命願ノ件

（包紙ウツ書）
上

私儀

御代々様君側江奉職拜顔奉蒙御鴻恩難有仕合、終身子孫
ニ迄迄忘却不仕儀は勿論ニ御座候、然処豈計哉、今般家
祿賞典等定之儀被 仰出候由新聞ニ相見得、未表向御布
達は不奉承知候得共、一同苦情之至奉恐入候、就而は実
ニ恐縮至極奉存候得共、当 御邸ニ於ても勤仕人員御減
少被 仰出候儀、御当然之御時勢ト奉伺候、依之誠ニ恐
多次第御座候得共、先般奉伺趣有之、当 御邸内江米春
器械取設方被仰付候付、私義当務御免被仰付、右米春器
械等之方江混と被掛置被下度、左様御座候得は多年重畳
之為可奉報御恩沢情々尽力可仕念願御座候間、何卒右之
愚意御執奏被下度奉願候也、

九年八月十九日

法元太郎左衛門

山下御邸

御家令

御中

文書原寸 縦一八糎 包紙原寸 縦二七糎

横八三糎

横三七糎

三 山本孫九郎ヨリ山下邸家令へノ願書

御側勤免職草履取部屋出仕願ノ件

口上覚

私儀多年

御側ニ御召仕被下、海岳之
御厚恩を蒙リ、折角勉勵仕候得共、素ヨリ愚昧ニして寸
効無之只恐懼罷在候、然処今般家祿賞典祿制限変更相成、
格別御用度相減候ニ付而ハ、
御家政向御变革被為在、第一御召仕之人員御省キ無之候
而は不被為濟時機ニ立至、実以恐縮之至奉存候、然ルニ
兼而

御仁愛之深キ、万一人員御廢置等ニおひて被為煩

尊慮候様之儀共有之候而ハ重畳恐入候次第ニ而、不肖之

私恬然奉職仕候儀、衷情不安仕合ニ御座候、依之当務御

断奉申上度、何卒御免被仰付被下候様奉願候、左候而前

文申上候通私儀ハ深ク

御仁恩を頂キ候事故、職務御免被仰付候上ハ、御草履取

部屋辺江毎日罷出、何事ニ限らず御用相勤、万分一なり

共奉報度至願ニ御座候間、私之分ニ応シ候儀ハ、時々御

用被仰付被下候様分而奉百拝歎願候、

右之趣 御許容被成下候様、宜御執成奉頼候、謹言、

明治九年

八月廿八日

山本孫九郎

山下御邸

御家令御中

冊子原寸 縦二七糎 横二〇糎 二枚

三六 肥後甚之丞ヨリ分家へノ願書

人員御減少ニ付免職願

口上覚

私儀

当務拜 命、今二五六年相勤申候得共、素ヨリ万事不熟

ニ而幸ヒ同席之介助ニ依リ今日迄難有相勤、未タ寸分モ

鴻恩ヲ奉報候儀無御座、甚タ以テ奉恐入候、然ル処今般

家祿賞典御变革ニ付テハ 御家事万端御省略ニテ、任職

人員モ御減少ノ御時節、其上恐レナカラ

皇国至重之事ニ付、聊カ

朝廷ニ建言仕度所存之儀有之、 御家ニ奉離一身ト成リ

候テ建言仕度御座候ニ付、当務御断リ申上度御座候間、

何卒願之通御免被仰付被下度自然建言仕候節ハ、其愚存

ハ 御両家ニ申上候上ニ差上度奉存候間、此等之趣宜ク

御執奏被下度奉頼候、以上、

九年八月廿一日

肥後甚之丞

御分家

御家令御中

文書原寸 縦二五種 横三四・五種

三三三 内田政風ヨリ久光公へノ上書及大山綱良等

へノ質問

二冊

島津家ノ財産ト鹿児島県庁へノ依託事件トノ

分明ニ就テ

二七六七ノ一

(表紙)
奉
レ

王政御一新ノ際、大小ノ諸候名義ヲ正シ、邦土人民共
依願奉還ヲ許サレ、府藩県ノ制トナシ、更ニ諸候ヲ廢
シ華族トシ、旧ニ因テ知事タラシメ各旧邦ヲ治メシム、
後亦廢藩置県ノ制ヲ定ラル、則明治四年ナリ、此時ニ
当テヤ藩々公私ノ別ヲ明カニ分割シ、藩主ノ命ヲ奉シ、
其役筋ヨリ出納等ノ一紙ヲ県官へ呈ス、諸県今日ノ出
納藏省へ勘定ヲ遂ケ年々皆済スル、其水源ハ則藩々ヨ

リノ次送リヲ県庁ノ大本ト成シタルモノナリ、於爰未
曾有ノ一大変革ナルヲ以テ強奪ノ氣味アルヲ恐レ、
朝廷專至仁ヲ垂レ、數百年ノ領地奉還ノ大義情状ヲ闡
ニ御憫察、其実藩制ノ出納残ヲ以テセス、藩々ヨリ取
極ノ儘ヲ以テ一牒ヲ出サセ、夫レヲ大本ニ被据タルモ
ノナリ、依之是レヲ管察スルニ、明治三年ノ藩制仕残
リ金米ハ全ク公ニ屬シ、同二年以内ハ藩ノ仕払残アリ
トモ藩主ノ私ニ屬スルモノ、如キ体裁ナリ、故ニ藩々
ニ於テ製造スル品物建家、其他醫へハ船艦或ハ製鉄
所・集成館火薬局・紡績機等ノ類、藩主ノ意ヲ以テ之
レヲ上献シタルアリ、或ハ代価下ケヲ願フモアリ、亦
朝廷ヨリ更ニ被 召代価ヲ給フアリ、一様ナラス、
朝廷モ其乞ノ意条理ニ当レハ、敢テ之レヲ拒ミ玉ハサ
リシナリ、然リ而テ当県ノ事情ヲ一ニ街説ヲ以テ情管
察スルニ、頗ル疑團ヲ生スル件々數多アリテ水解スル
能ハス、是等今更トナリテハ既往ニ屬シ、且世評ヲ以
テ毛ヲ吹キ、疵ヲ求ム本意ニアラストイヘトモ、果シ

テ然ラハ數百年累代重恩ノ御徳沢ニ浴シ居ル、臣タルノ情義ヲ以テ其大ヲ採ル時ハ、争テカ傍觀坐聞シ空ク口ヲ閉、苟且スルノ理アラシヤ、故ニ断然意ヲ決シ、此疑團ノ目ヲ吐露シ御説戒ヲ乞願ヒ、雲霞ノ朦朧ヲ掃キ安着セン事ヲ切ニ思念スル、數年ナレ共其機ヲ得ス、最モ不容易一大事ナル故ハ旁意ヲ決スル能ハス、今日迄因循ニ流レタリ、然ルニ朝廷今般亦家祿・賞典祿共ニ給与ノ制限ヲ改ルヲ名トシ、年限ヲ立テ以テ之ヲ束脱シ、明治十年ヨリ条例ノ通公債証書ヲ以テ一時ニ下給ノ布告ヲ出サレタリ、之レヲ反覆思念スルニ、華士族一同ノ困難ニシテ誰レカ之レヲ是仁ノ政トセン、就テハ 両御邸ノ御難渋奉憲察、将来ノ御目途今日ニアラサレハ其機ヲ失シ玉ヒ、即永世ノ御策相立処、如何ト驚愕痛心ノ余リ予テ伝ヘ聞ク処ノ疑團ヲ上申シ、其ノ実否ヲ明ニ拝承シ奉リ、大ニ改正ノ端緒ヲ爰ニ据ヘ無窮御連続ノ道ヲ起シ給ハン事ヲ伏テ奉懇願度、臣政風其筋ノ者ニアラス、然ルヲ猥リニ先越^筋ノ罪ヲ犯シ

既往ヲ吐露スル、実ニ不忍トイヘトモ亦事曖昧疑團アルヲ其儘捨置セ玉フノ理ナキヨイカニセン、依テ此一書ヲ公然奉リ、尊意ノ被為 在処ヲ奉窺度、仰願クハ彼是上申ノ情状御洞察 御仁慈ヲ垂玉ハン事ヲ、誠惶誠恐百拜謹白、

明治九年子第八月

内田政風〇

上

別紙ニ上陳スル通、於藩々公私ヲ区域シ次送ノ一紙ヲ出サセ、県令之レヲ請取其筋へ上申シ以テ将来出納ノ水源トナシ、今日迄ノ算元ヲ起シタルモノナリ、故ニ外県ニ於テ別途金等ニ類似スル、幾万円ノ金全ク有ルモノニアラス、若シアレハ藩ヨリ請取タル些少ノ雜物等ニテ、取計ノ道ナキモノヲ入札等ニ致シタルモノニテ、百円ニモ充タサルハ於県々間ニハ可有之哉、然ルニ於当県ハ是レト大ニ相違シ、數軒ノ会社或ハ礦山ニ着手シ、或ハ銀行へ加入等其金高ノ大ナル、他ヨリ之

レヲ量知スル能ハス、若シ夫藏省疑團ヲ興シ、官員ヲ派出シ之レヲ糾サハ答フルニ道ナク、恐ク御両邸御依託金ナリト曰フノ外ニ出サルヘキカ、是レ政風疑團トスル最大ナルモノナリ、此件々悉ク御依頼書アル、其実否ヲ伺ヒ知ラサレハ、道ノ根元ヲ分割スル能ハサル処ナリ、若シ夫君上知シ召サレストセハ、則名実ニ触レ不廉恥ノ甚シキヲ以テ論スルノ外ナカルヘシ、元來廢藩置縣ノ際ニ当テヤ、既往ヲ謂ハサレハ条理ヲ尽ス能ハス、故ニ不得止其事實各藩ノ上ヲモ比較シ、左ニ之レヲ上申仕候、

一於藩々取扱スル区々ニ出テ一定ナラス、且ツ内議ニ決シタルモノナル故ヘ、確乎公然タルニアラスト雖、大意ヲ謂ハンニ知事ヲ置レタル際ニ当リ、藩深ク吟味ヲ尽シ、条理ヲ正シ、旧藩金米取扱ノ筋々ヨリ本日迄ノ出納^帳ヲ出サセ、夫レヲ総括スル於役筋一ツニ合シ、是レヲ政府ヘ出シ、政府之レヲ請取、猶評議シ公ニ属スヘキト藩主ヘ属スヘキヲ区域シ、是レヲ藩主ヘ伺ヒ、

猶主命ノアル処ヲ奉シ、是レヲ實際ニ施行シタル大意如此ノ手續ニシテ他ヨリ疑團ヲ生スルアルヲ聞カス、於御家ハ如何体ノ御体裁ナリシニヤ、政風全ク是レヲ奉存ラス、若シ夫レ等ノ手数ヲ尽シタル上ヘ、今日如キ為体ナレハ如何トモ為スヘキノ道ナシ、然レハ今ニ応スル御策他ニ御決定不被為在テハ、濟セラレサル事申上ル迄モナカルヘシ、若夫レ右ノ手数ニ及ハス、於県官之レ等ノ分割ヲ差定メ、不伺定シテ公ト

藩主ト別途ト三ツ分ノ如キ不体裁ノ取扱ナリセハ、既往トイヘトモ此儘可被捨置ノ道理ナキ喋ニ及ハス、最モ次送相成ル迄ハ金米ハ勿論、些少一品トイヘトモ悉皆藩主ノ御物タル条理判然トシ、誰レカハ是レヲ弁別セサランヤ、実ニ遺憾ノ極ト申上ル外無之、所謂專斷ノ甚キニ過キ諸藩ノ取扱ニ触レ、却テ県官ノ客タル者ヨリ着手シタルノ体裁タリ、其所以ノ一ツヲ拳ケレハ、是迄御格護ノ金卒ヲ

御両邸ヘ差上タルトノ一説一奇事ニテ、余ハ押シテ知

ルヘキ也、是等果シテ実ナリセハ 君主ノ御物ヲ猥リ
ニ聊示シ、言語同断ノ所業主客ノ坐位ヲ誤リ、強奪ノ
姿トナリ、第一 朝意ニ悖戻ストイヘトモ、今更之レ
ヲ如何ニセン、此上ハ唯其ノ道ノ道タルヲ以テ是等ノ
廉々ヲ質問シ、大ニ謝罪ノ道ヲ立サセ、是ヨリ責メ玉
ハス、彼ヨリ大ニ道理ニ伏シ、一々陳謝スルノ大御徳
慮ノ大策御決定被為在度御事カト深ク苦慮仕候事、

但シ御両邸ヨリ更テ御依頼ニ相成居ル、採ハ此限ニ
アラサル事ト奉存候、

右ノ云々伺定タル上へ着手スルノ道ヲ立テサレハ、議
定スル能ハス、故ニ唯要件而已ヨ上申仕候事、

冊子原寸 縦二六糎 横一九糎 三枚

二七六七ノ二

慶藩置県ノ際取扱振ニ付、疑団ノ件々質問相願ノ主
意書

今般更ニ華士族ノ家禄・賞典禄共合テ制限ヲ換へ、悉

皆三十年ニシテ消却スルノ旨ヲ被令タリ、故ニ 両御
邸將來御取統方ノ義奉恐察ニ微々タル、今日亦如斯ニ
立到リ、十倍ノ御困難ト相成ル可クト奉存候得ハ、実
ニ旧君臣ノ情義難忍ノ余リ、予テ疑団トスル情状以別
紙老公へ上申スルノ処、其際ヨリ 思召ニ不適アリト
雖、畢竟金錢等ニシテ事卑劣ニ属スルニ因リ、朝廷
ノ意没収ノ体裁ニ属スルヲ慨歎スレ共、旁深ク 御思
慮アリテ御黙止被成タリ、上申ノ廉々ニ於テハ御保証
可被遊箇条アリ、兎角御手元於其筋猶取調サセ、其実
ヲ以テ他日可達トノ 御意也、然ルニ其正跡モ大概明
ナルニ由ツテ、上申状ヲ臬庁へ可遣ノ命ヲ拝セリ、就
テ情按スルニ公事ノ外旧君臣ノ情義ヲ以テ之レヲ論ス
ルニ、將來ノ御目途如何ト乍不及痛敷奉恐思処ニ於テ、
誰カ性アルモノ之レヲ度外トシ不願ノ人アラシヤ、御
互ニ決テ人ニ譲ラサル明々白々タル喋々ニ及ハス、此
ノ至誠感通ノ情、果シテ実ニ然ラハ其実ヲ拳ケ、將來
御互ニ屹ト御立行ノ道ヲ相立テ申度、故ニ無余儀其ノ

目ヲ左ニ掲ケ質問ノ端緒トセントス、伏テ乞此意ヲ了
解アラン事ヲ、

一 更ニ藩知事ヲ被置、統テ廢藩置縣ノ令ヲ下シ玉フノ際、
一々上申許可ノ上ニ取扱ニ候哉、亦ハ適宜ノ所置ニ涉
リ候哉、拝承致度候事、

一金銭米ノ類

内

何程 朝廷へ

何程 旧御主へ

何程 別途へ

但此別途ナルモノ何方へ伺ヒ、差分ケノ有無拝
承致度候、

右一々明了ニ拝承致度候事、

一 蒸気船 一 蒸気器械 一 紡績機 一 製鉄所

一 此他国家ノ大補益ニ関スル品物一々難記、

但御殿・寺社方・宗門方等ノ有金、且礮油製方

等或ハ兵機方御貸下ノ類ヲ曰フ、

右如何ノ取計ニテ今ハ如何相成居ルノ趣、相分リ居
ル文ケハ明了ニ記載拝承致度候事、

一目今數ノ会社、或ハ礦山等如キ差分金矢張別途金トシ、
人民保護ノ用トナス名義ヲ立テラル、見据相成居候哉、
亦ハ旧主ノ御物ナレ共、当分ノ内県庁ヨリ内々取計ト
見做シタルモノニ候哉、一々明了ノ御答書面ヲ以テ拝
承致度候事、

但此水源ノ金筋ハ別途ナルモノヨリ会社等へ本
入ニ候哉、亦ハ外ニ出金ノ道アリテ、所謂世ニ

流行スル株主寄持ノ金ナルヤ、詳ニ拝承致度候、

一 県下市中等へ抵当物ヲ以テ貸付ノ金株、亦ハ外々貸付
金筋モ前条同断拝承致度候事、

一 県下へ成立スル処ノ会社、右別途ナルモノヨリ本入有
之分シハ、一々其社名又ハ本入金高、且当分ノ有金迄

差引書ヲ以テ拝承致度候事、

右ノ条々一々書面ヲ以テ乍御手数拝承致候上、猶疑團
トスル廉アラハ相類度候間、至急御施行御取調被下候

様相願候事、

明治九年第

内田政風

大山綱良殿

田畑常秋殿

右松祐永殿

三六 相良量右衛門ヨリ山下邸へノ願書

御側勤免職掃除方拜命願

(包紙ウツ書)
上

口上覚

私義

追白、本文ニ付別途ナルモノ果シテ県ノ適宜ニ属シ、

自然旧主ニ可属条理ノ金筋ト予テ御見据ニ候ハ、県

下人民将来融通上ハ第一タル元素サエ相据候上ハ、御

仁慈ノ御良策分ニ応シ、幾程モ生シ可申ハ明了タル

事カト奉恐察候、余計ノ見越ナカラ御職掌上ヲ奉察未

然為念記置申候事、

一朝廷至仁藩々上申、金錢等次送スル体裁ニ至リ、自然

御疑惑ノ筋モ候ハ、公然廢藩置県ノ際取扱振ノ条々

御窺ヒ、或ハ旧藩々ノ振合夫々御懸合ニ及候ハ、事

判然御氷解可相成ト存候事、

幼少之砌より当時ニ至る迄、辱も

御側江勤仕、海岳之奉蒙

御高恩折角勉強仕候得共、元来不肖ニして未寸分をも奉

報之功無之、奏身恐縮罷在仕合ニ御座候、然処不図も今

般華士族家禄米代金を以一時ニ御下渡之段拜承仕、実ニ

御家之御難事と深奉恐入候、就而は将来を量り給ひ無御

扱茂 御家政向御改革被仰出、第一人員御減少等無之候

而は御入費被省間敷欵と奉存候、然ニ先般難有

御仁恤之 御沙汰之趣も拜承仕候得は、人員御廢置等ニ

おひて若

御配慮被下候様被為在候而は実ニ奉恐入候、尤一時ニ御

減少相成候而は、差向

御身辺之御不自由は無申迄も、其他万端御不都合可被為
在御事と奉恐察候、依而甚恐多奉存候得共、特別之御吟
味を以職務御免被仰付被下度、左候而も毎日参

邸当分之御供方詰所辺江扞居、奉伺

御機嫌度候付、以来 御邸内掃除方二而も不苦御用筋丈
は、御召仕被下候様被仰付置度奉歎願候、右情実旁 御
憐察を被為出、何卒願通 御許容被成下候様宜御執成被
成下度奉頼候、百拝謹上、

九年八月

相良量右衛門

山下御邸

御家令御中

文書原寸 縦 二四糎

包紙原寸 縦 二六糎

横 一六・五糎 二枚

横 一八・七糎

三六 琉球藩王ヨリ再度ノ使者上京ノ件並ニ其使

者ヨリ三条相国ヘノ歎願書

二通

二七六九一

本藩清国へ対スル臣礼謝絶ノ儀ニ付、昨年内務大丞松田
道之ヲ派遣シテ相達サレ候末、同人帰京復命ノ時ニ当リ、
猶直ニ歎願ノ為メ委員トシテ三司官池城親方上京、縷々
具陳ノ趣モ有之候得共聞届ラレ難ク、元来清国へ対スル
臣礼ノ儀ハ御国体ト御国權ト二関スル最モ大ナルモノニ
付、断然謝絶セシメサルヲ得サルトノ深遠ナル御詮議ニ
出タル儀ニ候条、一藩姑息ノ情ヲ酌量スヘキ筋ニ無之、
依テ向後如何様歎願候トモ御採用相成ラス候条、厚ク相
心得ヘクトノ御達書木梨精一郎ヲ以テ御渡、關藩必至ト
驚愕、朝旨之嚴重成所ヲ汲ミ、熟評スト雖トモ名分大義
ニ関シ、其道御附不被下ハ遵奉シ難ク、因テ三司官富川
親方ヘ伊江親雲上ヲ添テ上京セシメ、池城等ト会同シ、
藩情ヲ陳情セシム、伏シテ望クハ洞察ヲ垂レ、幾重ニモ
名義分明ノ御処置ヲ蒙リ度奉依頼候也、

琉球藩王尚泰

明治九年九月五日

太政大臣三条実美殿

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 二枚

二七六九ノ二

本文書ハ二七六九ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 四枚

三毛〇 指宿二月田金錢本払帳

(表紙) 九年子十月

金錢本払帳

指宿二月田御話

出納掛

払

子 十月十九日

一旧錢貳拾五貫三百文

内巻貫八百文 ねりふ六わ代

九貫文 紅のり四拾枚代

五貫貳百文 紅巻匁代

貳百文 生姜巻合代

三貫文 大盃類拾貳本代

五貫五百文 木のこ五本代

六百文 大小ん巻里代

右於鹿兒島、脚之勘助取替ニ而御買入取計御持越御用

二付、今日同人江返錢分払、

十月廿日

一金貳円三拾錢

内巻円充

中神三平

千田茂之助

三百錢

小仕之重次郎

右

真之助様御墓詣御供ニ而、当所迄相勤御暇被下候ニ付

被相払、

十月廿日

一金貳拾錢

右御庭貳社御祭祀ニ付壹社江拾錢ツ、御婦御用払、

一、同壹円貳拾錢

右前条同断、当所社司六人御頼入ニ付壹人江貳拾錢

ツ、之賦ニ而相中江被下払、

十月廿日

一旧錢貳拾三貫三百七拾六文

内七貫貳拾文

御神酒四盃代

四貫文

白米貳升代

三貫文

赤貝三升代

貳貫四百文

鯖六尾代

六百六拾四文

塩貳升代

四貫六百拾貳文

柿八拾貳代

壹貫五百文

百田紙代

右前条八幡神社温泉神社御神樂ニ而供物等、右之通社

司計ニ而買入、御代払申出候ニ付、祠官堀内家卿江相

渡ス、

十月廿一日

一金五円貳拾錢

旧錢ニシテ百九拾七貫六百文

兩ニ付三拾八貫文

一旧錢貳貫四百文

ノ貳分貳百貫文

右丸岡様唐芋植付之畠地六升蒔、内壹升蒔請取組壹升

蒔ニ付、凡籥貳拾并ニ賦ニ而御買入代、習ヶ町村也、

福元之喜三右衛門ニ候得共、有馬孫兵衛へ払渡候事、

十月廿五日

一旧錢貳貫八百文

内壹貫六百八拾四文

右召上御用柿三拾代

壹貫百拾貳文

但被下御用内貳拾六代

但悦之助様御着御供并御方衆而被下御用、

右内書之通柿代掛

十月廿五日

一錢拾八貫九百貳拾文

右

悦之助様御供人馬貳疋分賃分、尤壹人壹疋ニ而旧錢貳貫百文ツ、喜入釐より当所迄四厘三合、壹疋ハ九貫四百五拾八文ツ、ニシテ如斯也、

一^レ金三拾錢

右 真之助様御旅行、先大始良へ当所 御光越御日限

御発し申上之一封大始良御立後ニ相達シ、御跡追ニ而

次渡被成候処、小根占より当所迄態々舟仕立ニ而差越

候由ニ而届来候ニ付、右船ちん錢能分兼候付、見合戸

長へ向ヶ遣シ不足も候ハ、為知越給候様申遣置候事、

十月廿五日

一金七拾錢

内三拾錢

但真之助様御着御当日、大阪より当所迄今日喜入

町辺御往来御召馬、相勤候者へ御酒代とシテ被相

払、

四拾錢

但喜入辺迄御供馬四疋分相勤候者へ御酒代、

右之通御酒代とシテ被下相成候付、法元八郎太より有馬孫右衛門へ引渡候事、

一^レ金三拾錢

右

悦之助様御召馬貳疋ハミ用麦大豆代

十月廿六日

一金四拾錢

内三拾錢

拾錢

右 御本家江御借入之御供馬、今日差返候付内書之通

被下相払、

十月廿六日

一金三円

右鹿兒島より御用物駄賃三疋分ニ相払、

同廿七日

一旧銭拾七貫五百六拾四文

右御湯殿御用蘭茭三枚并摺湯之浜御蒸場 御兆御用小

麦から其外御馬飼料代等、去ル廿五日三拾銭払立候処

都合、旧銭ニ而式拾八貫九百六拾四文ニ被及差引候、

本行払不足ニ付相払、有馬孫右衛門受取書有之候事、

十月卅日

一金貳円八拾六錢四リ

旧銭ニシテ百八貫八百三拾貳文

但八文過

右 御着御当日御用分より十月廿三日迄御着代払、満

石次助受取あり、

一金八錢

内巻通 御順御願書湯之習浜被寄等一条

代貳銭

巻通 黒砂糖樽并御余り取寄一条

代六錢

右山下御邸執事方へ問合、郵便仕出料払、

十月卅一日

一金拾壹円三拾壹錢五リ八ツ、

旧銭ニシテ四百三拾貫文

煙貫百斤代

斤二付四貫三百文ツ、

右

悦之助様召上御煙草腰書通御買入料払、

同日

一同六円四拾八錢六リ

旧銭ニシテ貳百四拾六貫五百文

煙草五拾八斤代

但貳斤皮付白ろう

斤付四貫貳百四拾八文ツ、

内貳拾斤

但於輯様御用

貳拾五斤

但御土産御用刻之賦

拾三斤

但前同断葉ニ而御土産

右腰書通ニ煙草於輯様御用并御土産御用御買入料払、

十一月二日

一金八拾錢

右熊本県變動一条、磯御方より報知問合書、夜前十二

時彼御方卒兩人直持ニ而到着、今朝差返候ニ付兩人江

被相払、

十一月二日

一金壹円

右一昨日、山下御邸より小仕正次郎江御用向に直持ニ

而一昨夜着いたし今日被召返候処、御年寄方より御用

物も有之候付、兌賃旁として右之通被下相成候事、

十一月二日

一同拾七錢九り

旧錢ニシテ六貫八百文

大辛漬大根六拾八本、兩度ニ御買入代払、

十一月二日

一同三拾錢

右鱧并鮎大根、当所麓之袈裟次郎外式人より致進上候

付御返とシテ被下払、

同式日

一同式拾錢

右東方村之 休左衛門江御子様方瀧浜川口ニ而網打御

指入ニ而恵ひと魚過分取得差上候付被下払、

外二堀之内庄太夫同断之処、西洋布壹反被下相成候

事、

右両品共有馬孫右衛門へ引渡候、

十一月四日

一旧錢百八拾五貫文

右当所百姓等加世田野呂嶽踊り、馬乘御覽候付乘人員

百八拾五人江致下払、有馬孫右衛門へ引渡、

十一月五日

一同六百文

右豆腐三丁、有馬孫右衛門開聞社江御供跡ニ而直買入
払、

十一月七日

一金五拾銭

右山下御邸より小仕小次郎御用書等直持ニ而被差越、
此御方取も御扶書等差廻之来箱等為持被差返候而被下
相成候、尤山下御邸よりハ何も被下無之候旨申出候付
申遣候願内差掛間遣ス、尤差越中途小仕用等も有之候
付遣行候分取計候間御方ニ而猶又被下事候、宜御取計
可給旨申渡候事、

十一月七日

一旧銭五貫貳百文

右甘鯛六勺六寸五ツ、小鯛七勺三寸五ツ、直売持
参ニ而有御買入代払、

(採酒印アリ)

十一月九日

一金五拾銭

本文御覚書手当被成候ニ付渡ス、

右今和泉土石原良左衛門母、此已前多年御奉公相勤、
永々御暇ニ而下り居候処、一昨年致病死候得共、存命
中、多年御恩ヲハ蒙り候儀ニ付、時々進上物等仕、奉
伺御機嫌居候趣遺言いたし置候由ニ而、野菜唐芋類等
三壹并大ひな一体進上伺御機嫌申上候付御届被下払、

十一月六日

一旧銭三貫五百文

右召上御用柿代払、

十一月十二日

一同四貫文

右小鯛貳拾ハ、壹ツ三寸ツ、御臨時御用旁とシテ火
取御かきり用直御買入代払、

十一月十三日

一金三円

右御庭神社今日毎年御祭日ニ候処、別段二本劍舞・長太刀舞・五方鬼神舞・宮毘舞・田之神舞、御望ミニ而御覽、且御神前御備物等社司共計ニ而相備、尤惣人員拾四名ニ相及候付、旁相混候社司中へ被下候而堀之内家卿江相渡候、

十一月十五日

一旧銭貳貫五百文

右 召上御用柿御買入代払、

同日

一金百五拾貳円七錢五厘

内六円五拾貳錢五リ

但壹日貳拾貳錢五リツ、十月十八日より十一月十五

日迄日数貳拾九日分

御家扶

法元太郎左衛門

貳拾三円貳拾錢

内五円八拾錢ツ、

但壹日貳拾錢ツ、十月十八日より十一月十五日迄

日数貳拾九日分ツ、

御家従

相良量右衛門

竹内 勘助

御医師

朝稻 宗助

麦田 才蔵

四円四拾錢

但十月廿五日より十一月十五日迄、日数貳拾貳日分

一日貳拾錢ツ、

御家従

堀井 佐八郎

六円貳拾錢

但十月十六日より十一月十五日、日数三拾壹日分、

一日貳拾錢ツ、

六日

鎌田李左衛門

五円七錢五リ

但十月十八日より十一月十五日迄、日数貳拾九日分

一日拾七錢五リツ、

御家丁

塩元 八郎太

五円四拾貳錢五リ

但十月十六日より十一月十五日迄、日数三拾壹日分

一日同断、

七日

川越 嘉弥太

拾八円六拾錢

^(朱) 壹人四円六拾五錢ツ、

但十月十六日より十一月十五日迄、日数三拾壹日分

一日拾五錢ツ、

脚 貳人

小仕 壹人

御庭人足 壹人

四拾三円五拾錢

^(朱) 壹人四円三拾五錢ツ、

但十月十八日より十一月十五日迄、日数貳拾九日分

一日同断

御駕籠者 六人

脚 壹人

小仕 壹人

女中方小仕貳人

三拾九円拾五錢

内六円拾六錢貳リ五毛ツ、

但十月十八日より十一月十五日迄、日数貳拾九日分

一日貳拾壹錢貳リ五毛ツ、

御年寄 壹人

右同格 壹人

^(朱) 拾貳円三拾貳錢五リ

四円七拾壹錢貳リ五毛ツ、

但日数同断壹日拾六錢九リ五毛ツ、

御側女中 四人

(朱) 拾八円八拾五錢

三円九拾八錢七リ五毛ツ、

但同断壹日拾三円七リ五毛ツ、

御次女中 貳人

(朱) 七円九拾七錢五リツ、

右半日当銘々内書之通被下払、

(朱) 合四錢貳百九拾壹貫百六拾四文

金ニシテ七円六拾六錢貳リ貳毛

(朱) 合金百九拾貳円三拾九錢九リ八毛

(朱) 二口

合金貳百円六錢貳厘

但十月十九日より十一月十五日まで之払

十一月十五日

一金四円

内貳円五拾錢

但東方村長木踊人員拾六人、手付貳人、主取三人、

地方并人相作三人、名主壹人、都合貳拾五人江御

老より御包物相添被下、

壹円五拾錢

但拾貳町村棒踊人員六人、手付壹人、主取三人、地

方并人相作五人、都合拾五人江御包物同断二而被

下、

右今日御貳度渡被遊御覽候付、御庭二而被下相成候事、

十一月十五日

一旧錢貳貫貳百文

(朱) 金ニシテ五錢七リ八毛

右柿御買入代払

十一月十六日

一金三円六拾錢

内壹円三拾錢

大川尻歌うたひ四人江

壹円三拾錢

大脇同四人江

五拾錢

大川尻

五拾錢

大脇

右惣湯之浜 御湯掛浜崎太平次所江

御立寄ニ而被召呼候ニ付被下払、

十一月十七日

一金五拾錢

右山下御邸より御庭人足市太郎江御用物直持ニ而昨夜

到着、今日被差返候付差掛中途入費も可有之付、内ニ

シテ被下候尤之段、山下御邸執事方へ問合越候事、

十一月十七日

一旧銭貳貫文

(米) 金ニシテ五錢貳リ九毛

右 みえ様江御土産被進、御用之赤貝・塩辛壺貳ツ代

御老計ニ而御買入相成候由ニ而、御年寄より代料差返

候様被差進候処、梅野受取候也、

但赤貝之儀は追而御買入之段承、

十一月十八日

一金壹円

外御買入紬縞一反添

右当御茶屋番脇田仲之進、祖母年齢八十式歳ニ罷成候

段、被 可召通御祝ヒ被下払、

十一月廿日

一旧銭三貫文

(米) 金ニシテ七錢九リ

右召上御用柿五拾御買入代、塩元八郎兵衛

十一月廿二日

一金拾錢八厘

右召上御臨時御用、甘鯛小振り六ツ魚屋より御買入代、

小仕国二郎渡、

十一月廿三日

一金拾壹錢九リ

旧錢ニシテ三貫五百式拾四文

右御臨時御用、甘鯛六ツ、巻ツ六寸五ツ浜崎方外魚壳
持參ニ而御買入代払、

十一月廿三日

一金貳円三拾錢

右合調踊人員拾貳人、手付貳人、地方人相作八人、名
壹人江大踊於御庭被遊

御覽候付御老より御包物相添踊濟、直ニ於御庭被下相
成候事、

十一月廿六日

一金七錢九厘

旧錢ニシテ三貫文

右召上御用柿五拾御買入代払、

十一月廿七日

一金壹円

小仕之伊右衛門

右一昨日御用物直持ニ而到着被留置、今日被差返往来

御用物等も有之候付被下相成、猶於其御返吟味之上宜

御取計有之旨、執事へ申越、右之通相払、

十一月廿八日

一金拾七錢貳厘

錢ニシテ六貫五百文

内四貫文

貳貫五百文

船賃錢払、

浜浦より当所迄馬壹疋駄賃分払、

右山下執事方より昨日仕出之吹巻ツ、酒樽貳挺、ひれ

こ四ツ、粟包五ツ、桐油包箱式ツ、横封式通、風呂敷

包式ツ、湊浦より相届候付内書通船運賃并人馬賃錢払、

坂元八郎太へ渡、

十二月二日

一錢六貫九百文

但旧錢

(米) 金ニシテ拾八錢壹リ六毛

右御菓子調御用小豆三升御買入代払、

同日

一旧銭三貫文

(米) 金ニシテ七錢九リ

右召上御用柿代払、

十二月四日

一金壹円

右

公子方湊浦より(延繩)拼江繩御釣御出之処、大石鯛四枚、御

獵有之、舟中共別段骨折いたし候、御挨拶旁とシテ被

下払、

十二月四日

一金拾貳円

但真米貳石先代、石二付六円貳錢六リ七毛三糸

御茶屋番

脇田 仲之進

右先達而無禄ニ而従前之通相勤度願出、願之通被仰下

候得共、御扶持米四石半季分は、当夏相頂キ候段申出

候付、下半季貳石分代ニシテ先般廢官人員之例ニ準シ

被下払、

十二月五日

一金壹円

右三邦丸婦舟之報知書脚之吉夜前拾字頃到着、雨天ニ

而太儀之訳も有之、尤鹿見島にて被下無之由ニ付右之

通被下払、

十二月六日

一金拾円貳拾錢

内三拾錢ト琉紬縞一反添

当所戸長

田中仲五郎

貳拾錢ツ、ト西洋布一反ツ、添

右同副戸長

海江田喜右衛門

外貳人

右御乗船場荷物差引旁出後御世話申上ニ而被下、

七円五拾銭ト琉紬縞一反、久米縞一反、琉白紬一反
添

一金百式拾五円四拾銭
内五円四拾銭

当所副戸長

但一日式拾式銭五リツ、

有馬 孫右衛門

御家扶

右 御滞在中、混と万端御頼入ニ付骨折、且進上物御

法元太郎左衛門

返混シ被下相成候、

式拾八円八拾銭

五拾銭 琉木綿縞一端ト西洋布一端相添

内四円八拾銭ツ、

御茶や番

但一日式拾銭ツ、

脇田 仲之進

御家従

右骨折、且進上物御返相混被下相成候、

相良量右衛門

八拾銭

坂井 佐八郎

但菅人式拾分賦、西洋布一反相添

竹内 勘助

当所戸長 四人

鎌田李左衛門

五拾銭 御品無之

御いし

喜入戸長中

朝稻 宗助

右式行、進上物御返被下、

園田 才藏

右之通被下払、

八円四拾銭

内四円貳拾錢ツ、

但一日拾七錢五リツ、

御家丁

塩元 八郎太

川越 嘉弥太

五拾円四拾錢

内三円六拾錢ツ、

一日拾五錢ツ、

脚

佐次郎

勘助

袈裟次郎

御駕籠者

藤次郎

佐兵衛

森右衛門

小助

新右衛門

清吉

執事方小仕

金太

吉左衛門

御庭人足

喜助

女中方小仕

太郎

直助

拾円貳拾錢

内五円拾錢ツ、

一日貳拾壹錢貳リ五毛ツ、

御年寄

幾尾

むら

拾五円六拾錢

内三円九拾銭ツ、

一日拾六銭貳リ五毛ツ、

御側女中

さく

とえ

恵ひ

御子様御付

右同

はる

六円六拾銭

内三円三拾銭ツ、

一日拾三銭七リ五毛ツ、

御次女中

みな

御子様御付

右同

まき

右子十一月十六日より同十二月九日迄、半月給被下払、

但御日限御究ニ付三日分ハ引寄被下相成候事、

十二月七日

一金貳拾銭 西洋布一反添

摺湯之浜

弁吉

右御蒸場御雪隠調方ハ勿論、諸御手当等骨折いたし

候付被下、有馬孫右衛門へ引渡候事、

十二月七日

一旧銭拾七貫五百文

右先達而金ニシテ四拾六銭五厘二二四、御土産唐芋拾

八俵外明樽五丁并小風呂沓ツ、湊より鹿兒島江小廻シ

船便より差廻包賃私、

十二月七日

一金五拾銭

右当十一月九日、今和泉土族石原喜右衛門江進上物御

返被下品々相添、指遣置代金ニ而御届取替払相成居候

付致返銀候様、御年寄申出候付被渡候、

十二月七日

一金六拾三錢貳リ

旧錢ニシテ貳拾四貫拾六文御受

右今和泉戸長方江御注文相成居候、小島射筒火繩五拾
曲之内拾六曲出来いたし候由、副戸長宅間道明外売人
より為持越、尤壹曲ニ付壹貫五百文ツ、金ニシテ本
行所被及候付帰便より差越候事、

十二月八日

一旧錢貳貫文

金ニシテ五錢貳リ七毛

右赤貝貳升御買入代払、

十二月九日

一金拾円

右 御帰御船中被下御用等御用心金旁とシテ払、

十二月九日

一金壹円五拾錢

但売人前三拾錢

右御長屋五間受込人数五人江諸入付道具損銀之、彼是

ニシテ被下払、

十二月十日

一金拾六円九拾貳錢五毛

右御滞在中御常式、御臨時御用野菜并鶏玉子、其外有
馬孫右衛門江御頼入ニ而御買入、取束一帳を以品立直
成召銀高を以申出候ニ付相払、

但有馬孫右衛門帳面あり、

十二月八日

一金三拾円

子十月十七日

一金百円

右本立、

子十月十九日

一同八拾三円四拾錢四厘八毛

右

真之助様御墓詣御用途殘金二兩、御供千田武之助より

差出候付本立、

十月

一錢百貫文

但旧錢

右浜崎手伝孝之丞より受取本立、

十一月四日

一錢百八拾五貫文

右同断、

十一月十二日

一金三拾円

右同断、

十一月十五日

一旧錢百貫文

右同断、

但本日半日当渡方二付半星用、

(朱) 金貳百拾三円四拾錢四り八毛

旧錢三百八拾五貫文

金ニシテ拾円拾三錢卷り五毛

二口

金貳百貳拾三円五拾三錢六り三毛

十一月十六日

一金拾円

右浜崎所江

御立寄之節孝之丞より受取本立、

十一月廿三日

一金三拾円(朱、以下同シ)

右御茶や番脇田仲之進江当年中祿金被下旁ニシテ受取

本立、

十二月六日

一金百五拾円

右半日当被下等二付同断、

十二月八日

一同三拾円

右所中夫方ニ被下ニ付同断、

四口合

ノ式百式拾円

惣合金四百四拾三円五拾三銭六リ三毛

十二月十二日

一金壹円五拾銭

右御長屋敷下之古畳四拾式枚申受上納金ニ而本立、

又

惣合四百四拾五円三銭六リ三毛

内四百式拾三円式拾五銭六厘

右払

差引残

金式拾壹円七拾八銭三毛

子十月

一金式拾五円式拾六銭三リ壹毛

旧銭ニシテ九百六拾貫文

右 御光越前中島伝右衛門より御修覆料浜崎方より相

請取候段申出、浜崎方より相渡候旨申出候付、此所へ

本立、

但中島伝右衛門取扱払、細事一帳を以申出候付、此帳

内払江相立候、

十二月

一金式百拾四円六拾銭五リ四毛

右御滞在中御用途金五百円、浜崎太平次江御預ケ金

時々受取残り、皆円請取本、

一金八拾銭六厘

右御長屋申受料金之内より本立、

合金六百八拾五円七拾壹銭八毛

(米) 内壹円五拾銭御長屋古畳代、

八拾銭六リ御長屋申受料金

右皆払

(米) 二二口

ノ式円三拾銭六リ

右別段私切二不及株

差引金六百八拾三円四拾錢四り八毛」

外二

金四百九拾円八拾八錢五り七毛

内八拾錢六り

右御湯治方私金不足江相払、

右御長屋入札代金上納之株二而四百九拾円御格護、残

七錢九り七毛小払方江本立、

右御着立公私御荷物人馬御法之賃分二而御払之賦候処、

従前之通公役同様二而御奉公いたし度、戸長より申出

相成候、此節迄は先規之振合通、在方百姓共漸々通船

等相届候者迄も相勤被下払、尤有馬孫右衛門江引渡候

事、

兩二付三拾八貫文充

旧錢ニシテ千九百貫文

右御往来三邦丸江御乗船二而益一度ツ、御供中江賄、

仕出もいたし旁之御挨拶とシテ御伺濟之上被下相成候

付吉留直次郎江引渡候処御礼申出候事、

十二月十三日

一同拾九錢七り四毛

旧錢ニシテ七貫五百文

右今和泉土族石原良右衛門江小鳥射筒火繩御注文相成

居候処、五曲出来差遣候付一曲二付壹貫五百文ツ、二

而御買入代払、

十二月十四日

一同五円拾貳錢

御庭方人足

喜助

(米) 一「惣合金四百貳拾三円貳拾五錢六厘

一金五拾円

右二月田御茶屋御修履、彼是とシテ日數貳拾四日相詰、
日当三拾錢ツ、ニシテ七円貳拾錢ト差越候、善八御雇

入舟より差越候ニ付片道旅費添、帰リ之片道拾六錢余、

時々御用御肴代之品当ハ右之通相及候、

外ニ御帰館跡江両日被召殘候付、日当等六拾錢ト片道

三円貳拾九錢三リ八毛

旅費拾六錢余、合八円拾貳錢余、内三円は御修補前差

但前段御挨拶被下、

越候節被下候ニ付差引本行通被下相成候事、

外紬縞ニ反相添

一金四円三拾三錢貳リ八毛

浜崎太平次

旧錢ニシテ百六拾四貫六百四拾八文

右内書通 召上御肴進上御返候分、且摺之浜より

右御滞在中浜崎方より諸品御買入料払、

御歸リ掛御立寄被遊候節進上物等仕、其前

一同百六拾三円貳拾貳錢九リ四毛

真之助様御一泊之后も併繩御釣之節被 為入候節ニも

旧錢ニシテ六千貳百貳貫七百拾八文

御膳進上仕候付、彼是被相混御挨拶被下払、

右御滞在五拾三日、人員千八百三拾五人、御賄被下候

一同五拾錢

ニ付浜崎太平次方より仕出料払、

外ニ久米縞一反添

但壹人壹日三度、夕一度皿なしニ而三度分三貫三百

右同人手代

七拾七文、并し金ニシテ八錢八リ八毛六三二ツ、

池水孝之丞

一金拾五円

右御滞在中混と

内拾壹円七拾錢六リ貳毛

御茶屋内へ詰通諸御用向相勤候付被下払、

但御滞在中、御常式御臨時召上、御用御肴進上仕度

十二月廿七日立

申出候ニ付、御用納屋より御買入御定直成ニ而、

一金貳拾四円七錢五リ貳毛

旧銭ニシテ九百拾四貫八百五拾壹文

右中島伝右衛門宮繕向、諸弘総帳を以申出候ニ付、比所へ弘相立、

惣

合金六百八拾五円七拾壹銭八毛

但銭之儀も金作ニ而惣挙、

横帳原寸 縦二三・五厘 横四〇厘 二二枚

三毛一 内田政風ヨリ奈良原繁へ

承恵社、県庁別途金問題約定案

(包紙ウツ書)
「東郷大兄

へ

明治六年第五月県令上申書及ヒ同九年第四月県令

依頼、承恵社屯金并取引等ノ株証書類年賦返済等

取設ノ義、御直名ヲ以テ県令へ御委任ニ付遂熟

議、更ニ左条ノ約定ヲ結度候事、

一此度更ニ約定セントスル所以ハ、元来廢藩置県ノ際金

穀其他ノ品物公私ノ区域ヲ立テス、藩制ノ儘県庁へ据

置ニナリ、県令ノ意ヲ以テ悉皆取扱来候義、旧藩々ヨ

リ各県へ次送ノ体裁ニ触レ、最モ不名義ノ甚キモノト

雖、今日ト成リ水源明カニ 島津家御藏金無紛上ハ、

亦今日迄ノ出納モ随テ詳カナラサレハ、条理判然タル

モノニアラスト雖年数モ相立タルモノニテ、最初ヨリ

是レヲモ取束ネ明カニセント欲トモ得ヘカラサルハ、

亦方々然トシテ推知セラル、故ニ此ノ混淆ノ大弊ヲ矯

ルニ由ナケレハ措テ之レヲ問フノ意ニアラス、最モ此

事件ハ過日粗其意ヲ述ヘ、既ニ御熟得ニ及ヘリ、因テ

此度はレヲ改正シ、当分県庁ニ存在且社々へ有之殘金

ヲ大本ニ据ヘ、自今混淆酌雜ノ憂ナキ為メ、双方証書

ヲ交換シ、将来異義無之様更ニ嚴重ノ規則ヲ設ケ、県

令明治六年第五月上申ニ基キ万事取扱、実事不朽ノ策

画餅ニ帰セス、其ノ事ノ挙ラン事ヲ乞ハントス、因テ

左条ニ其目ヲ掲ル者也、

一 当今県庁亦ハ各社へ存在スル別途金改正スル処ノ大意
左ノ通

県庁在 金

一金何万何千何百何十何錢何厘何毛

内金何ととと円何とと錢

右現有金二候、

金何ととと円何とと錢

右誰某へ貸下別紙名簿ノ通二候、

何と社

一金何万何とと錢

内書等前条ニ同シ、

合金何十何万何千何百何十何錢何厘何毛

一 前条ノ通県庁各社ノ殘金ヲ更ニ元金ト立ルニ至テハ、

是迄ノ出納帳ニ基キ差引ヲ究メ、記載スル出納課長及

ヒ各社ノ社長相当ノ義務ニシテ異義ナキ事トス、

但諸帳改メタル以上ハ古帳記ハ後年ノ証トシ備置ヘ

キ事、

一 是迄此別途金ヨリ県下人民へ県令名前ノ辭令ヲ以テ給
シタルモアランカ、果シテ然ラハ自今改之、判然其實
ヲ明記給与可有之事、

一 御賞典禄ヨリ学校師員月謝、或ハ学校修繕、或ハ諸雜
費、或ハ生徒称誉等ノ事同断之事、

一 各社毎ニ金額ノ金運転スルノ利足ヲ以テ諸給与ニ宛テ、
或ハ損益等ヲ詳ニ記載シ、其利潤ヲ以テ之レヲ仕払ヒ、
不引足分ハ具状ノ上へ取扱相成度事、

一 各社等元金ヨリ給与等無之テ不相濟事情アラハ、其事
件ヲ具状シ承届候上同断ノ事、

一 此各社ニ存在スル処ノ該金 御両邸、自費ニ自用ス可
カラサル勿論トイヘトモ、時世ノ変遷ニ随ヒ国事ノ為
メ不得止、事情アラハ其事ヲ明カニ示シ 御両邸へ可

引挙權ヲ可有之事、

一 改テ約定シ規則ヲ設立シタル以上ニ於テ、其実挙ラサ
ルアレハ社員ヲ黜陟スル權 御両邸へ同断ノ事、

一 新規則并ニ社々ノ名簿等 御両邸へ分上アルヘキ事、

右ノ通御熟談於相整者 御両邸御素志モ相立、随テ県令ノ願意モ貫キ、永世不朽当県下人民 御恩沢ニ浴シ可申、旁御熟考アラン事ヲ仰ク、

明治九年十一月廿四日 内田政風

奈良原繁殿

右通認メ奈良原へ遣シ候ノ処、一覽聊存寄無之、令モ必
悦喜同意可有之ハ論ヲ俟ス、旁安心トノ答ニ御座候事、

冊子原寸 縦二八・五糧

包紙原寸 縦二七・五糧

横二〇・三糧 三枚

横三七・八糧

三三三 肥後某ヨリ政府へノ質問

神社ノ社字不当ニ就テ

(表紙)
「上某官質問積年之疑草稿」

草莽布衣肥後某誠恐誠惶謹テ書ヲ

某官某公閣下ニ上呈シ、敢テ一事ノ積年疑フテ而シテ

解シ得サル所ヲ質問ス、夫某一事ノ積年疑フテ而シテ解シ得サル所、何ントナレハ則

皇国多クハ諸神ノ廟ヲ称シテ某ノ神社ト曰フ、即チ加茂神社及ヒ招魂社ノ類是也、某窃カニ其字義ヲ考フルニ、社ハ則社稷ノ社ニシテ、而シテ諸神ノ廟ハ則祠堂ノ祠ノ字適當ス可キ也、乃松苗氏嘗テ言フコトアリ、曰ク、

本朝神祠ヲ謂ツテ社ト為ル者多シト、而シテ凡ソ正史モ亦其祠ヲ以テ書セサル者無シ、既ニ松苗氏ノ說此クノ如シ、正史モ亦其祠ヲ以テ書セサル者無之、然リ而シテ現在ノ祠堂ハ猶悉ク某社ト称シ、而シテ其祠ヲ以テ称スル者之レ有ルヲ聞カス、蓋故アル歟、某未嘗テ其所以ヲ知ラサルナリ、然リト雖トモ凡ソ事ハ神ニ事フルヨリ重キハ莫シ、若シ祭祀ニ少シク其当ヲ失スレハ、則名ケテ淫祀ト曰フ、淫祀ハ神饗ケス、況ヤ常ニ不適當ノ文字ヲ以テ之カ廟号ヲ立、而シテ人猥リニ之ヲ唱フルヤ、

皇国素ヨリ

皇国ノ文字有ツテ而シテ之レヲ用ユレハ、則無論ナリ、今漢土ノ文字ヲ用ヒサルヲ得サレハ、則必ス其字義ニ循カハズンハアル可カラス、甚シキニ至ツテハ其県ノ祠官某嘗テ東京ニ来リ、事畢リ其県ニ帰ルヲ謂ツテ某ノ曰ヲ以テ歸社セント欲スト曰フ者アリ、方今世ニ某ノ会社、某ノ商社ト称スル者許多之レ有リ、然レハ則祠官某モ亦常ニ同僚相聚会シテ、而シテ神事ヲ奉行スル処ヲ謂ツテ社ト曰フカ、某恐クハ謂ヘラク、然ラスト、某ハ応ニ只其神社ニ歸リ、事フルノ故ヲ以テ歸社スルト曰フ耳ナルベシ、然レハ則神社ト会社ト商社ト一様之ヲ視テ、而シテ遂ニ神ト已レト同社スル者ニ似タリ、何ソ無知妄言ノ甚シキヤ、今夫神廟ヲ称シテ皆某社ト曰ヒ、衆人聚会シ、及ヒ商売ヲ行フ処モ亦之レヲ某社ト曰ヒ、加之葬車ヲ造テ以テ之ヲ藏シテ死ヲ送ル者ノ需メニ応シ、之ヲ出シ貸ス処モ亦之ヲ永寿社ト曰ヘハ、則文盲婦女子ノ社ノ字有ルコトヲ知テ、而シ

テ祠ノ字有ルコトヲ知ラサル者ハ、毎ニ此類ノ失言有ルコト亦宜ヘナラスヤ、且其衆人聚会シ、及ヒ商売ヲ行フ処ヲ謂ツテ社ト曰フ者ハ、蓋社稷ノ社トハ字義又大ヒニ異ナリ、文運日ニ開ケ名実益相称フノ時ナレハ、則是等ノ事

朝廷先ツ判然改正シテ、而シテ其布令ノ出ル、某之レヲ企俟ツコト今ニ久シ、然レトモ未タ

廷議ノ此ニ及フヲ聞カサル也、而シテ事至重故ヘニ、朝廷或ハ草莽匹夫ノ闕スル所ニ非スト曰ハンモ、亦測ル可カラサル也、然レトモ苟モ人臣タル者思フテ言ハスンハアル可カラス、言テ尽サスンハアル可カラス、是ニ於テ黙止スルニ忍ヒス、分ヲ犯シテ質問ス、万一理有リ、

廷議若シ人ヲ以テ言ヲ廢テサレハ、則之レヲ上、

天子ニ奏シ、

天子之レヲ

神祇ニ告ケ玉ヒ、而シテ社稷ノ社ニ非サル他ハ、皆某祠

某祠ト改メ称シ玉フコトヲ是レ願フ、若シ然ラサレハ

所謂名正シカラサレハ、則言順カハス、言順カハサレ

ハ則事成ラサルニテ某恐クハ謂ヘラク、

天子

神祇ヲ尊崇シ玉フニ、未タ十分ヲ尽シ玉ハス、且ツ

皇國日ニ文明ノ名有リト雖トモ、此重事ハ却テ其名ト

相称ハサル者ニ似タリ、然レトモ若シ其某社ノ号故有

ツテ而シテ之レヲ称シ、某ノ言終ニ採ルニ足ラサレハ、

伏テ冀クハ詳ラカニ其所以ヲ教ヘ論シテ、而シテ積年

ノ疑團ヲ開發シ玉ヘ、若シ或ハ採ル可クシテ

朝廷直チニ之レカ改正ヲ施サハ、某其改正スル所ノ現

事ヲ見テ以テ採ラル、ヲ知レハ、則敢テ故ラニ垂示ヲ

聞クコトヲ願ハサル也、若夫社祠兩字ノ字義ノ康熙字典

典、及ヒ数多ノ經典ニ詳ラカナリ、某復之レヲ弁セス、

明治九年某月某日布衣某、誠惶誠懼頓首頓首謹言、

冊子原寸 縦二五糎 横一七・五糎 五枚

三三 山下邸家令ヨリ町田孫大夫へ

二通

国事勤勞事蹟編輯ニ付

二七七三ノ一

写

国事勤勞事蹟編輯ニ付一身經歷ヲ編次シ、正副式本可差

出旨、明治七年二月中御達相成候処、正三位沢為量始九

名ノ分、今ニ御差廻無之編纂差支候間、早々取調御差出

可有之候、此段及御督促候也、

明治九年十二月廿八日

史官

東京府御中

文書原寸 縦一六・二糎 横三八糎

二七七三ノ二

別紙写之通御達有之候付為御心得差上候間、猶亦宜様御

頼申上候也、

山下邸

一月三十日

家令

町田孫太夫殿

文書原寸 縦一六・二種 横二〇種

三書 大久保内務卿ヨリ鹿児島県庁へノ内達

今般鹿児島県下騷擾ニ付テハ種々巷説モ有之候得共、右ハ全ク県下ノ私学校党過激少年輩ノ挙動ニ出候次第ニテ、元ヨリ旧藩主父子等ニ連及致候義無之、且西郷隆盛ハ過激少年ニ対シ大義名分ヲ以、屢説諭ニ尽力致候処、終ニ承服ニ不至、不得止身ヲ避ケ候趣、該県令ニ於テモ毫モ方向ヲ不失、充分鎮撫ニ尽力致候次第、委細具狀之旨有之候間、今彼ノ地ノ事情ニ寄如何之御処置可相成哉モ難計候得共、決而管下士民動揺無之様取締筋注意致シ、人心鎮靜候様可取計、此旨及内達候事、

二月十三日

内務卿 (次頭)

文書原寸 縦一九・二種 横八五種

三書 西南役ニ付勅書

鹿児島県下逆徒熊本県ニ乱入、朝憲ヲ蔑如シ官兵ニ抗シ、悖乱ノ挙動ニ及フ、朕既ニ征討ノ令ヲ布キ、二品親王有栖川熾仁ヲ以テ征討総督ト為シ、進発ヲ命セリ、汝久光実ニ國ノ元功、朕カ素ヨリ信重スル所、今特ニ議官柳原前光ヲ遣シ、朕カ旨ヲ諭サシム、其レ能ク爾ノ誠意ヲ致セヨ、

文書原寸 縦二・八種 包紙原寸 縦二七・五種

横二八・八種

横三九・五種

三書 久光忠義ニ公ヨリ三条太政大臣へ

珍彦忠欽ニ公子上京ニ付

先キニ、勅使議官柳原前光ヲ以テ 詔命ノ趣キ謹而拝承仕、則上京誠意上陳仕度奉存候得共、方今当県下人心紛紜筆上ノ敢テ及フヘキニアラス、故ニ止ヲ得ス 勅使御礼トシテ島津珍彦・島津忠欽外ニ副使兩人随從セシメ、愚意巨細申合、 闕下へ差登上陳為仕候、近比恐入候得

共、無位ノ子弟副使迄モ閣下始メ執政ノ末席ニ被召出、

虚心ヲ以テ御聞取奏 聞被下度奉仰願候、誠惶謹言、

鹿兒島県在留

從三位島津忠義

三月三十日

從二位島津久光

太政大臣三条美美殿

文書原寸 統一九編 横九六編

〇三七 副使山本孫九郎内田政風ヨリ久光公ヘノ伺

書

珍彦忠欽両使節ノ上京ニ付

三六 朝命ニ対スル久光公ノ奉答書

見込上申手扣

臣等ニ此度誠意ヲ致セヨトノ 勅諭ヲ賜フ、愚魯ノ

臣等感佩ノ至ニ堪ス、故ニ聊胸臆ニ包藏スルコトナ

ク、之ヲ左ニ上陳ス、

一 当県士族西郷隆盛・桐野利秋・篠原国幹始メ党与凡二

万人、政府ヘ訊問ノ義有之ト称シ熊本県ニ乱入、朝

憲ヲ蔑如ス、故ニ征討ノ令ヲ被発ノ旨拝承仕、旧情モ

有之候得ハ実以恐縮ノ至ニ堪ス、伏テ御垂憐被下度、

乍去 朝憲ヲ奉蔑如程ノ者共今日ニ至リ、臣等ノ愚意

敢テ不用義得ト御了解被下度仰処ニ候、

一 西郷隆盛等此度政府ヘ訊問トシテ多勢兵器ヲ携ヘ出行

セシハ、既ニ臣道ヲ失シタル、其罪自大ナリ、且内務

卿大久保利通・大警視川路利良ヨリ内命ヲ受、数人帰

省等ニ事ヨセ離間等ノ策ヲ行フ云々事發覺ノ義、妄説

ノ布達拝觀ス、此義臣等ノ大ニ疑惑スル処ナリ、其故

如何トナレハ道程数百里ヲ隔テ、則之レヲ妄説ト見認

メラル、西郷等ニ於テ必ス其罪ニ伏スヘカラス、是レ

至理至平ノ所分ニアラサルカ故ナリ、鹿兒島県人民ニ

於テハ最確証ヲ挙ケ之レヲ見聞シタルモノニテ、或ハ

間ヲ使ヒ同意ノ体ヲナシタルアリ、或ハ自訴シタルア

リ、故ニ傍人モ挙テ之レヲ証トシテ疑ハサル所ナリ、

一 彈藥掠奪ハ捕縛人ノ前ナルハ臣等モ保証スル処ナリ、然レトモ西郷ハ大隅国へ旅行中之ヲ聞テ大ニ憤怒シ、
僞暴ノ挙動ヲ譴責シタルハ県下人民ノ能ク知ル処ナリ、
其際ニ当リ捕縛人ノ事露頭シ、之ヨリ意ヲ決シテ衆ト
訊問ノ事ヲ議定シタリト曰フ、

一 西郷等此以前、征韓論破裂シ、職ヲ辞シ、政府ノ許可
ヲ俟ス下県セシハ、既ニ臣礼ヲ失シ其過チ大ナリ、然
レトモ政府之レヲ責ムルコト能ハス、昨今迄非職大将
ノ任ニ位ス、若当節ニ当テ更ニ之レヲ責ムルトモ烏有
ニ歸スヘシ、亦在県シテ恣ニ横行ストモ国憲ニ触レサ
ルトキハ、政府ノ威力トイヘトモ之レヲ抑圧スヘキノ
權アルヘカラス、亦彈藥ノ掠奪ハ壯士輩ノ僞暴ニ起リ
タルモノニシテ、西郷此一事ニ因テ此度ノ挙動ニ推及
ホス名義ナキニハ、必ス別ニ鎮靜ノ道ヲ計ルヘキカ、
是等ハ糾弾ノ上ヘニアラサレハ明瞭スヘカラス、
一 古今国家不軌ヲ計ル、其種類区域アル挙テ数ヘカタクシ、
然トイヘトモ事ヲ挙ケサル未然ニ露頭スレハ、其主領

而已ヲ所分シ、假令連判名簿確乎タリトモ時ノ執權大
量アレハ連判幟ヲ焼タルアリ、之レヲ称シテ美事トス、
毛ヲ吹キ疵ヲ求ムルヲ小人トス、是レ事ヲ執ルモノ、
量ノ大小ニ因テ美惡ノ分ル処、最モ注意スヘキ事ナル
ヘシ、今ヤ外国我国ヲ覬覦シ、古ヘノ 皇国ニアラス、
能々思慮ヲ加ヘサレハ不測ノ變ヲ生ス、鑑ミサルヘケ
ンヤ、然リトイヘトモ是レヲ以テ国法ヲ烏有トスルニ
アラス、之レヲ所置スルニ政府公明正大ノ所分ノ外更
ニ道アル可ラス、

一 夫賢者在位能者在職テ、無偏無党文武ノ官人身ヲ国家
ニ致シ衆ヲ誘導セハ、外ハ以テ各国隙ヲ伺フノ憂ナク、
内ハ以テ万民命令ヲ遵奉シ一揆強盜ノ難アルヘカラス、
然ルニ此近年打続キ士族ニ至テハ肥前ニ江藤・島ノ党
アリ、肥後ニ敬神党、長門ニ前原党、目今西郷党アリ、
百姓一揆ハ各県拳ルニ違アラス、外ハ各国ノ指笑ヲ受、
内ハ国家ノ疲弊大ニシテ負債拳テ数ヘカタカラン、其
根源ハ人民ノ堪ヘサル処アルカ故ナラン、各位虚心ニ

シテ自反セハ明カナルヘシ、此度閣下ノ布達ハ一往ノ
糾弾ナク之レヲ妄説トス、假令真ニ妄説ト見認ラルト
モ再応取調ノ上ニアラサレハ、政府ノ命令トイヘトモ
人民必ス信認スルモノニアラス、是レ則

帝王一人ノ私スルモノニアラサルニ因テナリ、故弥国
家ノ危キコト累卵ノ如シ、仰願クハ至急休戦ノ命ヲ総
督府ヘ下サレ、此度ノ巨魁人員ヲ定メ、平隠ノ所分ヲ
以テ中途ヲ護送シ、大久保・川路モ随テ之レヲ召シ、
至理至当聊偏頗ノ所分ナク、各法官ヘ渡シ奏任以上其
席ニ列坐シ、非常ノ裁判ヲ開キ、其結局ニ至リ律ニ照
シテ之レヲ罪シ、其上若異議ヲ生セハ断然ト罪ヲ鳴シ、
之レヲ征討セラレテ可ナリ、乞フ、速ニ実事施行アラ
ン事ヲ、

右ハ今般 勅諭ヲ拝戴シ、当今ノ時態ヲ顰眉憂慮ス
ルノ余リ忌諱ヲ憚カラス、臣等ノ誠意ヲ表スル如斯、
猶巨細子弟等江申付越候、閣下意ヲ平ニシ之レヲ聴
納セハ、幾多ノ軍士活路ヲ得、上ハ 皇国ヲ永世ニ

維持シ、下ハ無罪ノ良民塗炭ノ苦ヲ免レンコトヲ冀
望スル而已、

冊子原寸 縦二八・五糎 横二二糎 六枚

三六 久光公ヨリ三条相国ヘノ上申手控

休戦及陪審裁判ノ件

本文書八二七七八号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二八・二糎 横二二糎 七枚

三〇 品川弥二郎熊本籠城日記

熊本籠城日記

明治十年二月十八日、熊本県下小島ヨリ上陸、同夜十時
過熊本県庁ニ着ス、賊兵ハ既ニ当県下佐敷宿ニ着スルト
聞キ、大久保・伊藤両参議ヘ電信ヲ送り、追討ノ命早く
御発シアリ度旨ヲ報ス、二月十九日午前十一時、鎮台本
營誤テ火ヲ失シ、天守ヲ始メ不残焼失シ、唯宇土櫓ノ一
棟ヲ残スノミニシテ焰火延ヒテ、藪ノ内・坪井・千反畑

(何レモ城) 等千戸余焼失ス、城中貯ユル処ノ糧米(八百石)、其外悉ク烏有二属スルヲ以、県官各所ニ派出シテ糧食ノ買入ニ着手ス、○此日鎮台ノ給仕、人夫六七名遁逃ス、本営ニ放火セシハ恐クハ彼等ナランカ、○昨日鎮台ニテ非常ノ号砲ヲ発スルヤ、直チニ城ノ四方ニ警備線ヲ密ニシテ台兵守備ヲ嚴ニス、県庁ハ城ノ尖線内ニ在ルヲ以テ移庁ノ義紛々起リシカ、人心ニ關係スルヲ以今日迄遲マズ、鎮台營ノ失火スルヤ、庁中混雜一方ナラサレハ、本庁江ハ一等屬近藤正行ト外十四名ヲ留メ、終ニ御船之仮庁ヲ設ケテ転移ス、○今日午前、鹿児島県暴徒征討被仰出候、有栖川宮江総督被仰トノ電報來ル、二月廿日午後、賊軍川尻駅(熊本ヨリ二里)ニ着ス、昨日鎮台ノ出火ヨリ引続キ熊本市中ハ炎焰天ニ漲リ、要衝ニ在ル架橋ハ鎮台ヨリ破壊シ、人民ハ難ヲ避ケントテ東奔西走、実ニ目視スルニ不忍ノ況景ナリ、二月廿一日晴天、鎮台兵一中隊ヲ出シテ賊ヲ川尻ニ襲フ、利アラスシテ歸ル、○午後、富岡県令ト共ニ御船ニ出テ熊本鎮台ニ入ル時ニ

城外四ノ市街ニハ台兵電信線ヲ切断シテ通セス、依テ井坂八等屬ヲ久留米電信局ニ遣シ、目下ノ事情ヲ東西京ニ報セシム、○西京ヨリ第一・第二旅団本日出発ノ電報、熊本鎮台ニ來ル、二月廿二日、賊兵熊本ニ進ミ、城ノ四方ニ迫リ攻撃ス(此ノ日ハ小銃ノミ)、我兵大小砲ヲ以テ之ニ応ス、藤崎(城ノ四方)戰尤烈シ、賊ノ七番小隊長宇都宮良右衛門ヲ討取ル、此日樺山中佐・与倉中佐銃創ヲ被リ、与倉ハ病院ニ死ス、昨日來ノ戦情ヲ東西京ニ報セン為、青山八等屬ヲシテ城ヲ出シテ南ノ関ニ行カシム、達セスシテ歸ル、二月廿三日午前第三時、賊兵城ノ西南ニ進撃、藤崎及ヒ古城ニ向テ発砲ス、午後五時ニ至リ戦止ム、此日賊兵大砲ヲ花岡山ニ居ル、此処ハ城中ヲ望トスル一小山ニシテ本丸ヲ去ル、纔ニ二十丁余、加藤氏ノ熊本城ヲ築クヤ、此ノ山ヲ堀下ケンコトヲ欲シ、人民随意ニ土石ヲ取ル事ヲ許スト云フ、此日県庁ヲ立退テ本丸ノ焼跡ニ天幕ヲ張り、以テ雨露ヲ凌ク、此夜、賊兵又城ノ東西ニ迫リ戦フ、二月廿四日午前一時頃ヨリ、賊段山(城ノ西方)ヨリ

砲撃ス、同八時、藤崎ヨリ同断、台兵之二応ス、○開戦ヨリ本日迄、疵傷ニテ入院スル者六十余、○此夜鎮台看囚穴戸某ト共ニ県庁雇古藤某、布田某ヨシテ小島碇泊ノ軍艦ニ消息ヲ通シ、且ツ東西京ノ電報ヲ仕出ス為メ、城中ヨリ潜出セシム、同夜青山八等属ヲ出シテ团兵并二南ノ関ニ在ル仮県庁へ城中ノ消息ヲ通セシム、二月廿五日、賊兵焼残リノ土塀ナト二寄りテ狙撃ス、間ニ弓矢ヲ携へ候者アリ、当県神風連ノ残党カ、○城中酒尽ルヲ以焼残リシ土蔵ニ就キテ酒ヲ求ム、敵兵之為メ遮ラレテ果サスシテ帰ル、○開戦ヨリ今日ニ到ルマテ台兵ノ死スル者三十七名、二月廿六日夕時、植木地方二(熊本城ヲ距ル二里)当リ、頻ニ砲声ノ響アリ、小倉兵或ハ团兵ノ賊軍ト戦フナラント、城中ノ将士快ヲ称セサルナシ、午後六時比ヨリ今日ニ至ルマテ、城ノ四面炎烟絶ヘス、○夜城中ニテ煙火數発ヲ掲ケ春眠ヲ覚ヘス、二月廿七日、聚糧ヲ出シ、兵城南京町ニ於テ大豆三俵・生酒廿四樽ヲ得テ帰ル、○午後第三時、台兵三小隊・巡查一小隊ヲ以テ坂井村二(城

東)突出シ、賊ノ砲台ヲ攻落シ、巢窟ヲ焼キ、第六時帰城ス、此日大迫大尉輕傷ヲ被リ、池端警部即死、二月廿八日、城南洗馬ニ聚糧ニ出シ、兵卒米二十俵ヲ得テ帰ル、○城中牛肉尽テ馬ヲ屠ル、馬肉ノ美ナル賞セサルナシ、○三月一日、去月廿二日之戦ニ台兵藤崎ヨリ賊兵ヲ追撃スルノ際、兵卒斉藤弥七ナル者ノ行情ヲ知ラス、皆以為ク、必ス賊丸ニ中リテ死セリト、其戸ヲ探セトモ得ス、然ルニ本日ニ至リ、藤崎ノ麓ヨリ仰ヒテ麾モノアリ、台兵以テ賊トナシ一丸ヲ発ス、中ラス、尚麾テ止マス、依テ台兵其傍ニ至リ之ヲ見レハ、則先ノ斉藤某ニテ頬部及足脛ヲ射徹サレ、白昼動ク時ハ賊ニ認ラレンコトヲ恐れ、菰ヲ蒙リテ静ニ伏シ、夜ハ間ヲ伺ヒ、僅ニ葡伏シ、八日ヲ経テ終ニ帰營セリ、其間固ヨリ一飯食ヲナサス、疲勞甚シト雖トモ八日間ノ艱苦ヲ相語レリ、○本日城中ノ兵糧ヲ実査スルニ現石六百石余アリ、尚廿三日ヲ支ユヘキト云フ、頃日一日分廿九石ヲ費ス、三月二日、坪井・京町辺ニテ米五十俵ヲ得ル、三月三日、鎮台ヨリ外情探索

ニ出シ宍戸某婦營シテ、高瀬・南ノ関辺ノ情ヲ告ク、○
 午前第九時比ヨリ高瀬筋方ニ當リ大小銃ノ声遙ニ聞ヘリ、
 三月四日、昨日來賊ノ砲台花岡山ヨリ本營ニ向テ不絶発
 砲ス、三月五日、開戦已來本月二日迄、我兵戦死スル者
 五十二人、輕重傷ヲ受ル者都合百八十二人ナリ、三月六
 日、鎮台ノテントヲ出テ、又県庁ニ移住ス、三月七日午
 前八時過、賊兵城ノ東南ヨリ大小銃ニテ烈シク攻撃ス、
 暫時ニテ去ル、三月八日・九日・十日、例ノ如ク花岡山
 所々ノ砲台ヨリ発砲シ、小銃ノ小迫合アルノミ、三月十
 一日午前、賊兵ヨリ左ノ矢文ヲ御山村(城ノ西)ヘ散射
 セリ、

今般政府妄ニ暗殺ヲ謀リ、自ラ国憲ヲ犯スノ罪有之、
 尋問ノ為メ西郷陸軍大將外二名、衆ヲ帥ヒ此ニ至ル、
 然ルニ当県鎮台名義ヲ弁セス、城ヲ閉チテ迎ヘ拒キ人
 民ヲ防害スル、其罪甚シ、我衆憤怒シ、將サ二日ヲ刻
 シ、城中ヲ鑿シニセントス、然レトモ矇昧脅徒ノ輩、
 其情憫ムヘキニ在リ、諸口ノ前非ヲ悔ヒ、兵器ヲ捨

テ來服スル者ハ必スシモ其罪ヲ問ハス、且ツ山鹿・高
 瀬諸道ノ東軍、我悉ク之ヲ撃破ス、各県義兵ノ起ル、
 蜂集ヲ破ルカ如シ、然ルニ公等猶孤城ヲ守リ、粮尽キ
 援絶ヘ、危キコト瞬息ニアリ、公等其レ速ニ向背ヲ決
 セヨ、

三月

薩摩陣中

手筈ニ左ノ文ヲ想書ス、

ヲ、エンハ皆ウチャフリ、籠城ノトモカラ兵器ヲ捨
 テ降ルモノハ命ヲ助ルモノナリ、

三月十三日、昨日午後五時ヨリ段山攻撃ヲ始メ、本日午
 後三時ニ至リ賊兵敗走ス、此戦ヤ開戦已來之大激戦ニシ
 テ、現ニ賊尸ノ戦跡ニアル者百余、官兵死傷九十名余、
 生擒者四名、小銃二百有余、彈藥千有余、筒其他刀劍等
 ヲ分捕ス、○斃死及賊兵、木札ニ薩州村尾直三郎、裏二五
 ノ八番小隊ト書スルヲ付タルモノ、左ノ書翰ヲ懷中セリ、
 去ル二月十七日、庁下発程、伊集院町ニ而昼休、市來
 港町ニ泊、同十八日、川向町ニ昼休、阿久根ニ泊、同

十九日、野田麓ニ昼休、出水麓町ニ一泊、同廿日、米ノ津ヨリ乗船ニテ、同廿一日、熊本県下松橋ニ着船、此夜直ニ未明迄ニ熊本城ニ達ス、同廿二日、終日戦争、同廿三日ヨリ廿六日迄、城中ノ敵兵不出、之カ為メ榭外ヲ守ル、同廿七日、高瀬ト申村ニテ戦争、味方ノ兵少シテ甚タ苦戦セリ、同廿八日、又植木町ト申野町ニ退陣ス、木葉ト申処ニ進軍致候処、味方ノ兵少シテ苦戦ニ付、退テ田原村ニ宿陣ス、同四日ヨリ六日迄不止戦、同七日、切込ニテ全ク勝利ヲ得タリ、首ヲ得ルコト八十九ナリ、同八日、二本木町ト申処ニ帰陣ス、同九日モ止休、前件之通再報仕候事、

丑三月

三月十四日、賊兵所々ノ砲台ヨリ城中ヲ射撃スルコト如例、三月十五日、台兵ノ放火ニ罹リ本妙寺焼失ス、聚糧ニ出セシ者各処ニテ麦・豆・蕎麦等ヲ都合百五十俵ヲ取帰レリ、三月十六日、聚糧ニ出セシ兵、米粟合シテ百三十俵ヲ取帰候、三月十七日・十八日・十九日、二月廿二

日ヨリ本日迄、我台兵及東京警部・巡查死傷、左ノ如シ、一死百二十人 内上士官十人 警部六人 下士官以下七十二人 巡查三十二人 一傷三百四十九人

内上士官九人 警部七人 下士官以下二百四十七人 巡查八十七人 死傷惣計四百六十九名

三月廿二日霾風、午後六時、県庁雇古城貞ヲシテ南関飯庁、且ツ団兵ノ在所ニ城中ノ形情ヲ報告セシム、三月廿二日・廿三日、去ル廿日出城シタル巡查中村匡行帰營シテ、植木口ノ官軍ハ植木町ヲ放火シテ、向坂ニ押シ来リ居ルコトヲ報ス、三月廿四日・廿五日・廿六日午後第六時、県庁仕丁雇阪田吉郎ヲ出城セシメ、飯庁并二団兵ヘ城中之形情ヲ告ケシム、三月廿七日午前第五時、台兵・巡查一大隊ヲ三道ニ分ケ、京町ヲ追撃ス、我兵奮戦、所々ノ砲台ヲ落シ進ンテ成兵ヲ所置ス、此日ニ至リ、京町全ク我有トナル、三月廿八日、福島文吾ナル者、団兵ノ命ヲ受ケ、団ヲ犯シテ城中ニ来リ、植木江戦鬪ノ情ヲ

告ケ、且五日内ニ熊本ニ進入スルコトヲ報ス、三月廿九日
 日岡三日前ヨリ賊坪井・井芹川ノ下流ヲ堰キ留メ、満川
 漲流ス、○午後八時過、花岡山ヨリ発スル処ノ砲丸、県
 庁回階ノ土蔵ニ当リ着発シ、火既ニ家根裏江燃ヘ付カン
 トス、県官ハ勿論、歩徒ノ兵卒馳集リ、漸クシテ消シ留
 ル(古キ土蔵燒失スルノミ)、三月三十日・四月四日、花岡山ト長六
 橋ノ賊、連リニ発砲スルコト凡三四十発、県庁内ニテ着
 発スルモノ七八発、幸ニシテ傷ヲ蒙ルモノナシ、○履熊
 野五藏ヲシテ、高瀬ニ在ル官軍及ヒ仮庁ヘ、城中ノ消息
 ヲ通スル為メ、暗号之書付ヲ持セ出城セシム、四月五日、
 昨日ノ如ク県庁内四五発ノ破裂丸来リ、夜家根裏ニ燃移
 リ、漸クニシテ消留ス、四月六日、又前日之如ク賊ノ砲
 丸数十、県庁内ニテ着発シ、県庁為ニ焼出サントスルコ
 ト二度ニ及ヘリ、四月七日、城中糧食ノ乏シキ論ヲ待タ
 ス、然レトモ万余ノ団兵二三里外ニ進ミ来リ、日々夜々
 山岳ヲ崩ス戦声耳ニ在ルヲ以テ、不日城ノ囲ミモ解ケン
 ト砲声ヲ力ニテ孤城ヲ守リ、三度ノ食モ百飯ヲ喰ヒ居シ

カ、賊兵東西ニ流ル、(坪井・芹川)ノ両川ヲ堰キテ
(常水ヨリ高キコト丈余ニ及ヘリ)、東西南ノ三道絶チ、此レハ(植木ニ出ル本道)
 数重ノ壘ヲ築キ、城兵ノ突出ヲ防ク、此ニ至リ一粒ノ米
 粟モ集取スルニ術ナク、依テ今日ヨリ城中一統(病院ヲ除局名ヲ)
 朝夕ハ粥、昼ハ粟飯ヲ食シ、漸クニシテ今八十一日
 ノ命ヲ繋クニ足レリト、四月八日、一大隊突出シテ団兵
 ニ応ス、四月十四日、川尻口ノ団兵熊本ニ入ル、城中歡
 喜ノ声山岳ヲ崩ス、四月十五日、植木口ノ団兵熊本ニ入
 ル、四月十六日、山県陸軍卿・大山大輔着、総督宮ハ明
 日着ノ筈、○県官何レモ無事勉勵、御安心可被下候、
 四月十七日 熊本城中ニ而 品川弥二郎
 内務卿閣下
 或人ノ狂歌ニ
 大山ヲ。カケソコノウテ。サイゴニハ。ヨモイ切り
 ノト。共ニシノワラ。

文書原寸 縦一九糧 横二九糧